翅田大介
カバーイラスト+キャラクターデザイン
津路参汰（ニトロプラス）
イラスト
Ryuki
メカニックデザイン
石渡マコト（ポリゴン番長）
神話大戦
ギルガメッシュナイト
-Gilgamesh Knight-

目次

序章　嵐ノ夜
一章　邂逅ト覚醒
二章　天命ノ書版
三章　少年ト少女
四章　夜宴ノ開始
終章
あとがき

序章　嵐あらしノ夜

「この子を助けて！」

甲かん高だかく悲痛な叫さけびが、嵐の咆ほう哮こうを切きり裂さいて響ひびき渡わたった。

夜空を覆おおう暗雲が稲いな光びかりを迸ほとばしらせ、暗黒の世界を束つかの間ま照らし出す。

地じ滑すべりがあったのだろう。土ど砂しやが木々を薙なぎ倒たおし、山の斜しや面めんが大きく抉えぐれている。何らかの工事現場だったのか、泥どろの中には脚きや立たつや照明機材らしきものがぐしゃぐしゃに歪ゆがんで埋うまっていた。

雷らい光こうはさらに、小さな人ひと影かげを照らし出す。

幼い少女だ。十歳さいそこそこだろう。地滑りに巻き込まれたのか、全身泥だらけだった。

少女の腕うでの中には、彼かの女じよよりもさらに幼い少年が抱だかれていた。少女同様泥だらけだが、その泥は赤く染まっている。

血だ。

胸が大きく裂け、そこから夥おびただしい量の血が流れ出ている。

血泥で真っ赤に汚よごれきった少年はぴくりとも動かない。力なくだらりと垂れた腕が、少女の動きに合わせて小さく揺ゆれるだけだ。

「お願い！　この子を助けて！」

もう死んでいる――まだ息があったとしても助かりようがない死人同然の少年を掻かき抱いだき、少女は雷らい鳴めいに負けじと声を張り上げた。

少女が救いを求める先には、奇き妙みような男が立っていた。ボロボロの外がい套とうをローブのように纏まとった蓬ほう髪はつの男だ。見た目だけならホームレスじみているが、立つのも難しい激しい風と雨の中、小こ動ゆるぎもせず超ちよう然ぜんとしている。

「……対価が要いる」

ひどい嵐にも阻そ害がいされず、男の声が明めい瞭りように響く。穏おだやかながら力強い、深遠な知性を感じさせる声だった。
「何だってあげるわ！　わたしの命でも魂たましいでも！」
「見上げた心意気だが、対価を払はらうのはお前ではなくその少年だ。彼かれを助けるには奇き蹟せきが要る。そして奇蹟を受けた人間には、相応の運命が付き纏う。奇蹟に見合うだけの運命が」
男の言葉の預言めいた重々しい響きに、必死だった少女がごくりと息を呑のんだ。
「お前に、その少年をそんな運命に放ほうり込こむ権利があるのか？　彼が辿たどるだろう新しい運命は、あるいは死より辛つらいものかも知れんのだぞ？」
「……だったら！」
腕の中の少年をきつく抱き寄せ、少女は涙なみだも迷いも切って捨てる鋭するどい視線を男に返した。
「この子が負う運命は、わたしが背せ負おう。この子が助かるなら、わたしは何だってしてやるわ！　だからお願い！　この子を助けて！」
「……他人の運命を肩かた代がわりすることなど誰だれにも出来はしない。だが、そこまでの覚かく悟ごがあるのなら――いいだろう。俺おれもその少年には借りがある。俺も、覚悟を決めよう」
男はそう言うと、懐ふところに手を入れ、何かを取り出した。
それはどうやら、石版の欠片かけらのようだった。
黒と見まごう深い青色で、大きさは掌てのひらと同じか少し大きいくらい。
表面にはびっしりと文字が刻まれているが、その文字は現在の文字体系とはまったく異なるものだった。象形文字とも違ちがう。敢あえて挙げるなら、遥はるか太古――もっとも旧ふるい文明で扱あつかわれていたという『楔くさび形がた文字』に近きん似じしていた。
「――神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　我、深淵

アプスの主エンたる権限を以もって命じる！　赤き土より生まれしアルルの子らを祝福し給たまえ！」

　男が掲かかげた手に掴つかまれた石版の欠片が、星光の如ごとき白銀の輝かがやきを放ち始める。

「魔ま力りよく光こう……」

　少女が呟つぶやいた。

　白銀の輝きはどんどんと光量を増し、風を圧し、雷かみなりを遠ざけ、地上を押おし潰つぶさんとしていた暗雲の闇やみすらも退かせる。

　嵐を鎮しずめた光はさらに強さを増し、男を、少女を、そして目を閉ざしたままの少年を、音もなく飲み込んでいった。

一章　邂かい逅こうト覚かく醒せい

1

宿すく儺な星せい一いち郎ろうの朝は早い。

五時にセットした目覚ましが鳴る三十秒前に目を覚まし、タイマーが作動したと同時にスイッチを切る。目覚まし機能が役に立っているのかいないのか曖あい昧まいなデジタル時計を手に取ると、日付けは七月二〇日を示していた。

ほっ、と小さく息を吐はくと、星一郎は勢い良くベッドから起き上がった。

まずは着き替がえを持って脱衣所へ。洗せん濯たく機きへそのまま放り込もうと寝ね巻まきを脱ぬぎ放っていると、ふと鏡に映った自分の姿が目についた。

そこそこ鍛きたえているのでまずまず見み栄ばえのする上半身が顕あらわになっているが、それより何より目立つのは、胸のど真ん中に刻まれた大きな傷痕だ。

大穴を慌あわてて埋め直したように歪いびつに引ひき攣つった傷痕が、胸の中心から放射状に広がっている。かなり古いものだが、その大きさ故ゆえに否いや応おうなく目立ってしまっていた。

「――ようやく今日で水泳の授業から解放されるな」

星一郎は胸の傷痕に触ふれて苦く笑しようした。

気を取り直すように顔を洗い、拭ふいたタオルも寝ね巻まきと一いつ緒しよに洗濯機へ放り込んで蓋ふたを閉める。スイッチをオンにすると、着替え終わった星一郎は脱衣所を出た。

キッチンへ入るとエプロンを着け、冷蔵庫からペットボトルに保存してある合わせダシを朝食分だけ鍋なべに開けて弱火にかけ、その間に卵をボールでかき混ぜる。今朝は甘あまい卵焼きを要望されていたのでタップリと砂糖も入れる。手早く卵を巻き上げて巻まき簀すで形

を整えているとダシが温まった。昨日の残りのほうれん草のおひたしをそのまま放り込んで味み噌そを薄うすめに溶とかして火を止めると、リビングの時計はきっかり六時を指していた。

星一郎は「よし」と頷うなずいてキッチンを出た。

キッチンから二番目のドアを礼れい儀ぎとして軽くノックしてから開く。床ゆかに積み上がった大量の書しよ籍せきと書類を爪つま先さき立だちで避さけて窓まど際ぎわへ立つと、一気にカーテンを開いた。

「ひゃあああああああああああっ！」

ベッドの上のシーツの塊かたまりが悲鳴を上げる。

星一郎はいつものように軽くため息を漏もらしてから近寄り、シーツの端はしを掴んだ。

「いやー。いやよ星くん。まだ寝ねかせてぇ……」

「容よう赦しやなく叩たたき起おこせって言ったのは叔お母ばさんでしょ？」

容赦なくシーツを引っ剥ぱがす。シーツの下には上等なスーツをしわくちゃに着き崩くずした女性が、子供っぽく身体を丸めていた。

「またスーツのまま寝たんですね……しわになるから着き替がえてって言いましたよね？」

「だってー、疲つかれてたんだもん……星くんも着替え手伝ってくれないしぃ」

女性はベッドの上をごろごろ転がって不満を表した。中ちゆう途と半はん端ぱにボタンを外したシャツから淡あわいピンクのブラに包まれた胸が惜おしげも無く晒さらされる。

十七歳の男子には目に毒な光景だが、星一郎はむずかる女性から遠えん慮りよなくジャケットやスカートを引っ剥がしてゆく。こういうのは思い切りが大事だ。むしろちょっとでも躊ちゆう躇ちよする方が命取りなのだと、イヤというほど経験済みだった。

「朝ごはんがもうすぐ出来ますから、シャワーを浴びて目を覚まして下さい。ちゃんと叔母さんの要望に応えて甘い卵焼き作ったんですか

ら」
「オバサンなんて言っちゃいやぁ……圭けい子こって呼んでぇ……」
「しゃんとしたら呼びますよ、圭子叔母さん」
　下着を残してシャワーを浴びるお膳ぜん立だてを整え、しわになったスーツを手に部屋を出る。キッチンへ戻もどろうとした星一郎だが、ふとリビング横の部屋のドアを見み詰つめた。
「……」
　星一郎は切なげな眼めをしてドアに触れ、すぐに表情を戻して廊ろう下かを後にした。

「いただきます」
「いただきまーす！　……うーん、甘あま美お味いしい！　さすが星くんね」
　無む邪じや気きに笑って玉子焼きを頬ほお張ばる叔お母ばに、星一郎は困ったように苦笑した。
　叔母の宿儺圭子は有名企業の研究所に勤める優ゆう秀しゆうなエンジニアだ。ピシッとしたスーツの上に白衣を羽織ればいかにもデキる女研究者だが、家の中では子供っぽい性格を隠かくさない。そのギャップが可愛かわいいといえば可愛いのだが、星一郎にとってはすこし複雑である。
「ん？　どうしたの星くん？」
「そういう無防備な顔、職場の人たちは知らないんだろうなって思いまして」
「そうよー？　ほんとうの私を知ってるのは星くんだけなんだから」
「本当は彼かれ氏しにだけ見せる方がいいと思いますけどね」
「彼氏なんてムリムリ。女の賞味期限はクリスマスケーキと同じよ。二十五過ぎたら叩き売り。こんなアラサー女を欲ほしがる男はいないわよー」

あははと笑う圭子だが、彼女の見た目は若々しいし、身体からだつきだって研究人間とは思えないほど引き締まっている。
身内贔びい屓き抜ぬきに、素す直なおに美人である。彼氏くらいあっさり作れそうなものだ。
「むしろ星くんは彼女つくらないの？」
「考えたこともないですよ」
星一郎は苦笑し、誤ご魔ま化かすようにテレビを点つけた。
『――御ご門もん工業はこの度たび、新型のＭＡＲメーデバイスを発表しました。この新型デバイスは従来に比べて搭とう載さいできる魔ま術じゆつ構文の容量が百倍以上に達しており――』
「これ、先月まで圭子さんが関かかわってたプロジェクトの製品ですよね？」
「これ？　言っちゃなんだけどあまり大した事無いわよ？　魔導晶体マギア・シリコンの記憶容量こそ増えたけど演算速度は据すえ置おきだし。今以上の容量があっても、一いつ般ぱん人じんに使えるか疑問だしね」
テレビ画面では、女性アナウンサーがスマートフォン型の新型ＭＡＲデバイスを実演している。白銀の魔力光とともに着火などの簡易な魔術が起動していく。
「むしろ必要なのは、構文のスリム化よ。『魔ま導どう工学』は成立から二十年そこそこ。まだまだ古典魔術のマッチングには課題が多いわ。その点、摩ま子こちゃんは構文を整理するのが上う手まかった――」
流れるように話していた圭子の言葉がピタリと途と切ぎれた。
「……ごめんなさい、星くん……」
「大だい丈じよう夫ぶですよ」
気まずい顔をする叔母に、星一郎はなんて事ないように笑い掛けた。
「もう一年も経たってるんですから。いつまでも気にしちゃいられません」

「……うん」
「この話はこれでおしまい。ほら、ごはんが冷めちゃいますよ？」
　星一郎に促うながされ、圭子は朝食を再開した。
　やがて朝食を終えて星一郎が食器を洗う頃ころには気まずい空気は吹き消え、二人は通勤通学の前のお茶をのんびりと楽しんでいた。
「そういえば、圭子さんは今日から研究所に泊とまり込みって言ってましたけど、ちゃんと用意してあります？」
「心しん配ぱい症しようね。ちゃんと用意してあります」
「ほんとうに？　また替えのブラを忘れて着けっぱなしとかは無しですからね」
「着けっぱなんてしてないわ！　ノーブラよ！」
「その方がよっぽど問題でしょうが」
　食器を洗い終えた星一郎が溜ため息いきを漏らすと、圭子は唇くちびるを突つき出だして不満顔になった。
「むぅ……星くんったら、そこはちゃんと顔を赤くしたらどうなの？」
「そんなこと言うんなら、ちゃんと一人で着替えられるようになってください」
「あーあ……ちょっとボディタッチのしすぎかしら……」
　圭子は大げさに天を仰あおいで嘆なげいてみせる。だが、すぐにニンマリ笑って星一郎に意味ありげな視線を向け直した。
「けどけど、そうやってわざわざ確かく認にんするってことは、実は実はもしかして、彼女を連れ込む予定でもあるのかしら？」
「ありませんよ。期待に添そえなくて申し訳ありませんが」
「まったまたぁ！　せっかく夏休みを保護者の目もなく伸び伸びと過ごせるんだから、何か青春の一ページ的な予定くらいあるでしょ？」
「青春の一ページ、ねぇ」
「例えば、ほら……そうそう、いまでも文通してる幼おさな馴な染じみの刀と羽う華かちゃん！　彼女が遊びに来たりしないの？」
「この時季は神社いえの手伝いでてんてこ舞まいですよ。彼女、看か

ん板ばん娘むすめならぬ看板巫み女こですから」
「むぅ……」
「けど、そうですね……圭子さんがそこまで言うなら、青春の一ページに何かバイトのひとつでも探してみようかな？」
「……星くん、高校二年生の夏休みがそれでいいと思ってるの？　お年とし頃ごろの男の子なら、もうちょっとストロベリィな夏休みをね？」
「イチゴは冬の果物ですよ。……っと、そろそろ時間ですね。行ってきます」
　物言いたげな叔母の視線をひらりと躱かわし、星一郎は鞄かばんを掴んで玄げん関かんを出た。
　エレベーターでいつも一緒になるマンションのご近所さんは見当たらないので、星一郎は狭せまい箱の中で遠慮無くやれやれと溜め息を漏らした。
「圭子さんにも困ったものだな……心配してくれるのは嬉うれしいけど」
　叔母には感謝しているが、事ある毎ごとに『学生らしい日常』というやつを期待するのが玉に瑕きずだ。十年前に亡なくなった兄夫婦への責任感からだろうが、星一郎としては圭子こそ良い人を見つけて欲しいものである。
　マンションを出ると、どこからか漂ただよってきた抹まつ香こうの匂においが鼻を擽くすぐった。早朝の京きよう都とならではの匂いだ。
　自転車置き場から自転車を引き出して表に押してゆくと、目の前を鳥らしき影かげが横切った。白しろ無む垢くの石せつ膏こうじみた質感の鳥は、脚あしに掴んでいた弁当包みを自転車の前籠に落とすと、銀色の魔力光に還かん元げんされて幻まぼろしのように吹き消えた。
　顔を上げると、ベランダから圭子がスマートフォンを掴んだ手をひらひらと振っていた。部屋に忘れた弁当包みを『式神アプリ』で届けてくれたらしい。

星一郎は手を振ふり返かえして自転車を発進させた。

御ご所しよ北側を横切る今いま出で川がわ通どおりに出ると、星一郎は寝ぼけ眼まなこの学生たちをすいすい追おい抜ぬいて行く。

途と中ちゆう、スポーツの神様として知られる蹴け鞠まり神社こと白しら峰みね神社の前にさしかかると、

——ふっ。

と、歴史ある趣おもむきの建物が一いつ瞬しゆんで吹き消え、崩くずれた塀へいや足場で囲まれた社しや殿でんなど、修復中と思おぼしき痛々しい姿が顕になった。

まるで狐きつねに抓つままれたような光景であるが、ほとんどの人々はすぐ側を歩いていても気にする様子はない。振ふり向むいた者も、幽かすかに残った魔力光の残ざん滓しを認めて顔を戻してゆく。

星一郎も同様だ。メンテナンス程度をいちいち気にしてはいられない。

ここは、新京都。

古き街並みを魔導工学で復元した、先進魔導工学実験都市だ。

「——京都が崩ほう壊かいしたのは二十年前、今世紀初頭のことだ」

教師の説明を、教室の生徒は寝ぼけ眼で聞くともなしに聞いている。夏休み直前の消化授業であるからしてさもありなんである。

「『世界同時多発魔力災害』——世界各地の霊れい地ちや聖地と呼ばれる地域で、突とつ如じよとして局所的な自然災害が発生した。イギリスのストーンヘンジ、ギリシャのパルテノン神殿、バチカンやイスラエルの大聖堂、インドのスーリヤ寺院など。何の前まえ触ぶれもない突とつ然ぜんの突とつ風ぷうや雷らい雨うは、歴史的な文化遺産を尽ことごとく破は壊かいし尽つくした。我わが国くににおいては、それがこの京都であったというわけだ」

教師は顔を上げて教室内を見回した。

「魔力災害はすさまじい被ひ害がいをもたらしたが、幸いな事に人的被害はほとんど無かった。人口百万都市の京都も同様だ。さて、その

理由は何かね？」
「ふぇ？　あ、はい。星読み……予知の魔術を持つ者たちの忠告があったからです……」
　話題を振られた生徒がおずおずと説明すると、教師は「その通りだ」と頷いた。
「政府の突然の避ひ難なん勧かん告こくに戸と惑まどった人々も、直後に巻き起こった局所災害の光景を見て目を丸くした。そして後になって耳にした避ひ難なんの理由が『予知能力者の忠告に従った』という説明も、現実離れした災害の光景を目まの当あたりにすれば納なつ得とくするしかなかった。そうして世界は、歴史に埋もれていた『魔術』という技術体系を知るに至った」
　教師はそう言うと、教室の窓から市街を眺ながめた。
「……当時の京都市街はひどい有様だった。千年の歴史を誇ほこる古都は更さら地ちも同然の有り様。当然ながら文化遺産の復旧計画が建てられたが、莫ばく大だいな予算と膨ぼう大だいな時間が必要とされた。とはいえ日本の文化の象しよう徴ちようである京都の街並みの復旧は急務でもある。そんな中、古都の街並みを復旧する為ために活用される事になったのが、再さい認にん識しきされたばかりの魔術と、当時研究開発著いちじるしかった情報工学を融ゆう合ごうさせた『魔導工学』の力だ。
　世界同時多発魔力災害を境に上じよう昇しようし続けていた濃のう密みつな魔力を利用した実体を持った立体映像を作り出し、限りなく本物に近い寺社仏閣の再現が行われた。拡張現実を魔力によって実体と化すこの技術は『魔術的マギア・オー拡張グメンテツド現実・リアリテイ』――『ＭＡＲメー』と呼ばれ、魔導工学の基幹技術となった。
　京都はＭＡＲを大だい胆たんに取り入れる事で、仮かり初そめながら古都の街並みを取り戻した。そのおかげもあって京都は魔導工学の先進的な実験都市として、最先端の魔導工学技術が集つどうようになった。その流れで生まれたのが、この私立揺よう光こう学園という

訳だ」
　魔力災害とその後の復旧をつぶさに見てきた教師は厳しい面おも持もちで生徒たちを見回した。
「この学園は日本でもまだ数少ない魔導工学の専門教育を受けられる。だが、けして勘かん違ちがいしてはいかん。ＭＡＲで形作られた実体幻げん像ぞうは所しよ詮せん仮かり初そめに過ぎんのや。近ちか頃ごろは現実の文化遺産の復旧も『本物そっくりに再現できるなら税金を使うこともない』などと言い出す輩やからもおる。実に嘆かわしい話や」
　標準語を捨て去って昨今の世相の苦言を漏らし始めた教師に、生徒たちが「うへぇ」と顔を顰しかめる。そんな生徒たちの気持ちを察したように終しゆう了りようのチャイムが流れた。教師はスピーカーを睨にらみ、不満気な顔で教室を去る。途と端たん、教室内を安あん堵どと解放の吐と息いきが満たした。
「あー、長くなる前に終わってよかった」
「あの鉄板ネタ、そろそろどうにかしてくれへんかな」
　教室内がざわつく中、星一郎は手早く帰りの支し度たくを整えた。
　窓の外の風景――虚きよ像ぞうと現実が入り交じった京都市街を見るともなしに眺めていると、背中に「宿儺くん」と声が掛かる。振り向くと、数人の女子が立っていた。
「宿儺くん、ちょっと私のＭＡＲデバイス見てくれる？　魔術アプリが立ち上がらなくて」
「私たちじゃ手に負えなくて」
　先頭に立つクラスメイトの鈴すず木きさんがスマートフォン型のＭＡＲデバイスを手にしている。今朝ニュースで見たばかりの最新版だ。ちょっと考え、星一郎は頷いた。
「うん、いいよ。やってみる。見せてみて」
　ＭＡＲデバイスを受け取ると、星一郎は画面上に術式構文を呼び出す。デバイスの側面の緑色のクリアー素材――魔導晶体マギア・シリコンが淡く発光した。

魔導工学の根幹を成すＭＡＲデバイスは用よう途とによって様々な形を取るが、魔導晶体に術式を保存しておくのはどれも同じだ。逆に言えばこの淡たん緑りよくの結けつ晶しよう体たい――神秘を保存しうる現代の魔術書グリモアこそが、ＭＡＲデバイスの中ちゆう枢すうであると言っても良い。

魔導晶体に保存された術式構文を、星一郎は熟練のプログラマーのように高速で流し見てゆく。魔導工学の発ほつ端たんとなった両輪の一方が情報工学である以上、その特とく徴ちようが似通うのは当然の事だ。だが画面に表示されるのは、文字と数字列に限定しない、複雑極きわまりない図形と呪文列。魔導工学に最適化された、最新の魔術式であった。

ややあって、星一郎は術式構文のスクロールを止め、納なつ得とく顔がおで頷いた。

「なるほど……思念感応式の閾いき値ちがずいぶんと低く設定されてる。これだとかなり不安定になるんじゃないかな」

「直せる？」

「まぁ、なんとか」

星一郎は鞄の中から個人用のタブレット型ＭＡＲデバイスを取り出した。受け取ったスマートフォン型のデバイスを接続し、問題の構文を書かき換かえてゆく。

三分と掛からずに修正を終えると、完全な最新デバイスを持ち主に返した。

「これで問題無いと思うよ。何か適当な術式で試ためしてみて」

「う、うん……」

鈴木さんは胸ポケットに入れていた一見眼鏡に見えるゴーグルを掛け、返されたデバイスに収納されていたコードを伸ばしてゴーグルに繋つないだ。

魔術を機械的に再現する魔導工学においても、魔術は人間が居なければ発動しない。どれほど神秘的で奇き跡せき的てきな出来事であろうと、観測され認にん識しきされなければ無いのと同じなのは、現実

も魔術も変わりがないのだ。
　古来からの魔術――現在は魔導工学と区別して『古典魔術』と呼ばれる――が歴史に埋もれて細々としか継けい承しようされてこなかったのは、世界中の魔力が極きよく端たんに減げん衰すいしたのもあるが、なによりも魔力を認識する感覚、いわゆる『霊れい感かん』を持つ者が極端に少なかったからだ。
　その魔力を視覚する『霊視』の能力を機能として落とし込んだ事で、魔導工学は万ばん人にん向けの技術として完成した。彼女が掛けた眼鏡は素養のない者に魔術に必ひつ須すの霊視能力を付ふ与よする、『霊視鏡グラムサイト』と呼こ称しようされる機材だった。
　霊視鏡で魔術を起動するに足る魔ま力りよく濃のう度どを認めると、鈴木さんは登録されていた魔術アプリを立ち上げる。スマートフォン型デバイスの魔導晶体が発光し、彼女が見つめる先に「ぽんっ」と可愛らしいエフェクトを伴ともなって正体不明のマスコットが現れた。
「ぬえちゃん！　良かった！」
　どうやら『鵺ぬえ』をマスコット化したらしき電脳ペットならぬ式神ペットを抱かかえ、鈴木さんは星一郎に笑え顔がおを向けた。
「ありがとう宿儺くん！　助かったわ！」
「どういたしまして」
　ＭＡＲデバイスをしまい、星一郎は軽く微笑ほほえみ返した。
　宿儺星一郎は、この揺光学園においてよく知られた有名人であった。魔導工学の抜きん出た知識と技術を備え、「教師よりも分かりやすい」としてアドバイスを受けに来る者も多いが、それを鼻にかける様子が微み塵じんもない。もっともこれは彼が荷物を運ぶのを手伝ったくらいにしか意識していなく、その程度で偉えらぶるのも格好悪いと思っているからだが。
　おかげで「嫌いや味みのない優等生で、しかもそこそこ顔も良い」と受けも上々である。
　――だから、

「すごいわね星一郎くん。さすがは〝天才魔導工学士〟宿儺摩子の弟よね」
　女子の一人が漏らした一言は純じゆん粋すいな褒ほめ言こと葉ばであったが、クラスの中が一瞬で凍こおり付ついた。一いつ瞬しゆん遅おくれてその女子が失言に気付いてあっと口を押さえる。
「ご、ごめんなさい、宿儺くん……」
　女子たちが慌てて頭を下げる。
　恐きよう縮しゆくした彼女たちに、むしろ星一郎が申し訳ない気分になった。
「気にしないで。もう一年も前のことだから。あ、そうだ、鈴木さん。一応メーカーサポートに見てもらった方がいいよ。たぶん同じような苦情が寄せられて、適正な値域が設定されてると思うから、それに合わせた方が後々楽かもだし」
「え、ええ……ありがとう。ごめんね、宿儺くん」
　鈴木さんは頭を下げ、失言した友人を押してその場を後にしていった。それでさっきの言葉も終わりだという雰ふん囲い気きになり、クラスの緊きん張ちようが幾いく分ぶんか和やわらいだ――その矢先。
「ああ、そうだ。言い忘れていたが……」
　出て行った筈はずの教きよう諭ゆが戻ってきて、いましも視線が集中していた星一郎に目を向け、
「……宿儺。終業式が終わったら職員室まで来なさい」
　名指しで呼ばれ、星一郎は首を傾かしげた。

　終業式の後、職員室へやって来た星一郎は、クラス担任に小会議室へ連れて行かれ、待機していた学年主任も交えての話し合いとなった。
「すまないな、宿儺」
「いえ。それで、ご用は何でしょうか？」
　星一郎が問うと、クラス担任と学年主任が顔を見合わせ、改まった様子で姿勢を正した。

「実はな、宿儺……お前に飛び級推すい薦せんの話が来ている」
「飛び級、ですか？」
「ああ。来年、ウチの大学試験を受ける気はあるか？」
「ありがたいお話ですが……なんで僕ぼくに？」
「……正直、高等部の魔導工学論でお前に教えられる事はほとんどない。まぁ、それも当然だがな。こと魔導工学において、お前ほど恵めぐまれた英才教育の環かん境きようが身近にある例は皆かい無むと言って良い。だから、大学レベルの教育を受ける方がお前の為だろう」
「はぁ……」
「本当は去年から話題は持ち上がっていたが……お姉さんの事故でお前も慌ただしかったろうから控ひかえていた。しかし、もう一年だ。どうだ？　そろそろ新しい一歩を踏み出しても良い頃ころ合あいだと思うが？」
「――ありがたいお話ですが」
　星一郎は顔を隠すように教師たちへ頭を下げた。
「なにせ急なお話ですので、しばらく考えさせていただけますか？」
「ああ……そうだな。明日あしたから夏休みだ。保護者の方ともよく話し合いなさい」
「はい。それでは、失礼します」
　もう一段深くお辞じ儀ぎをし、星一郎は素す早ばやく立ち上がって小会議室を後にした。
「……」
　廊下をしばらく進んで人目がなくなると、ぐっと握にぎっていた拳こぶしを解き、ふぅと詰つめていた息を吐いた。
「……新しい一歩、ね」
　星一郎は、先さき程ほどから浮うかんでいた口元の笑えみを深めた。冷ややかな自じ嘲ちようの笑みだった。
　とんだ笑い話だった。考えさせてくれなどと言ったが、断ることはすでに決まっていた。

新しい一歩。そういう物言いは、ちゃんと目標が定まっている者に掛ける言葉だ。目的を見つけ直すことが出来た者へ対しての言葉だった。

目的を喪うしない、未いまだ何ら目標を見み出いだせない者に言ってみても、ただただ虚むなしいだけだ。

もしあの申し出があと一年早かったなら、星一郎もすぐに頷いていたのだろうが。

「……もう一年になるのか」

呟き、星一郎は廊下の窓から外を見上げた。

吸い込まれそうな青空に、掴み取れそうなほど分厚い入道雲が積み重なっている。室内こそ空調が効いているが、その景色だけでじっとりと汗あせが滲にじみだす真夏の空であった。

――あの日も、こんな暑い日だった……

嫌みなほどの蒼そう天てんを見上げ、星一郎は声なく独ひとり言ごちた。

2

――嫌味なくらいの青空だ……

夏の日差しを遮さえぎることのない真っ青な蒼そう穹きゆうを見上げ、『彼女』は声もなく自嘲した。

彼女が蹲うずくまるのは、陽ひの光の射ささない路地裏だった。夏を主張する快晴の下でこんな場所に身を潜ひそめねばならなければ、自嘲のひとつも浮かぼうというものだった。

「……いや、違う……」

ぼそりと呟き、彼女は壁かべに手を突き立ち上がった。

「……こんな風に逃げ隠れする自分が不ふ甲が斐いないだけ……！」

噛かみ締しめた歯の隙すき間まから、苦しみの混じった声が漏れた。

はぁはぁと荒あらい息を吐きつつ立ち上がり、壁に体重を預ける。

なんとか、ほんの僅わずかでも呼吸を整えねば――
「……そうはさせない、か……」
　自分を追い立てる狩かりゆう人どの気配が迫せまってくるのを感じ、彼女はまだ落ち着かぬ心肺を何とか宥なだめ、脇わき腹ばらを押さえながら路地裏を後にした。

※　※　※

　放課後を迎むかえた星一郎は、自宅とは反対方向へ自転車を走らせた。
　東ひがし大おお路じ通どおりを横切るに連れて徐じよ々じよに人気が薄くなり、白しら川かわ通どおりを通り過ぎるとほとんど人気がなくなり、罅ひびの入った建物だけが残されたゴーストタウンがひょいと顔を覗のぞかせる。
　二十年前の魔力災害の爪つめ痕あとが残る、『洛らく外がい』と揶や揄ゆされる再開発地域だ。
　歴史ある寺社仏閣や門前町の復興再現が進む中、後回しにされた洛外は新京都の各所に虫むし喰くい穴のごとく散在する。識者などは『魔力災害の恐おそろしさを伝えるために保存すべきだ』などと言うが、いずれにせよ拭い得ぬ気味の悪さからほとんど手も付けられず放っておかれているのが現状だった。
　星一郎にとっては都合がよい。
　比ひ較かく的てき損傷の少ない建物の前で自転車を停とめる。もとは何を作っていたかは判わからないが、工場跡と思しき大きなコンクリート造りの建物だ。
「……ん？」
　錆さび付いた門もん扉ぴを開こうとして、星一郎はぴくりと手を止めた。

膝ひざを突いて門と柵さくにじっと目を凝こらす。はいえ、特に変わったものは見受けられない。あるのは罅割れたアスファルトと、そこから伸びた雑多な雑草ばかりだ。

「……」

星一郎は緊張した面持ちで慎しん重ちように門を開き、足音を忍しのばせて敷しき地ちへ足を踏み入れた。

工場跡の建物には、大きな荷物を運び出すための巨きよ大だいなスチールのスライドドアがあり、その横に人間用のドアがある。密ひそかに油を注さしてあるそのドアを開くと、中はがらんとした広いスペースが広がる。すこし考え、星一郎はあえて真ん中を堂々と歩いて行った。

一階を見下ろすように張り出した二階の屋根の陰かげに、人影が蹲うずくまっている。すでにこちらに気付いていたのだろう。窺うかがうような視線を感じた。

近付くにつれ、星一郎は意外な思いに表情を歪めた。個人的な隠れ家に何者かが立ち入ったのは察していたが、その侵しん入にゆう者しやはいくつか想定していた人物像からかけ離はなれていた。

廃はい工こう場じようの奥おくに身を潜めていたのは、星一郎と同年代の少女だった。しかも美しい金きん髪ぱつの外国人で、おまけにめったに見られないくらいの美少女だ。

腰こしまで届く長い金髪は淡い濃のう淡たんを見せて艶つややかに輝いている。こちらを窺う瞳ひとみは蒼穹を思わせる鮮あざやかな青。整った面おも立だちは毅き然ぜんと引き締められ、貴族の令れい嬢じようのような気品すら感じさせた。格好こそ動きやすそうなラフなものだったが、こんなかび臭くさい工場跡はあまりに場ば違ちがいで、時代がかった社交場でドレスを着ている方が何倍も似合うだろう。

「……止まれ」

がらんとした工場跡の空気がぴんと引き締まる、凛りん、とした声。

星一郎は少女と三メートルほどの距きよ離りを置いて立ち止まる。
「……貴方あなたは何者だ？　見たところこの工場の関係者には見えないが？」
金髪の少女は流りゆう暢ちような日本語で問とい質ただした。
「――ただの学生だよ。勝手にこの工場を隠れ家に使ってる、ね」
「……こんな洛外の廃はい墟きよで一体何を？　見たところ不良にも見えないが？」
地元限定の隠いん語ごを知っているとは、彼かの女じよはかなり新京都に精通しているようだ。進出している外国企業の関係者だろうか？
少女の正体を思案する星一郎だったが、それよりも気になるのは彼女の様子だ。声はしっかりしているが、蹲った彼女はずっと左脇腹を手で押さえている。
「……もしかして、表の〝結界〟は貴方が張ったものか？」
星一郎は頷いた。
この工場跡の敷地に、星一郎は人ひと避よけの〝結界〟を張っていた。魔導晶体を利用した特とく殊しゆなインクで魔ま法ほう陣じんが描えがかれ、人間の無意識に恒こう常じよう的てきに作用している。誰かが偶ぐう然ぜん紛まぎれ込むことはないし、もし自分以外の人間が立ち入ればすぐ分かるようになっていた。
先ほど、星一郎は常人には見えない魔法陣を見ていたのだ。たとえ傍はた目めには何も異常がなく映ろうと霊視力の――『見けん鬼き』のある人間にははっきりと陣の変化が視みて取れる。
「できれば役所に通報しないでくれる？　人の寄り付かない洛外といっても、不法侵入には違いないから」
冗じよう談だんめかす星一郎に、金髪の少女はじっと視線を注いだ。
「……工事業者や役所の人避けにしては妙みように高度だと思ったが、貴方が作った術式ものか。わたしが侵入したのにも気付いていたな？　上手く誤魔化せたと思ったのだが……」

　少女はふっと力を抜いた。緊張を解いて表情を和らげ、彼女は星一郎へ微び笑しようした。
「なるほど……工場跡ここはさしずめ貴方の秘密の訓練場というワケだな。無ぶ粋すいな真ま似ねをしてすまない」
「勝手に場所を拝借してるだけで、もともとは他ひ人と様さまの土地だけどね」
「確かにそれは褒められたことではないが……良い腕うでであるのに違ちがいはない。良い術士だな、貴方は」
「……あ、ありがとう……」
　思わず見み惚とれていた星一郎は慌てて礼を言った。美人には耐たい性せいがある筈だったが、彼女の笑顔はちょっとやそっとの耐性などものともしない破は壊かい力りよくだった。
「……だが」
　それだけに、彼女が続けて放った声の厳しさが、星一郎の背筋をひやりと震ふるわせた。
「すぐにここを立ち去った方がいい。本来ならわたしが出てゆくべきところだが、情けない事にしばらく動けそうにないのでな……」
「……怪け我がをしているんだね」
　少女がずっと押さえる脇腹に目をやり、星一郎は言った。
「何か事情がありそうだけど、このまま立ち去る事はできない。せめて傷の手当てをさせてくれない？　血止めと治ち癒ゆの魔術式は常に持ち歩いてるから」
「気を使ってくれるのは嬉しいが、貴方の世話になる訳にはいかない……お気持ちだけありがたく頂ちよう戴だいする。どうか、放っておいていただけないだろうか」
「そういう訳にはいかないよ」
　鞄からＭＡＲデバイスを取り出しつつ、星一郎は少女へ一歩踏み出した。
「僕の力が役立つであろう場面に、僕はいる。それに背を向けるなんて、僕はしたくない」

「……貴方は高潔な精神の持ち主なのだな」金髪の少女は眩まぶしいものを見るように碧へき眼がんを細めた。「だが、それには及およばない。むしろどうか、私の為と思って――」

金髪の少女はなおも固辞しようとしたが、言葉を途中で切って整った顔を強こわ張ばらせた。流りゆう麗れいな眉まゆを歪ゆがめて頭上を見上げ、失敗を悔くいるような声を漏らす。

「……遅おそかったか……！」

彼女の言葉が終わらない内に、轟ごう音おんが響ひびき渡わたって工場の天てん井じように穴が開き、何かが勢い良く飛び込んできた。巻き上がった砂すな煙けむりに、星一郎は反射的に腕で顔を庇かばう。

「くかかっ！　ずいぶんとこそこそ逃げ回ってくれたが、それもここまでみたいだなァ！」

土つち煙けむりの向こうから現れたのは、サングラスを掛けた逞たくましい体たい躯くの青年だった。指や腕に大量のシルバーアクセを身に着け、さらには首にまで蛇へびを象かたどった首輪が巻き付いている。

天井から降ってきて平然としているのもさることながら、見た目からして常人ならざる雰囲気である。

いたぶるような笑みを浮かべた青年へ、金髪の少女が厳しい顔で睨み返す。

「……これは協定違反だ。我らの戦たたかいは、まだ始まってはいない。こんな闇やみ討うちに等しい行い、カルディア委員会が黙だまっては……」

「協定、協定ね。ああ、協定は知ってるさ。だがよぅ、この国には『カモネギ』って諺ことわざがあるだろ？　美味しい獲え物ものが目の前に現れて指を加えてるなんざマヌケのやることだ。そして俺おれは、マヌケにはなりたくねぇ。分かるだろ、ディーナ・チャレンジャー？」

ディーナ――それが彼女の名前か。

ぎりっ……と歯を噛みしめるディーナへ、青年は大おお仰ぎような身み振ぶりで肩かたをすくめた。
「諦あきらめて、大人しく俺の獲え物ものになれ。このアルヴィン・ヴァイスが血祭りにあげる、最初の獲物になぁ！」
アルヴィンと名乗った青年は、シルバーアクセまみれの指を鳴らしながらディーナへ近付いてゆく。――が、その歩みが途中で止まり、片眉がぴくりと持ち上がる。
星一郎が、ディーナを守るように立たち塞ふさがったからだ。
「……なんだ、お前は？」
「あなたこそ何です？　彼女の友人には見えませんけど？」
「……お前の仲間か？」
愕がく然ぜんと星一郎の背を見つめていたディーナが、アルヴィンの声ではっと我に返る。
「ち、違う！　その男はただの通りすがりだ！」
「ふぅん？　見たとこ普ふ通つうの学生、ただの一般人か。お兄ちゃんよ、女の前でカッコつけたいのは分かるが、一般人が邪じゃ魔ますんな」
アルヴィンは無造作に歩み寄りながら、虫を払うように腕を振る。勢い良く振り払われた、しかし何の警けい戒かいもない腕を掴み取り、星一郎は逆に投げ飛ばした。
宙を舞うアルヴィンが「お？」と間ま抜ぬけな声を漏もらす。とっさに受け身を取って立ち上がると、ゆっくりとサングラスを外した。
「……ちょっとは腕に覚えがある、と」
鋭するどい目が星一郎を捉とらえる。だが余よ裕ゆうは崩さず、悠ゆう揚ようとした足取りで再び歩き出す。
「だがその程度でどうにかなると思ったら大おお間ま違ちがいだぜ、学生の兄ちゃんよォ？」
「……」
無言で睨み返す星一郎。そんな彼かれの背に、切せつ羽ぱ詰つまった声が掛かる。

「や、やめるんだ！　貴方がどうこうできる相手じゃない！」
「……やってみなきゃ分からないさ」
　首を振って翻ほん意いを促すディーナへ肩かた越ごしに笑いかけ、星一郎は鞄の中に突っ込んでいた手を抜き出した。
「ＭＡＲデバイス？」
　アルヴィンが一瞬だけ足を止める。
　その一瞬で、星一郎はデバイスを起動する。
「〝光ひかり輝かがやけ〟！」
　登録していた言霊プログラムに従い〝閃せん光こう〟の術式が起動。周囲の魔ま力りよくが光に変へん換かんされ、アルヴィンの周囲を音もなく真っ白に塗ぬり潰つぶす。
「うおっ!?　霊視鏡もなく――『見鬼持ち』か!?　だがこんな防犯用の魔術で――」
　舌打ち交じりの悪態が工場跡に響き渡る。
　確かにこの〝閃光〟は防犯用のありふれた術式だ。だが時間稼かせぎには十分。
　星一郎はもう片方の手にスマートフォン型のＭＡＲデバイスを握り込むと、複数の術式を一いつ斉せいに起動する。
　光が晴れ、さして影えい響きようを受けたようではないアルヴィンの足元で、突とつ如じよ魔ま法ほう陣じんが現れる。
「っ!?　魔法陣っ？　いつの間に――」
　どうやらあの青年は勘違いしているようだが、あの魔法陣はずっと以前から床ゆかに刻まれていたものが活性化したものだ。
　この工場跡は星一郎の訓練場――そして実験場だった。人目を憚はばからなければならないような複雑で高度な術式が、いたるところに用意されている。
　その一つ、法陣から発せられた小規模な稲いな妻ずまが蔦つたのごとくアルヴィンの身体に絡からみ付く。
「ぬっ、うっ！　てめえ、何者――」
　大人を数人まとめて気絶させるほどの電でん撃げきを受けても意に

返していない。とはいえ尋じん常じようならざる登場の仕方から、何らかの防ぼう御ぎよ術式を纏まとっているのは想定済みだ。

さらに数本の柱の壁にも陣が浮かび上がり、劈つんざくような轟音が撒まき散ちらされる。その中心では、三半規管を破壊しかねないほどに共鳴し増ぞう幅ふくされているはずである。

とどめに、天井にも陣が煌きらめく。擬ぎ似じ的てきな重力場が襲おそい掛かる。

「……次から次へと……！」

まだ喋しやべれる余裕が見られたが、これだけ複数の種類の術式を重ねれば最高クラスの防御術式だって処理がいっぱいだ。

星一郎はスマートフォンを放ほうり捨てると、短たん杖じようタイプのＭＡＲデバイスに〝昏こん倒とう〟を付与する疑ぎ似じ刀身を形成して走り出した。これを叩たたき込めば無力化は完かん了りようだ。

「だめだ！　どれだけ重ねようと――」

背中にかかる声が終わらぬ内に、アルヴィンが煩わずらわしげに腕を振るう。それだけで、星一郎が用意していた魔ま術じゆつは効果を失い、法陣が魔力光を撒き散らして砕くだけ散った。

瞠どう目もくする星一郎だが、いましも振り下ろさんとしていた短杖から伸びた光の刀身がアルヴィンに握りしめられた途と端たんに霧む散さんするのを目にして正しよう真しん正しよう銘めい絶句した。身体の何ど処こにあたっても、あの刀身はすぐさま〝昏倒〟の魔術を相手にもたらす筈なのに。

驚おどろきで生じた一瞬が、今度は敵を利する。

アルヴィンはアクセだらけの拳を握りしめ、星一郎へ振り下ろす。

とっさに受け流そうとした星一郎だが、そんな彼を嘲あざ笑わらう圧あつ倒とう的てきな力に腕が弾はじかれまともにパンチを食くらう。首の骨が折れてないのが不思議なくらい、常人離れした膂りよ力りよくだった。

頬ほおに貰もらった衝しよう撃げきのまま吹っ飛び、星一郎は頭か

ら床に倒れ込む。呻うめく間もなく、今度は腹に衝撃。自分の体が冗談みたいに宙を舞うのを、妙に間延びした感覚の中で理解する。

ボールのように蹴け飛とばされた星一郎は反へ吐どを撒き散らしながら床をごろごろと転がった。デバイスはとっくにどこかへ吹き飛んでいた。

たった二撃。

たったそれだけで、全身で痛くないところを探す方が難しくなっていた。手足がちゃんと付いてるのかも怪あやしいが、いっそない方が楽と思えるくらいに激痛まみれだ。

血の混じった呻きを漏らしていると、容よう赦しやなく襟えり首くびを掴つかまれて吊つり上げられる。喉のどが詰まり、呻き声すら上げられなくなった。

「……なるほどな。ただ闇やみ雲くもに逃げてたワケじゃない。仲間と合流して罠わなに嵌はめようしていたワケか」

凶きよう暴ぼうな笑みを浮かべたアルヴィンが、吊り上げた星一郎を苛いら立だたしげに揺ゆさぶる。

「『カモネギ』を装おって罠にハメようとしてたワケか、この俺を」

「……愚ぐ弄ろうするな……！」

嘲笑われたディーナが奥おく歯ばを噛み締め、膝に手を当て立ち上がる。

「戦うなら正々堂々とする……その男はわたしとは無関係だ。降ろせ！」

「今いま更さらトボケてもムダだ。これだけの力量の魔ま工術士が偶ぐう然ぜん通りかかるかよ」

「違う！　彼は……」

「意外と頭に来たぜぇ。お礼だ、まずはこいつを血祭りに上げる。念入りに手足を砕いて、存分に悲鳴を聞かせてやるぜ。お前の『書版』を砕くのはその後だ」

アルヴィンは嗜し虐ぎやく的てきな笑みを浮かべてディーナを罵ば倒とうした。

――星一郎から顔を逸そらして。
「ぐっ、がっ……」
何とか気道を確保する。痛みでぶるぶると震える両りよう腕うでを上げ――
――パン……
「――〝伊邪那岐イザナギノ神ノ産ミ給ヒキ火ノ夜芸速男ヤギハヤオノ神。又またノ名八火ノ炫毘古カガヤビコノ神、又ノ名八火ノ迦具土カグツチノ神〟ッ！」
柏かしわ手でと言霊。突つき出だした手の先で「あ？」とアルヴィンが振り返り、その無防備な顔を炎ほのおが飲み込んだ。
完全な不意打ち。皮ひ膚ふはともかく、呼吸器を確実に焼く筈の一いち撃げきだったが、
「く――かかっ！　デバイスに頼たよらない古典魔術まで！　芸達者な奴やつだなぁ、おい」
炎が掻かき消える。
炎が消えるのに合わせて、虹にじ色いろの輝きが辺りを照らした。
「なっ……」
アルヴィンが水みず膨ぶくれひとつ見られぬ顔でニヤニヤと笑う。そしてその背には、まるで聖画イコンの聖人に描かれるような後光が浮かび、神こう々ごうしい虹色の光を周囲へ放っていた。
「この『畏光メランム』輝くところ、只ただ人びとの魔術が俺に届くことは決してない。分かるか？　無・意・味、なんだよ！」
吊り下げた星一郎はぐるりと振り回され、軽々と放り投げられた。受け身など望むべくもなく打ち付けられる。
「ほぁれ、お返しだ！」
アルヴィンが星一郎へ向かい指鉄砲を向けた。その先端で魔力光が輝き、周囲の空気が渦うずを巻いて集つどってゆく。
「くっ……臨兵闘者――」
破は魔まの早はや九く字じ。簡易ながら実用性の高い、悪意ある攻性魔術を防ぐ古典魔術。

「バァン！」
　星一郎が早九字を画えがくのを待っていたように、アルヴィンが指鉄砲に装そう填てんした〝風ふう弾だん〟を撃ち放った。魔術で形成された空気圧縮弾が、見鬼を持つ者にのみ視られる早九字の防ぼう壁へきと接せつ触しよくし、
「なっ――」
〝風弾〟は九字の防壁など無いかの如ごとくすり抜け、なんの減衰もなく着ちやく弾だんし、内封された圧力を解放する。ヘビー級ボクサーのストレートより強きよう烈れつな衝撃を頭に喰らい、星一郎は横っ飛びに吹っ飛んで柱に激げき突とつした。
「くかかっ！　随ずい分ぶんと頑がん丈じようだなァ！　首が吹っ飛ぶものかと思ったがなぁ！」
　ずるずると柱に凭もたれて蹲る星一郎に、アルヴィンは舌した舐なめずりしながら歩み寄ってくる。
「くっ……」
　視界が半分赤く染まっていた。額が割れて血が出ているらしいが、体中が痛すぎてどれくらい深いのかも判然としない。
「くかかっ！　攻こう撃げきも防御も無意味だ。この『畏光』は神性の証明。神性とは魔力の不ふ可か侵しんなる絶対支配権！　魔導工学だろうが古典魔術だろうが、人間の魔術は一いつ切さい効果を成さねぇ！　畏光を持たぬ只の人間は、ただひれ伏ふして震えるしかないんだよォ！」
　畏光。あの虹色の後光のことか。
　知らず知らずのうちに、痛みで自由にならないはずの星一郎の身体からだがガタガタと震え出した。身体が、あの虹色の光に恐れ慄おののいている。
　――敵かなうわけがない。
　どれほど活を入れようと思っても、圧倒的な存在感に本能が膝を折っていた。神に許しを請うように、あの光に向かって平へい伏ふくしたいという思いが否いや応おうなく沸わき上がる。

「……っ!?」
　逸らそうとしても逸らせない視界の中に、小さな背中がアルヴィンの姿を遮った。
　金髪の少女――ディーナだ。
「……彼は関係ない」
　肩で息をし、ずっと押おさえていた右の脇腹からどろりと血を流しながら、ディーナはアルヴィンをきっと睨み付けた。
「これ以上彼を害することは、絶対に許さん！」
　毅然とした声が響くや、彼女の背にも虹色の光――畏光が輝いた。
　星一郎の心を侵しん食しよくしようとしていたアルヴィンの光が、ディーナの光に相そう殺さいされる。
　いつの間にか息を止めていた事に気付き、星一郎は声を出して呼吸を再開した。
「がっ、ふあっ……はぁ、は、あっ……」
「もう大だい丈じよう夫ぶだ」
　溺おぼれかけたように酸素を貪むさぼっていた星一郎が顔を上げると、ディーナは懐ふところへ手を差し入れていた。
「貴方のお陰で、少し回復できた。礼を言う。だから――」
　顔を引き締めた彼女は、懐から『本』を取り出した。
　普通の本ではない。
　金属光沢の装そう釘ていに、緑色の魔導晶体の輝き――ほとんどのメーカーの製品を網もう羅らしている星一郎も初めて見る、そして極めて洗練された雰囲気のＭＡＲデバイスだった。
「――だから此こ処こからは、私の戦いだ！」
　本型デバイスを持つディーナの右手に光背の畏光とは別の輝きが灯ともる。星光を思わせる銀色の魔力光。突とつ如じよ現れた右手の甲こうの刻印から、魔力光が止とめ処どなく流れ出ている。
（……あの刻印は……）
　刻印や紋もん章しように関して、星一郎はかなりの知識量がある。もともと魔術自体が紋章学的な性質――意い匠しようや要素から由来

と効果を研究する側面があるからだ。揺光学園のカリキュラムにも『方陣学』という授業があり、彼女の刻印はその初歩で習うほどありふれたものだった。だが、それ以外で目にするのは初めてだ。

古すぎるのだ。古すぎて、魔術に利用できる体系だった知識はすでに失われている。だが、およそ魔術呪術の起源が言語の起源と同じくする以上、知らない筈はなかった。

ディーナの右手に現れた刻印――それは人類最古の言語とされる『楔くさび形がた文字』だった。

＊アスタリスクに似た、直線で構成される放射状の八はち芒ぼう星せいの刻印から漏れ出した魔力光は、本型デバイスへと誘ゆう導どうされ吸収され、デバイスからはさらに眩まばゆいばかりの魔力光が輝き出す。

いったい、あの本型デバイスにはどれほどの術式が込められているのだろうか。

魔力とは魔術を伝達する媒ばい介かいだ。強力で複雑な魔術ほど必要とされる魔力量も増加するから、活性化した魔力の放つ光量でおおよその規模を測ることが出来る。あの本型デバイスが発する魔力光は、魔導晶体の助けがあったとしても決して個人レベルで引き出せるものではない。大規模な、それこそ数十人単位の術者が必要な大儀式級だ。

が、その本型デバイスの変化はそれだけに留とどまらなかった。

「――〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　その力の一いつ端たんをいま此処に示せ〟っ！」

凄すさまじい魔力光を発する『本』。その表面に無数の亀き裂れつが生じ、その輪りん郭かくが崩くずれて音もなく〝変形〟を始めた。いや、むしろ〝再構成〟と呼ぶべきか。

少女の手の中にあった一冊の『本』は、いまやその姿を長大な『槍やり』へと変えていた。

緻ち密みつな計算と設計の果てに生み出された工学的な印象をあた

える柄えに、優美な工芸品のような美しい拵こしらえ。それだけを見れば武器というよりは芸術品のようであったが、その先せん端たんで存在を放つ刃ははひやりとするほど鋭く研とぎ澄すまされている。さらにはディーナが背せ負おう後光と同じ、神々しい虹色の輝きを発している。

顕あらわれ方かたも在り方も、全すべてが尋常ならざる大槍だった。

ディーナは己おのれの背せ丈たけを超こえる大槍をくるりと回し、両腕でしっかりと構えた。その立ち振ふる舞まいは堂々としており、彼女に戦せん闘とうの心得があることを無言のうちに語っている。

「……それがかの有名な『権能武装ブリューナク』か。すごいプレッシャーだが……そいつを顕けん現げんさせるだけでけっこうキツイはずだぜぇ？」

「……」

ディーナは無言だったが、それは肯こう定ていも同じだった。ずっと押さえていた脇腹の傷からは血が流れ出ているし、後ろから見ている星一郎からも、露ろ出しゆつした肌はだに浮かぶ脂あぶら汗あせが見て取れる。

「おまけにそいつは借り物で、お前は何ら権能を発揮できねぇ！　知ってんだよ！　だからこその『カモネギ』なんだからなあッ！」

アルヴィンは大槍に怖おじ気けづいた様子もなく、にやにや笑って歩を進めた。

「威い嚇かくにすらなってねぇんだよ！　そんな物を出しても所しよ詮せんはガラクタだろうが！」

「……」

ディーナはじり、と僅かに身を引いた。

アルヴィンの放つ畏光の圧力が増し、星一郎は思わず呻いてしまった。

「……！」

はっと小さく肩を震わせたディーナが、背後の星一郎に顔を向け

る。
「……大だい丈じよう夫ぶ」
　星一郎を安心させるためだろう。痛みと疲ひ労ろうで引き攣つっているだろうに、ディーナはにっこりと笑い掛けてきた。
「貴方は必ず、わたしが守る」
　星一郎は思わず息を止めた。アルヴィンの畏光によるものではない。自分に向けられたディーナの笑顔に、強烈な既き視し感かんを覚えたためだった。
「……行くぞ！」
　正面に顔を向け直したディーナが、槍を構えて突とつ撃げきする。
　――疾はやい！
　怪我人とは思えぬ迅じん速そくな動きだ。
「くかかっ！　いいぜぇ、引導渡わたしてやるァ！」
　アルヴィンは両拳を構えた。両腕を虹色の光がヴェールのように覆おおってゆく。
「しゃあッ！」
　ディーナの大槍に対し、アルヴィンも凄まじい速度で拳を振ふり抜ぬいた。
　大槍の切っ先と拳が、激突する。
　――ギィイイイイイイイイイイイイイイッッ!!
　劈くような異音が廃工場に響き渡る。
　ディーナの槍とアルヴィンの拳、双そう方ほうに纏われた虹色の光が攻こう撃げき的てきな火花を散らして拮きつ抗こうしていた。
「くかかかかっ！　弱ってるとはいえこの程度か!?　これじゃあ今のままで十分じゃねぇか！　こっちの権能武装を展開するまでもねぇ！」
「闇討ちしておいて……ッ！」

鬩せめぎ合あいを早々に諦め、ディーナは大槍を振るって石いし突づきをアルヴィンの足元へ叩たたき込こむ。粗そ暴ぼうな青年は呆あつ気けなく倒れるが——続いて放たれた追つい撃げきの刺突は受け止められる。

またも異音。

盛大な光の悲鳴が響き渡るものの、少女の刃はいまだ敵の身体には届いていない。

「くっ……！」

ディーナは一度後退し、角度や手段を変えて再攻撃する。魔ま術じゆつ的てきな補助も使っているのだろう。常人には真似できない機動だ。尚なお且かつ、巧たくみな槍やり捌さばきを見せて翻ほん弄ろうしている。

アルヴィンは速度こそ匹ひつ敵てきするものの、戦闘技術においては圧あつ倒とうされていた。

だが、届かない。

肝かん心じんのディーナの刃は、アルヴィンの虹色の輝きを貫つらぬくことが出来ないでいる。

そして、勝負の趨すう勢せいはすぐにはっきりしてゆく。

もともとが怪我人なのだ。ディーナの動きはどんどん鈍にぶくなり、槍も空から振ぶりが多くなる。

「いいかげんにウゼェぞ、虫ケラがっ！」

アルヴィンの拳がとうとうディーナを捉えた。その一撃こそ、虹色の光が拮抗することで少女の身には届かなかったものの、

——ギィィィイイイイイイ————————ギャリィィンンッッ!!

次いで振り下ろされた拳が、虹色の光膜ヴエールを打うち砕いた。

その身に打だ撃げきを喰らい、ディーナは血の混じった呻きを漏らして身体を折る。

「ぐっ、うっ——」

すぐさま体勢を立て直そうとするが、その前に思い切り蹴けり転がされる。大槍を手放さなかったものの、すぐさま追い付いたアルヴィ

ンは槍を握る手首を踏み締め、さらに仰あお向むけになって無防備なディーナの腹部を音がするくらい勢い良く踏み抜いた。
「あっ、ぐあっ……」
「くかかっ！　これで終わりだなぁ！」
　にやにやと少女を見下ろし、アルヴィンは靴くつ底ぞこを抉えぐるように踏ふみ躙にじった。
「うっ、うう……っ！」
「くかかかかかっ！　いいねぇその顔！　お高く止まった女の顔が苦痛で歪ゆがむのは胸がすっとするぜぇ！」
　痛みに悶もだえるディーナを眺ながめ、アルヴィンはげらげらと高笑いする。
「くかかっ！　いい顔だ！　いい顔だぜ、ディーナ・チャレンジャー！　その顔に免めんじて、言い残すことがあったら聞いてやるぜぇ？　俺は負け犬には寛かん大だいなんでなぁ！」
「……なら、約束しろ」
　踏み躙られながらも、ディーナは奥歯を噛み締め毅然とした顔で言った。
「……わたしさえ〝降くだした〟なら、もう用はあるまい。彼に、これ以上危害を加えるな」
「ああ、あいつか？　どうしようかねぇ」
　身動きできない星一郎を眺め、アルヴィンは厭いやらしい笑みを浮かべながら思案した。
「まぁ、いいぜ？　だが、条件がある。俺がこれから十数える間、悲鳴を上げなかったら考えてやってもいいぜぇ？」
「……分かった」
　顔をぐっと引き締め、ディーナは静かに首しゆ肯こうした。
「……好きにするがいい」
「いい覚かく悟ごだなぁ。それじゃあ、いぃ～ち」
　右みぎ腕うでを踏む足にぐぐっと力が入る。星一郎のところまで骨の軋きしむ音が聞こえて来たが、ディーナは唇くちびるを噛んでそれ

に耐たえた。
「にぃぃいいいいいいいっ」
　少女の柔やわらかな腹肉に、無骨なブーツが痛々しくめり込む。ディーナの碧眼が大きく見開かれる。
「さぁぁぁあああああんんっっ！」
　一度持ち上げられたアルヴィンの足が、もともとあった脇腹の裂れつ傷しようへと踏み降ろされた。傷が広がったのか血がどぶりと流れ、噛み締めていた唇が大きく開かれる。だが、ディーナの喉から出てくるのは吐と息いきだけで、声らしい声は漏れなかった。
「しぃ……あれ？　いくつまで数えたっけなぁ？　忘れちまったぁ」
　アルヴィンはいけしゃあしゃあと言い放った。
「しょうがないよなぁ？　初めから数え直すとするかぁ」
「……っ！」
　唇を噛み締め直したディーナは蹂じゆう躙りん者しやの厭らしい視線を真まっ直すぐ受け止めて跳はね返かえした。
　アルヴィンのにやにや笑いがぴくりと震える。
「……どうした？　はやく数え直せ」
　ディーナの顔は静かで落おち着つき払い、痛覚を完全に飲み込んでいた。苦痛などいくらでも受けて入れてやると覚悟している。
　毅然とした、誇ほこり高たかい顔。
　あの顔を、星一郎は知っていた――
『――星一郎、あなたは私が守るからね』
　あれは、守ろうとする者の顔――
『――たった一人の大事な弟だもの』
　何に代えても――命に代えても守ろうとする気高くて、そして――
『――何があっても私が、あなたを絶対に守る』
　見る者の胸を締め付ける――悲しい顔、だ。
　獲物の態度が気に入らなかったのだろう。アルヴィンはにやにや笑いを消し、不ふ機き嫌げんに表情を歪めて唾つばを吐はく。
「……調子に乗るな、このアマァ！」

容赦の無い打ちよう擲ちやくがディーナに襲い掛かった。傷口が踏み躙られ、彼女の衣服が赤く染まってゆく。
「負け犬がっ！　ただ狩かられるだけの羊がっ！　お高く止まってるんじゃねぇ！　敗者は敗者らしく惨みじめに命乞いしてりゃいいんだよぉおおおおおおっ！」
「～～～～～～～～～～～～～っっ！」
ディーナの両足が激しく暴れる。左手が、爪つめが折れんばかりに地面を掻いていた。
だが、声は上げない。けして声を上げまいと、唇を血が流れ出るほどに噛かみ締めている。
「――あっ、ぐっ、あぁ……！」
星一郎は自らも唇を噛み締め、その新たな痛みに意識を集中して他の痛覚を遮しや断だんした。
「ぐっ、おっ……」
立ち上がらなければならない。
こんな風に黙って蹲っていられるわけがない。
あんな顔を見て、じっとしていられるワケがない！
「あ――あああああああっ！」
立ち上がれ！　今立ち上がらなくてどうする！　あんな悲しい顔をさせない為ために自分を鍛きたえたのではないか！　いつか自分が守るからと！
「あ、あああああ――――」
けれど守れなかった。
自分は何もかもが遅すぎた。
――だからこそ今度は、今度こそは――ッ！
「あっ、が――――――――おおおおおおお

も脊せき髄ずいが折れたみたいにグラグラと揺れる。全身の神経という神経がキリキリと責め立ててくる。
　だが、立った。
　命を擦すり減らす覚悟で立ち上がった星一郎は、足を引ひき摺ずってずるりと前進した。
「……あ、あなたは……なんでそこまで……」
　ディーナが痛みも忘れて呆ぼう然ぜんとした顔で呟つぶやく。彼女をいたぶっていたアルヴィンも、星一郎の姿にさすがにぎょっとした。
「……随分と根こん性じようがあるヤツだな。感心するぜ」
　呆あきれたというよりは気味悪そうに、アルヴィンが言った。
「だが止めとけ。これ以上やったら本当に死――」
「――どけろ」
「あ？」
「その足を退けろ！」
　星一郎は我が武む者しや羅らに突とつ進しんした。敵の虹色の光はこちらの心を折ろうとする。だから目を瞑つぶってひたすら真っ直ぐ突っ込んだ。
　先ほどまでの鮮あざやかな技術を微み塵じんも感じさせない、何の策もない愚ぐ直ちよくな突撃――それがあまりにも慮りよ外がいの行動であった為か、アルヴィンは無む謀ぼうな体当たりをまともに喰らった。
　無防備な鳩尾みぞおちに星一郎の頭頂部が押し込まれ、アルヴィンは「なぁっ!?」と呻いて後ろへ下がる。
「こ、の……ただのガキが！」
　ぼろぼろになりながらディーナの前に立ち塞がる星一郎を、アルヴィンは憎にく々にくしげに睨にらんだ。まったくダメージは見られず、ただその意外性に驚いて下がっただけのようだが、一いつ般ぱん人じんに退けられたことがひどく癇かんに障さわったようであった。
「……もういい。その女の仲間だろうが通りすがりの一般人だろう

が、どうでもいい！　まとめて消し飛ばす！」

　叫さけぶとともに、大きく開けられたアルヴィンの胸で楔形文字の刻印が輝き、猛もう烈れつな勢いで魔力光が輝き始めた。銀色の魔力光は畏光の虹色の輝きと合わさって周囲を満たすと、強烈な空気渦動を起こし始めた。

　アルヴィンを中心として大型台風のごとき強風が吹き荒れ、工場跡の屋根が吹き飛ばんばかりに波立つ。しかも恐おそるべきことにその強風は、勢いを緩ゆるめることなくアルヴィンの手の平へと収束してゆく。風速は変わらず、しかし空気圧は圧縮されたのだとすれば、あの手の平の台風が解放された時、どれほどの破は壊かいをもたらすのか。

「に、逃にげろ！　逃げるんだ！　頼たのむ、逃げてくれ！」

　星一郎の背後でディーナが必死に叫ぶが、いま背を向けてもどうにもならない。それにそもそも逃げる気など初めからない。

　あの顔を、見てしまったから――

「擦り潰されて消きえ失うせろ、ゴミ虫共がぁ！」

　アルヴィンが腕を突き出し、圧縮した強風、否、〝豪ごう風ふう〟を解放する。

　工場の屋根を吹き飛ばし地面を掘くつ削さくしながら迫せまる猛もう威いに、星一郎の脳のう裏りに様々な記き憶おくが高速で乱らん舞ぶした。

（――走そう馬ま灯とうなんて――）

　走馬灯とは命の危機に際しての経験の検けん索さくであるという。限界を超えた思考速度で打開策を必死に探す、謂いわば脳の火事場の馬ば鹿か力ぢからだと。

　だが、こんな天災と同義の大魔術を回かい避ひできる経験などあろう筈はずがない。自分にできるのは、せいぜいが背後の少女に覆いかぶさる程度。それにしたって何の意味もない。

（――そんな、の――）

　もう嫌いやだ。

もう守られてばかりは嫌だ。

もう守れないのは嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ——

（——い・や・だ！）

何か欲ほしい。

この危機を打開する力が。

守られるだけの自分を打破する力が。

奇き蹟せきが欲しい——

『——対価が要いる』

声が響いた。映像はない。まったく聞き覚えのない声が、星一郎の脳裏で響き渡る。

『——奇蹟を受けた人間には、相応の運命が付き纏う。奇蹟に見合うだけの運命が』

不思議な声だった。まったく聞き覚えがない筈なのに、妙みように落ち着く。静かなのに力強い、澄んだ湧き水みずのような声だった。

『——覚悟はあるか？』

深しん淵えんな知性を感じさせるその声が問う。

運命を選ぶ覚悟はあるのか、と。

（——それは……）

運命を選ぶといえば聞こえはいいが、それはとても恐ろしいことではないのか。

パンドラの箱に残った最後にして最大の災わざわいが『予兆』であるとの説もある。人は未来さきに待ち受けるものが曖あい昧まいだからこそ生きていけるのだ。曖昧だからこそ、人は『ああ、こんなにツイてないのは運命だから仕方ない』と責任転嫁できるのだ。

だが、もし選べてしまえたら？　未来に待つ運命が苦しみしかないと分かっているのに自分で選べてしまえるのだとしたら、それは——

（……いまさらだ……）

思考のみが高速で巡めぐっているだけ。現実では瞬まばたき三回分

ほどで〝豪風〟が襲いかかり、星一郎とディーナを襤ぼ襖ろ雑ぞう巾きんのように捻ひねってしまうだろう。どう考えても時間が無いにもかかわらず——星一郎は己の顔が笑えみを浮うかべるのを、はっきりと自覚した。
（たとえどんな運命だろうと——僕ぼくは今！　此処で！　奇蹟が欲しい!!）

「——よく言った！」

　耳元で叫ばれたようにはっきり声が響ひびいた瞬しゆん間かん、星一郎は律動リズムを変えた新たな心臓の鼓こ動どうを、聴きいた。

※　※　※

　ディーナ・チャレンジャーは絶望のあまり目を閉じたかったが、眼前に迫る猛威はそんな余裕を許さなかった。アルヴィン・ヴァイスの放った〝豪風〟はあと一呼吸する間もなく到とう達たつし、自分を庇かばう少年を蹂躙し、そのすぐ後に自分の身体も引き千切るだろう。
（ああ……）
　自分が果てるのはいい。だがただ通りかかっただけの少年が——それもあんなに才能があり勇ゆう敢かんな少年が巻まき添ぞえで死んでしまうなど、あんまりではないか。
（すまない……）
　詫わびようとして少年の名を知らない事に気付き、さらに絶望する。名前さえ聞かぬまま巻き添えにしてしまうのか、と。
　そして絶望の最後のひと押し。〝豪風〟が少年の身体に到達する。無残に吹き飛ぶ彼の断だん末まつ摩まを見なければならないことに気が遠くなりかけ——

「――――え？」
　出るはずのない声が漏もれた。声を出す間が、出来ていた。
　目の前の少年が、あろうことがアルヴィンの〝豪風〟を受け止めている。両足を踏み締め、両腕を突き出し、天災に等しい暴ぼう威いを人の身が支えている。
　否、受け止めるだけに留まらない。
　景色を歪めるほどの高圧高速の空気渦動が、その勢いを徐じよ々じよに弱めている。まるで少年が突き出した両腕に削けずり取とられてゆくように。
「あ、貴方あなたは……っ！」
　その時、ディーナの目が――正確には彼かの女じよに備わった霊視力が、信じられぬものを少年の背に見み出いだした。
　放射状に放たれる、虹色の後光。
　洋の東西を問わず、使徒や聖人が背負う光――神性の顕あらわれである『畏光』が。
「お――――おおおおおおおおおあああああああああああああああああああああっ！」
　少年が吠ほえる。彼かれが背負う畏光の輝きが増し、受け止める〝豪風〟の勢いがさらに弱まってゆく。そして遂ついには――
　――パァンッ！
　少年の打ち付けた両手の中で、そよ風すら残さず消え去った。
　大規模魔術の残ざん滓しである魔力光が名残なごり惜おしげに漂ただよう。
「なっ、てめぇはまさか――」
　アルヴィンが焦あせった声を上げかけ、途と中ちゆうでその声は苦鳴に変わった。
「おげっ!?」
　アルヴィンの鳩尾に、深々と拳こぶしが突き刺さっている。少年が強烈な跳ちよう躍やく力りよくを見せ、一足飛びにアルヴィンを強きよう襲しゆうしたのだ。

「がっ……馬ば鹿かな……なんだ、その速さ……」
　慌あわてて飛び退のいたアルヴィンが背中の畏光の輝かがやきを強める。彼の身体を虹色の光膜が覆った。
　少年は構わずにアルヴィンへ向かっていく。夥おびただしい魔力光を纏った右拳が振り抜かれ、
　――ギィィィィイイイイイイインッ！
　超ちよう硬こう度どの金属が擦り合わさったような、空間そのものが軋むかの如き異音が響き渡る。
　アルヴィンの身体を覆う虹色の膜が少年の拳と鬩ぎ合い、僅わずかな均きん衡こうの後――畏光の加護、不可侵の絶対防ぼう御ぎよ圏けんが、粉々に砕け散った。
「お、俺おれの畏光が――ァゴッ!?」
　少年が残像すら置き去りにする速度で拳を叩き込む。凄まじい反応速度に、アルヴィンは嵐あらしのような拳撃に翻弄されるばかりであった。
「馬鹿な……馬鹿な！　この俺が！　この俺がァァアアアアアアアア！」
　強ごう引いんに距きよ離りを取ったアルヴィンは、手の中に〝風弾〟を形成した。追撃してくる少年に撃ち出すが〝風弾〟は少年の髪かみを揺らしただけで見けん当とう違ちがいな場所へ飛んで行った。
　むしろ少年の突き出した右の掌てのひらが、アルヴィンの顔をがちりと掴つかみ取る。
「がっ――ごあああああああああああああああっ！」
　少年の手から炎が迸ほとばしる。先ほどの再現だが結果は真逆。
　少年の炎に顔を焼かれ、アルヴィンは顔を地面に擦りつけながら転がり回った。
「……まさか、貴方は……」
　立ち止まり肩かたで息をする少年を、ディーナは信じられないものを視みる瞳ひとみで見み詰つめた。
　虹色の光を放つ畏光。そして……

「――っ！」
　少年の右の掌が魔力光を発している。アルヴィンへ放った魔術の残滓かと思ったが、全く違ちがった。
　先ほどまではなかった刻印――自分の右手の甲や、アルヴィンの胸むな元もとに刻まれているものと同じ、放射状の八芒星の刻印が、鼓動するかの如く断続的に魔力光を放っている。
「ぐおおお……聖なる楔……『神デインギル』の刻印……っ！　きさま、きさまは……」
　炎を消したアルヴィンがよろよろと立ち上がる。その顔の左半分は出来たばかりの火傷やけどで引き攣り、もう右半分は驚きよう愕がくで歪んでいた。
「……」
　少年が、顔を上げる。力強い光を放つ双そう眸ぼうに見つめられ、アルヴィンが耐えかねたように叫び声を上げた。

「きさま……きさまも〈聖楔者ヒエロス〉かぁぁあああああ――――ッ!?」

　驚愕と畏い怖ふの叫びが響く中、ディーナは息を呑のんで名も知らぬ少年を見詰めていた。

二章　天命ノ書版

1

　碁ご盤ばんの如き格こう子し状じようの街並みの上空を、一機の中型ヘリコプターが駆かけ抜けていた。
　ヘリコプターという飛行機械の騒音性はよく知られるところだが、その機体は驚おどろくほどに静かで、機内に至っては衣きぬ擦ずれの音すら耳に残るほどの静せい寂じやくさだった。
　これもまた、魔導工学の恩おん恵けいであった。静せい粛しゆく結界は、防犯用の人ひと払ばらいの結界と同様、広くその術式が公開されている。乗り物から集合住宅まで、広く普ふ及きゆうされている技術だ。
　だが機内の静寂は、技術的産物とは別の力学に基もとづいて発生していた。
『……』
　機内には十人ほどの人間が乗り合わせている。多機能ベストに軍用ブーツといった戦闘装備に身を包つつんだ男たちだ。その中でも目立つのは、ゴーグルと一体化したヘルメットと、そこから伸のびたコードで繋つながるアサルトライフルに似た機械であった。銃じゆう器きのように抱かかえ込まれているが、銃じゆう口こうと同じ部位から覗のぞくのは淡あわい緑色の魔導晶体マギア・シリコンである。最新の軍用攻性ＭＡＲメーデバイスだ。
　現代魔ま術じゆつ戦せんに明るい者が見れば、彼らの装備が世界最高水準を満たして余りあるのが分かっただろう。それを操あやつるのに過か酷こくな訓練と経験が必要であることも。
　強力な戦闘能力を備えた男たちだが、彼らは皆みな一様に隠かくしきれない緊きん張ちようを滲にじませて機内の端はしに寄っていた。機内の静寂は、彼らの緊張が生み出したものなのだ。

その一方、男たちが端に寄って開いたスペースには、二人の女性が向かい合わせに腰こし掛かけている。

「……まったく……ああ、まったく」

緊きん張ちよう漂ただよう静寂も知らぬげに、面めん倒どうくさそうな溜ため息いきが漏れ出した。

溜め息の主は、目が醒さめるような美女だった。オレンジがかった金きん髪ぱつを獅し子しの鬣たてがみのように逆立たせた若い女だ。一目で高価と分かるパンツスーツを豪ごう快かいに着き崩くずしており、豊かな胸の谷間が顕あらわになっている。

だが、同乗する男たちは彼女の胸元にちらりとも目を向けない。それが彼女の堂々たる威い風ふうに気け圧おされたものか、それとも彼女が肩に担かつぐ厳いかつい大おお槌つちによるものか、ヘルメットに隠れた彼らの顔からは判然としない。

金髪の美女はそんな機内の空気を気にも留めず、さらに繰くり返し深々と嘆たん息そくした。

「ああ、まったく……なんでオレたちがこんな事しなきゃならないんだ？」

「――文句を言わないで、ブリュン」

冷やりとした静かな声が金髪の美女を窘たしなめた。

こちらの声の主は、艶あでやかな黒くろ髪かみの美しい女だった。ただしその落ち着き払った様子は、美女と評するよりも麗れい人じんと表した方が良いかも知れない。氷の彫ちよう像ぞうめいた冷ややかな空気を纏まとい、身を覆うスーツも金髪の美女とは逆にぴしりと整えられている。

だが、タイトなミニスカートから伸びたしなやかな脚あしが何とも艶なまめかしい。むしろスーツ姿に隙すきがないだけに、彼女のタイツに包まれた美び脚きやくはそれだけで官能的だった。しかもその腰こしには艶やかに光る鞭むちが携けい帯たいされ、彼女が足を組くみ替かえるたびに揺ゆれている。

金髪の美女が気け怠だるげな獅子なら、黒髪の麗人は氷で出来た蛇

へびというところか。美しい無機質さの中に、絡からみつくような色気が内包されている。
　金髪の美女は鼻を鳴らし、黒髪の麗人へ皮肉げな笑みを向けた。
「はいはい。グリムはほんと優等生だな」
「……ブリュンヒルデ？」
「なんすかね、グリムゲルデさん？」
　斜しやに構えた金髪の美女――ブリュンヒルデに、黒髪の麗人――グリムゲルデは声に冷ややかさを増して語りかけた。
「忘れないで、ブリュンヒルデ。私たちは任務中よ。貴女あなたが何か問題を起こせば我らが主ミ・ロードが呼び出されることになる。貴女は我らが主に無む駄だな時間を取らせたいのかしら？」
「……分かった。分かったよ、グリム。しゃんとすればいんだろ、しゃんとさ」
「分かってくれたのなら幸いだわ、ブリュン。いかに私たちの武器が疑ぎ似じ的てきな神性を備えていても、相手はその神性を無む尽じん蔵ぞうに振るえるのだから」
「そんな奴やつらのやんちゃを取り締まれっていうんだから、人使いが荒あらいよなぁ」
「だからこそ油断は禁物よ」
　姿勢を正し座すわり直したブリュンヒルデに、グリムゲルデも口調を緩めた。すると俄にわかに、乗り合わせた男たちが耳に手を当て、しきりに通信の確かく認にんをしはじめた。
「……ブリュンヒルデ様、グリムゲルデ様。ただいま本部の観測班から連れん絡らくが入りました」
「なんだ？　連中がまた移動したのか？」
「いえ……いま向かっている場所で、新たな神性を感知しました」
　その報告を聞くやいなや、ブリュンヒルデとグリムゲルデは一いつ瞬しゅんで表情を引き締めた。
「……協力的なディーナ・チャレンジャーはともかく、アルヴィン・ヴァイスを止めるだけでも頭が痛いのに、さらに乱入者とは……それ

で？　新たにフライングしたのは何ど処この何方どなたですか？」
「それが……本部のデータバンクで三人目の〈聖楔者ヒエロス〉の魔力波形は確認できません。未登録の……まったく未知の〈聖楔者〉の可能性が大である、と……」
「おいおい……まさかこのタイミングで？『摩天の夜宴バビロン・ナイト』まであと十日というこんなギリギリのタイミングで新たな〈聖楔者〉が現れたって？」
「……何事も計画通りに進むことはないという証明ね。急いで下さい」
　グリムゲルデの冷ややかな声に押おされ、ヘリは規制高度を下げて目的地へと急いだ。

※　※　※

　突如として体内に漲みなぎる出で処どころの知れぬ〝力〟を、星せいーいち郎ろうは妙に冷静な気持ちで受け入れていた。歩くのを覚えた赤子さながらに、元々備わっていた感覚と機能を自覚した気分だった。
「て、めぇ……！」
　だから、目の前の男とどう闘たたかうべきかも、分かる。
　顔の火傷を押さえるアルヴィンへと、星一郎は一直線に駆け出した。
「このっ……舐なめるなぁ！」
　アルヴィンの背で虹にじ色いろの畏光が輝き、胸元の楔くさび形がた文字の刻印が魔力光を発する。デバイスの助けも呪じゆ文もんもなく、空気が歪んで渦うずを巻き、強固な風圧の壁かべが出現した。
　――不ふ可か侵しんの絶対支配権。
　その意味を、今の星一郎は正確に実感していた。ただ空間に漂うだ

けの魔力が、磁石に吸い寄せられるように集まってきている。
　故ゆえに、今や複雑な手続きは必要ない。ただ命令すればいい。王のように。神のように。
（穿つらぬけ！）
　周囲の魔力が喜びの光を発しながら自分の右手――敵と同じ刻印へと集まってくる。
　刻印と魔力を握にぎり込むように拳を作り、
「おおおおおおっ！」
　目の前の分厚い風の壁へと振り下ろす。単純極きわまりない魔ま力りよく塊かいは、込められた対たい抗こうの意思に従って風を操る魔力と相そう殺さい。アルヴィンの風の防ぼう御ぎよを剥はぎ取った。
「馬鹿な――」
　悠ゆう長ちように驚いて動きを止めたアルヴィンの鳩尾に左拳をめり込ませる。敵は「げぇッ!?」と呻うめいてくの字に身体を折る。
「ふっ！」
　間かん髪はつ容いれずに連撃。脇わき腹ばらを刳くり、顎あごをかち上げる。
　痛みに呻き崩くずれかけたアルヴィンだったが、体格に似合ったタフさを発揮して飛とび退き距離を取った。だが、その顔は火傷と驚愕で引き攣ったままだ。
「ぐっ、ぐぐ……な、何な故ぜだ……何故こうも俺の畏光の加護を突つき抜ける……テメェ、いったいどんな神格に選ばれて……!?」
　混乱する心中をそのまま吐と露ろするようにアルヴィンが問う。
　だが、星一郎には何も分からない。畏光とやらも神格とやらも知らない。判わかっているのは自分には目の前の敵に対抗できる力があるということ。今この場において、了りよう解かいしておくべき情報はそれだけで十分だった。
「ぐ、ぬ……こうなりゃ……！」
　アルヴィンの焦りと痛みで血走った眼めが、槍を杖つえ代わりに立ち上がろうとするディーナへと向けられる。

「テメェだけでも！」
　当初の予定通り、ディーナだけでも打ち倒そうというのだろう。アルヴィンは彼女へ襲おそい掛かった。
「くぅ……！」
　ディーナが槍を構え直して迎げい撃げき体勢を取ろうとする。
　だがそれよりも先に、星一郎が彼女の前に回り込む。
「あ、貴方は……」
「て、テメェ……」
　人間離れした獣けものの如ごとき瞬しゆん発ぱつ力りよくを見せた星一郎だが、その表情もまた獣のように歯を剥むき出しにしていた。堪たえ切れぬ怒いかりが唸うなり声ごえとなって漏れ出す。
「怪け我がをした女の子に――恥はじを知れ！」
　渾こん身しんの力と怒りの込められた回まわし蹴げりがアルヴィンを弾はじき飛ばした。
　とっさに腕うでガードしたものの、アルヴィンは横っ飛びに吹ふっ飛んで廃はい工こう場じようの扉とびらに激げき突とつ。轟ごう音おんとともに扉を巻き込んで外へと吹っ飛んだ。
　もうもうと砂すな煙けむりが舞まい上あがる。
　常人なら間ま違ちがいなく内臓破は裂れつは免まぬがれぬ衝しよう撃げきであったが、アルヴィンは四よつん這ばいで血反へ吐どを吐くだけで耐えていた。いや、身体からだはともかく精神的には堪えられぬほどの屈くつ辱じよくなのだろう。引き攣つっていた顔が、いまや頭ず蓋がいを軋ませるほどに歪みきっている。
「ぐっ、ぐがぁ……クソがっ！　この俺が、この俺がぁぁあああ！」
　じゃり、と星一郎が外へ歩み出た。
　背に虹色の畏光、右手には魔力光を放つ刻印。堂々たる足取りの星一郎を、アルヴィンの赫あか々あかと血走った眼が睨み付ける。
「……くっ、くははっ……ああ、もう、メンドクセェ。全部メンドクセェ！　全部ふっ飛ばして腐くさらせて殺し尽くしてやるァアアアアッ!!」

アルヴィンは上着の懐ふところへ手を伸ばして何かを取り出した。
星一郎は歩みを止める。
アルヴィンが取り出したのは、先ほどディーナが槍を顕けん現げんさせるのに使ったのと同じ、本型のＭＡＲデバイスだった。
「やめろ、アルヴィン！」
脇腹の傷を押さえて廃工場から出てきたディーナが、痛みを噛み殺して口を開く。
「洛らく外がいとはいえ、こんな町中で権能を解き放てば……！」
「ウルセェ！　余波を食くらって何十人死のうが知ったことか！　〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！〟」
本型デバイスを中心に、夥しい魔力光が周囲を満たしはじめる。
星一郎は、背中の毛がざわりと総毛立つのを感じた。アルヴィンから放たれる波動の荒あら々あらしさ刺とげ々とげしさ、そして禍まが々まがしさは、これまでの比ではない。
殺意に濡ぬれた眼が、身構える星一郎を捉とらえて嗜し虐ぎやく的てきに細められる。
「〝死し霊りようと悪あく霊りようの王《パ〟――」
いまにも爆ばく発はつせんと当事者たちの緊張が張はり詰つめたその瞬間――まったく予期せぬ轟音が廃工場の周囲に吹き荒れた。
星一郎たちの視線が上空へと向かう。
一機のヘリコプターが驚くほどの低高度で飛び込んできた。
「あれは……！」
ヘリコプターのドアがスライドして一人の女が飛び出してきた。低高度と言っても十メートル以上ある高所から飛び出しながら、その女は金髪を風で大きく膨ふくらませながら落下し、手にした大槌を振ふり被かぶった。
「オイタはそこまでだ！」
金髪の美女は落下地点――ちょうど星一郎とアルヴィンの中間へと、魔力光を纏った大槌を振り下ろした。

砲ほう弾だんが撃うち込まれたかのようだった。
激げき烈れつな衝しよう撃げき波はが舗ほ装そうをひっくり返して土ど砂しやを巻き上げ、ヘリのエンジン音を掻かき消けす爆ばく音おんが周囲を席せつ巻けんする。
「きゃっ!?　なっ、何を――」
とっさにディーナを横抱えにして飛び退いた星一郎は、突とつ然ぜんの乱入者の様子を窺うかがう。
金髪の美女は出来上がったばかりのクレーターの中心に立ち、ちらりと星一郎へ目を向けた。
「……お前さんが新しい〈聖楔者〉か。ああ、まったく……面倒事を増やしてくれるね」
金髪の美女は戦せん槌つい型のＭＡＲデバイスを肩に担ぎ、やれやれと首を振った。
「このっ、邪じや魔まをしてんじゃ……」
デバイスの発動を邪魔されたアルヴィンが横よこ槍やりを入れた金髪の美女を睨み、改めて本型デバイスを掲かかげる――が、その右手に黒光りする鞭が巻き付く。
「あ？」
「そこまでです。〈聖楔者〉アルヴィン・ヴァイス」
いつの間にかアルヴィンの背後に長い黒髪の麗人が忍しのびより、彼の右手を鞭でぎりぎりと拘こう束そくしていた。
「これ以上の戦せん闘とうは、厳重なペナルティを与あたえなければならなくなります」
滞たい空くうしていたヘリからロープが垂らされ、魔ま術じゆつ戦せん闘とう装備の兵士たちが懸けん垂すい降下してきた。着地と同時によどみなく攻性デバイスが構えられ、星一郎とディーナ、そしてアルヴィンを霊視鏡の視界に捉える。
「テメェら……『カルディア委員会』の執行部隊か！」
「ご名答です。その〈第二書版セカンダリイ〉を収めて、速すみやかに退いて頂けますね？」

「……キサマら如きが俺に命令するのか？　どんなに上等なＭＡＲデバイスを持ってたって、所しよ詮せんは普通人じゃねぇか」
「これは命令ではなく、あくまで要よう請せいです。とはいえ聞き入れて頂けないなら、我々も役目を全まつとうしなければならなくなります」
　黒髪の麗人がぎりりと鞭の柄えを握り締め、周囲の兵士たちのデバイスが魔力光を漏らし始める。金髪の美女も担いでいた戦鎚を構え直した。
「……ちっ。時間を掛かけ過ぎたか。分かったよ。ヤメだ、ヤメ」
　アルヴィンが不承不承ながらも頷うなずいて、周囲の兵士たちがホッと緊張を緩める。金髪の美女が肩を竦すくめ、黒髪の麗人も鞭を手元に引き戻した。
「ご協力感謝します、アルヴィン・ヴァイス。しかし出来るならこんなフライング行こう為いはこれきりにして欲しいですね」
「殷いん懃ぎん無ぶ礼れいな女だな。分かった、分かったよ。……だが」
　本型デバイスを収めたものの、アルヴィンはいまだ殺気の収まらぬ瞳を星一郎へ向ける。
「……テメェ、名前はなんて言う？」
「――残念だけど『知らない人に名前を教えるな』って言われている」
「ちっ、そうかよ。だが、顔ははっきり覚えた。この火傷の礼は、必ず返す！」
　アルヴィンは言い捨てるや、魔ま術じゆつの風を纏って速やかにこの場から飛び去って行く。あっという間に小さくなり廃はい墟きよの彼方かなたへ消えてゆく影かげを、星一郎はじっと見送った。
「……すまないが、そろそろ手を離はなしてくれないか？」
　胸元から声が掛かり、星一郎は視線を落とす。先ほど抱え込んでいたディーナが、なんとも言えない複雑な面おも持もちでこちらを見上げていた。

「……すまないが、そろそろ」
「あ、ごめん」
　星一郎はかるく謝あやまってディーナを降ろす。
　ディーナは多少ふらつきながらも両足を踏ふん張ばって直立すると、手にした大槍を一ひと振ふりした。すると彼女の背せ丈たけを越こえる長さの大槍が、先ほどの光景を逆回しするように変形・縮小してゆく。
　本型へと戻ったデバイスを懐へ仕し舞まうと、ディーナは姿勢を正して星一郎と正面から向き直った。
「まずは、お詫びをする。わたしの不ふ甲が斐いなさ故に、巻き込んで済まなかった」
　そう言って彼女は頭を下げた。怪我をしているというのに背筋をぴっと伸ばしたきれいな姿勢で、それだけで律りち儀ぎな性格が伝わってくるようだった。
「また、礼を言う。助けてくれて、ありがとう」
　さらにもう一段階深く頭を下げる。長い金髪がさらりと肩から零こぼれた。
「……そして、申し訳ないが改めて告げておく。迷めい惑わくを掛けた上に窮きゆう地ちを救ってもらったが、貴方が〈聖楔者〉である以上、次に出会った時は戦わねばならない。その時に手心を加えることはないし、貴方も尋じん常じようにわたしと立ち会って頂きたい」
「……あの、その事なんだけど」
　今いま更さらながらに突とつ如じよ目覚めたあれこれを落ち着いて吟ぎん味みするにつけ、湧わき上がった疑問を星一郎は口にした。
「……ヒエロスって、何のこと？」
「うん？　何のことってそれは――」
「ディーナ・チャレンジャー。彼は何も知らないと思いますよ」
　眉まゆを顰ひそめるディーナに、鞭を腰に収納した黒髪の麗人が静かに語り掛けた。
「……グリムゲルデ・シュランゲン。彼が何も知らないとは、どうい

うことです？」
「そいつはヒヨコって事さ」
　戦槌を肩に担いだ派手な金髪の美女が、どこか投げやり気味に言った。
「そいつは覚かく醒せいしたばかりだ。たった今さっき、な」
「な……そんな事が……？」
　ディーナはショックを受けたように硬こう直ちよくすると、青い瞳を見開いてまじまじと星一郎を見詰めた。
「そんな……覚醒したばかりで、あれほどの……？」
「何いずれにせよ、その少年には同行していただく必要があります」
　黒髪の麗人は部下たちを下がらせると、害意がないことを示すようにゆっくりと星一郎へ近寄ってきた。
「……私はグリムゲルデ・シュランゲンと云いいます。あちらのだらし無い金髪はブリュンヒルデ・レーヴェです」
「だらし無いってなんだよ」
　金髪の美女ブリユンヒルデが口を尖とがらせるが、黒髪の麗人グリムゲルデは気にせずスルーして話を続けた。
「あなたのお名前は？」
「――星一郎。宿すく儺な星一郎です」
　先ほどのアルヴィンの誰すい何かは拒こばんだ星一郎だが、グリムゲルデの問とい掛けには素す直なおに応じた。彼女らからは敵対する気配はないし、何より事情を知る者からの情報提供レクチヤーは、星一郎が今一番必要とするものだ。
「……セイイチロー……」
　飲み込むべきか噛かみ締めるべきかを迷うように、ディーナが繰り返し呟いていた。ちらりと目を向けると、彼女は慌てて顔を背そむけてしまった。
「了解しました。宿儺星一郎さん、我々『カルディア委員会』はあなたに本部までの同行を願います。よろしいですか？」
「――事情を説明してもらえるんですよね？」

星一郎は右の掌に浮かび上がる紋もん章しよう――楔形文字の刻印を差し出して問い返した。
「はい。あなたの変化や置かれた状じよう況きようを説明するのがカルディア委員会の業務のひとつですから。……ディーナ・チャレンジャー、あなたも一いつ緒しよにお願いします」
「……わたしもか？」
「回復魔術を使用しているようですが、アルヴィン・ヴァイスの権能で傷の治りが遅おそい筈です。治ち療りようの面でも、一緒に来て頂いた方がよろしいと思われますが？」
「……」
ディーナはじっと星一郎の顔を見た。そのくせ、星一郎が見返そうとするとさっと目線を逸そらす。
「……わかった。同行する」
「分かりました。では――星一郎さん、ディーナさん。どうぞ、こちらへ」
グリムゲルデはそう言って、地上に降りてくるヘリコプターを示した。
「……」
ほんの一時間前まで学校にいたのが、遠い過去の出来事のように星一郎は感じた。
――運命が動き出した。
そんな実感を覚え、星一郎は右手を強く握り締めた。

2

『カルディア委員会』は、魔ま導どう工学に少しでも触ふれる者なら誰だれでも知る名前だった。
世界で初めて魔導工学を実用化した『現代魔術研究所』を前身とするこの組織は、今や魔導工学先進都市新京都の監かん督とく機関であり、国連の魔導工学関連技術の諮し問もん機関であり、そして世界最

大の魔導実験施設〈ＢＡＢＥＬバベル〉の建設総指揮機関であった。
「……あれが、〈ＢＡＢＥＬ〉……」
　驚くほど静かなヘリの機内で、窓まど際ぎわに座る星一郎は思わず感かん嘆たんの溜め息を吐はいた。
　廃工場で星一郎たちを乗せたヘリは、京都市街を北へ向かった。対面に座ったディーナがアルヴィンに受けた傷を癒いやすために服を脱ぬぎ始めたので、星一郎は慌てて視線を窓から外へと投じていた。
　自分が過ごす都市を上空から見下ろすという稀け有うな経験に軽く感動していると、ヘリが向かうその先に見えた光景に目が吸い寄せられた。
　古典魔術の仙せん道どうや陰おん陽よう道どうで語られる『龍脈』や『霊脈』は、現在では魔力を引き寄せる経路であると観測されている。その中でも丑うしの刻参りで有名な貴き船ぶね山やまは京都近きん郊こう随ずいーいちの霊穴であり、九年前に大規模な魔導実験施設〈ＢＡＢＥＬ〉の建造がこの地で開始された。かつての叡えい山ざん鉄道鞍くら馬ま線は資材輸送インフラとして変へん更こう・拡張され、山の中腹にある輝く螺ら旋せん状じようの建物へと延びている。
　京都市街からでは山間に隠されて見えなかった〝現代のバベルの塔とう〟は、星一郎の想像を超えて巨きよ大だいだった。黒曜の輝きを放つ大柱が聳そびえ立たち、その周囲を螺旋状の構造物が取り巻いている。いましも建造途中のその巨大構造物は、こうして上空から眺ながめると巻き貝の外がい殻かくめいた、どこか生物的な印象を覚えるものであった。
「――よく見ておくといい」
　対面から掛かった声に、星一郎は視線を再び機内へと引き戻した。
　治ち癒ゆ魔ま術じゆつの呪布を腹に巻いたディーナが、整った顔を引き締めて語り掛ける。
「〈ＢＡＢＥＬ〉……あれを完成させる為ために、我々〈聖楔者〉は戦い合う定めなのだから」
「戦い合う？」

星一郎は思わず問い返したが、ディーナはそれきり目を閉じ黙だまり込んでしまった。
「……そろそろ降下しますので準備して下さい」
黒髪の麗人、グリムゲルデが言う。
ヘリは貴船山へと降下していく。近付けば近付くほどに〈ＢＡＢＥＬ〉の巨大さが際きわ立だつ。この巨大構造物は新京都近きん郊こうの潤じゆん沢たくな魔力を利用するＭＡＲデバイス――史上最大の〝魔ま法ほう使つかいの杖〟でもある。物理学や建築学のみならず魔導工学の粋すいを注ぎ込まれた〈ＢＡＢＥＬ〉は、全長七〇〇メートル余りの世界屈指の巨大人工物となるのだ。
天を貫つらぬくが如き巨きよ塔とうを横目にヘリポートに降り立つ。
星一郎に続き、厳しく顔を引き締めたディーナがヘリから降りようとする。怪け我が人にんの彼女に手を貸そうとするが、差し出した手はすげなく躱かわされた。
「あらあら、残念」
手て持もち無ぶ沙さ汰たとなってしまった星一郎を、大おお槌づちを担いだブリュンヒルデがオレンジがかった金髪をなびかせながらニヤニヤと笑った。
「せっかく助けてやったってのに、それはないよな？　なぁ、少年？」
「……いえ。あれは僕ぼくが勝手にしたことですから」
手を引っ込めて星一郎は苦く笑しようした。
「――――ふぅん？」
ブリュンヒルデはニヤニヤ笑いを引っ込め、興味深そうな視線を星一郎に注いだ。
一行は建設途中の〈ＢＡＢＥＬ〉の横の地下への資材搬入エレベーターに乗り込んだ。滑なめらかに下降するエレベーターからは、摩ま天てん楼ろうを支える地下構造を眺めることが出来た。
広大深しん淵えんな地下空間に衝撃吸収用の巨大な梁はりが根のよ

うに絡まり合う様は、壮そう大だいであると同時に異界めいた不気味さを漂わせている。
「随ずい分ぶんと落ち着いてるんだな？」
　エレベーター内でも戦槌を担ぐブリュンヒルデが、星一郎へ語り掛けた。
「高校生くらいなら、こういう場所に連れてこられたら落ち着かなくてキョロするぐらいしても良さそうなもんだが」
「――やせ我が慢まんですよ」
　星一郎は困ったように笑ってブリュンヒルデに答えた。
「姉に厳しく躾しつけられたので、借りてきた猫ねこの真ま似ねは得意なんです」
「ふぅん？　……お前さん、女にモテるだろ？」
「残念ながら年ねん齢れい＝イコール彼女いない歴れきですよ」
「なんだ、彼かれ氏しの方だったか？」
　エレベーター内にギョッとした空気が立ち込めた。
「大人の魅み力りよくたっぷりなお姉さん二人に、けしからん身体のパツキン美少女。そんなのに囲まれてるのに落ち着いてるってのは、つまりはそういうことなんだろ？」
　ブリュンヒルデがにやにやと笑う。
　エレベーター内の視線が自分に集中し、星一郎はやれやれと肩を竦めた。
「残念ながら、彼氏もいた事はありません」
「へぇえ？　男にもモテそうな顔してるのにな」
「……いい加減にしなさい、ブリュン」
　グリムゲルデは言うやいなや、手を振り上げてブリュンヒルデの頭を打うち据すえる。
「相手にしなくて良いですよ、星一郎さん。この空気を読めない女は空気を読めないだけあってすぐ調子に乗ります。無視するのが本人のためです」
　眉ひとつ動かさずにグリムゲルデが言い放つ。叩たたかれたブリュ

ンヒルデがじとりと睨にらむが、それこそ知らぬげに涼すずしい顔であった。
「……」
星一郎は何気なく視線を動かすと、じっと見詰めるディーナとばっちり目が合った。
目が合った途と端たん、金きん髪ぱつ碧へき眼がんの美少女は慌てて視線を逸らそうとしたが、何かに思おもい留とどまるように表情を無理やり落ち着かせ、ゆっくりと何気ない風に顔を動かした。あまりあからさまだと負けたように感じるのかも知れない。かなり意地っ張りな面があるようだ。
そうしている内にエレベーターが止まる。地下構造物の一番底のようだった。
扉が開いてエレベーターを降りると、すぐ正面に小柄な人影が待っていた。
豪奢なドレスを纏まとった、星一郎やディーナより一回りほど幼い、十代前半ローテイーンの少女のようだった。ヴェール付きの帽子で顔が隠れているが、口元と顎あごの形からしてさぞ整った容姿だと察せられる。帽子の端から零れる髪は、目の醒さめるような銀色だった。
少女の姿を見た瞬しゆん間かん、まるでタイプの違うブリュンヒルデとグリムゲルデが同じような顔で目を見開き、わずかに震ふるえる声を同時に漏もらした。
「我らが主ミ・ロード……！」
二人は慌あわてて膝ひざを突き頭を垂れた。
「およしなさい、二人とも。お客様が驚かれてしまうわ」
年上の美女たちに傅かしずかれた少女は、まるで慌て者の娘むすめでも窘めるように言う。
「いえ……そういうワケには行きませぬ」
「貴女様は私たちの唯ゆい一いつ無む二にの主でありますれば」
泰たい然ぜんとしたブリュンヒルデも、慇懃なグリムゲルデも、た

だひたすら恐きよう縮しゆくし、同時に心からの敬愛を注いでいる。
　少女は「しょうがないわねぇ」と苦笑し、星一郎へと視線を滑すべらせた。
「驚かせてごめんなさい、宿儺星一郎さん。妾わらわはアスタ。カルディア委員会執行部の統とう括かつ部長を務めている者です」
〝星アスタ〟の名を持つ幼い少女は、身に纏うドレスのスカートを摘つまんで持ち上げて腰を折った。見た目とは裏腹に、その仕草は貴婦人の如く洗練されており、肩かた書がきと合わせてただ者ではなさそうだ。
「道中、部下の二人は粗そ相そうをしませんでしたかしら？」
　アスタが問いを放った瞬間、頭を垂れていたブリュンヒルデの肩かたがびくんと震えた。そわそわし出した彼かの女じよを視界の端に捉えつつ、星一郎は首を振ってアスタに笑い返す。

「いえ。とても丁てい寧ねいに送っていただきました」
「そう？　それは良かった。……ご苦労様でした、ブリュン、グリム。あとは妾がご案内しますから、二人は休んでらっしゃい」
「はい、我らが主」
「は……」
　一ひと際きわ深く頭を下げると、二人はエレベーターに乗って去っていった。扉が閉まるまで頭を下げ続けており、アスタへの傾けい倒とうぶりが窺えた。
「ディーナさんも災難でしたね。代表も心配しておられました」
「……いえ。すべては自分の力の至らなさ故です」
　声を掛けられたディーナは淡たん々たんと言ったが、彼女の両手は固く握り締められていた。
　アスタは軽く頷くと、足元に置かれていたケースを持ち上げた。ドレス姿には似合わない、金属製のケースだ。
「それでは、どうぞこちらへ」
　アスタはそう言って二人を案内した。
　照明があるとはいえ、すでに天てん井じようも定かで無い地下の巨大な空くう隙げきに、三人分の足音が陰々と木こ霊だまする。壁に沿うようにしばらく歩くと、巨大な扉に行き当たった。
「此こ処こから先はカルディア委員会でもごく一部の者しか入れないのです」
　アスタは軽かろやかな声で告げると、悪いた戯ずらっぽい仕草で振り向いた。
「もちろん、〈聖楔者〉である貴方あなたたちは別です」
　アスタは扉の横のコンソールを操作する。鋼鉄製の扉が重々しく左右に開いてゆく。
「ようこそ。我らカルディア委員会の誇ほこる『博物館』へ」
　扉の向こうに光が灯ともる。
　とっさに目を瞑つぶった星一郎は、光に慣らすようにゆっくりと目を開く。

そして、最初に目に入ったのは、
「!?」
石像。人面に獣の身体、そして翼つばさを備えた異形の石像が、門番の如く二体並んでいた。
「人面獅子スフインクス……いや、違ちがう？　この像、どこかで見たような……」
「古代エジプトの人面獅子ではない。その近きん似じとも原型ともされる、古代メソポタミアの守護獣の一種、ラマッスだ」
ここまで黙っていたディーナが口を開いた。
星一郎が視線を向けると、彼女はどこか口くち惜おしげに言葉を続けた。
「……見覚えがあるのは、大英博物館でも有名な展示品だったからだろう」
言われて合が点てんがいった。大英博物館の特集番組でお馴染みの石像である。
「……ちなみに言っておくと、これは本物だ」
物もの珍めずらしげに顔を近付けて見る星一郎に、ディーナが釘くぎを刺すように言った。
星一郎はぎょっとして身を引いた。
「……本物？　でもこの像は大英博物館にいまもあるんじゃ……」
「……残念ながら、大英博物館の展示品はフェイクだ」
ディーナは、ともすれば溜め息を吐き出しそうな口調で言った。
「みんなが本物だと思っているのは、ＭＡＲデバイスで作られた実体幻げん像ぞう……新京都の再現史し跡せきと同じだ。大英博物館のみならず、世界中の有名博物館に収蔵されていたメソポタミア地方の出土品――古代バビロニアの展示品は、すべてカルディア委員会に接収され、実体幻像に置おき換かわっている」
「接収だなんて、人聞きが悪いわ」
二体のラマッス像の間に立ったアスタが、口元に手を当ててくすりと笑った。

「ちょっと貸してもらっているだけよ。ちゃんと英国政府にも、あなたが所属する『図書館』にも、協力と了解は取り付けてあるわ」
　アスタはくすくすと笑い、星一郎に説明する。
「ディーナさんが説明してくれたけれど、ここにはこれまでに発見された古代バビロニアの遺物のほとんどが集められているわ」
　そう言って、アスタはくるりと背を向けて歩き出した。小さく嘆息して歩き出したディーナに続いて、星一郎もラマッス像の間を通とおり抜ぬける。
　ただ広い地下室には、ガラスケースに収められた多種多様な遺物が列をなしていた。
　ラマッス像のような想像上の動物や怪かい物ぶつを象かたどった石像。
　巻き毛と髭ひげを備えた古代人たちを象った壁へき画がの一部。
　壺つぼなどの日用品や色取り取りの装そう飾しよく品ひん等々。
　それらはメソポタミア文明の中でも古代バビロニア――シュメール都市文明から起こった世界最古の文明の連なりを中心としているようであった。
「――星一郎さんは、優ゆう秀しゆうな魔導工学の学生なんですってね？」
　詳くわしい自己紹介もないのにさも当然のごとく確認してくるアスタ。とはいえ相手は国家規模の組織だ。驚おどろくのも咎とがめるのも馬ば鹿か馬ば鹿かしいので、星一郎は素直に頷いた。
「なら、現代に伝わる魔術の起源についてはもちろん知っているわね？」
「……魔術の起源は約五千年前――シュメールの楔形文字の発生に遡さかのぼるとされています」
　現代魔術史学の初歩の初歩を、星一郎は教科書通りに口にした。
　魔術の起源は、文字の発生と時を同じくする。何故なら文字とは先まず、神を崇あがめ奉たてまつる『神話』の為に生み出されるからだ。神官だけに文字を学ぶことを制限されていた例は古代エジプトだ

けではない。古来、文字と神話は限りなく同一のものだった。
　そして神話とは即すなわち『祈いのり』――もっとも原始的で基本的な呪まじないである。人々は神話を基き礎そとして、祈き祷とうを呪じゆ術じゆつに、呪術を魔術へとシステマティックに洗練させていった。
　故に魔術の起源を人類最古の楔形文字とするのが、現代魔術史学の定説であった。
「ちゃんと勉強しているようね」
　アスタの方が星一郎より幼いはずなのに、彼女は生徒を褒ほめるように笑った。
　やがて種々雑多な遺物の群れの景色が様変わりする。
　楔形文字の刻み込まれた石版や粘ねん土ど板ばんがひしめく一角へと踏み入れていた。
「現在のイラクやクウェート付近、チグリス川ユーフラテス川の流域である古代メソポタミア地域は、南部のバビロニアと北部のアッシリアに分けられ、バビロニアはさらに南のシュメールと北のアッカドとに分けられる。楔形文字は約五二〇〇年前に生まれたシュメール人のウルク古こ拙せつ文字から洗練されて四五〇〇～四〇〇〇年前に確立されたと言われているわ。同じくらい古い文字としてエジプトの神聖文字ヒエログリフも知られているけれど……後の世に与えた直接的間接的な影えい響きようを鑑かんがみれば、現代まで人間の精神に根付く文字と魔術の起源は、古代バビロニアとするのが妥だ当とうでしょうね」
　アスタは歌うように言葉を紡つむぐ。物言わぬ文字版に囲まれた中で響ひびくその声は、ともすれば周囲の遺物が彼女の喉のどを借りて語りかけているかのようだった。
「……？」
　ふいに、右手に熱を感じたような気がして、星一郎は立ち止まった。だが、右の掌てのひらには何の変化もない。八はち芒ぼう星せいの刻印――あの楔形文字が浮き上がっているわけでもない。

すぐに顔を上げて——視界の端はしをかすめた粘土板に、視線が吸い寄せられた。
「……どうした？」
ディーナが訝いぶかしげな声を掛けるが、歩みを止めた星一郎は、返事もできずに目の前の楔形文字の粘土板に見入っていた。
高さ数メートルはあるガラスケースの中に、複数の粘土板が収まっている。破損の激しいものも多いが、全部で十二枚。
星一郎も魔導工学関係で様々な言語に詳しいとはいえ、さすがに楔形文字を読むことは出来ない。何の意図も読み取れないのは周囲の文字版と何ら変わらないはずなのに、妙みように目の前の粘土板から目が離せなくなっていた。
「何を見ているのだ？　……ああ、なるほど。この話は日本でも有名だろうからな」
「この粘土板に描えがかれてる内容が分かるのかい？」
納なつ得とく顔がおのディーナに問いかけると、彼女は不可解そうに眉まゆ根ねを寄せた。
「……分かっていたから見入っていたのではないのか？　この粘土板に書かれているのが、かの有名な——」
「かの有名な『ギルガメッシュ叙じよ事じ詩し』だよ」
威い厳げんある、重じゆう厚こうな声が響いた。
星一郎と、言葉を奪うばわれたディーナとが、ほとんど同時に背後へ向き直る。
「その粘土板は、西せい暦れき一八四九年に発見されたものだ。約二六〇〇年前、古代メソポタミアのみならず、古代エジプトすらも支配したアッシリア帝てい国こくの大王、アッシュールバニパルが建造したとされるニネヴェ図書館の遺い跡せきから発はつ掘くつされた。現存する中でもっとも保存の良いものだよ」
古代の遺物を収めたガラスケースの列の合間から姿を表したのは、それこそ古代の神像めいた体たい躯くの男だった。
身長は一九〇センチメートルはあるだろうか。ひと目で高価と分か

るダークスーツに身を包つつみながら、その屈くつ強きような体格は隠かくしようがなかった。かといって野や卑ひで粗そ雑ざつな印象は微み塵じんもなく。こちらへ歩いてくるその所作はとても静かで非常に洗練されている。
「ギルガメッシュは紀元前二六〇〇年……約四六〇〇年前の古代シュメールの中心都市ウルクに実在した王とも言われているが、彼かれを神格化したその叙事詩には『三分の二が神、三分の一が人間の半神半人の英えい雄ゆう』であるとされている」
　粘土板を眺める顔は、日本人離れして彫ほりが深い。オールバックにした髪かみには白いものが多分に交じっているが、その彫りの深い面めん貌ぼうには生気と活力が満みち溢あふれている。
「半神半人として生まれたギルガメッシュは、戦神や太陽神など数あま多たの神々に祝福され強力な加護を与えられた。それ故ゆえに当初は民たみを顧かえりみぬ傲ごう慢まんな王として振る舞っていた。そんな彼を諫いさめるべく〝英雄の天敵〟として神々に生み出されたエンキドゥと出会い、戦いの後に二人は友となる。自分に優まさるとも劣おとらぬ友を得た王はその傲慢を省み、そして半神半人の王と神造人間の二人は試練の旅に出る。
　ギルガメッシュは神々の力を借りつつ、数々の偉い業ぎようを成なし遂とげてゆく――神の加護を得し英雄。君たち〈聖楔者〉の原型オリジナルともいえる存在だな」
　歩み寄ってきた男は、粘土板へ注いでいた双そう眸ぼうを、まずはディーナへと向けた。
「ミズ・ディーナ・チャレンジャー、災難だったな。後日、アルヴィン・ヴァイスには何らかのペナルティがあるだろう」
「……恐縮です」
「そして……この少年が新たな〈聖楔者〉か」
　男が、その瞳ひとみを星一郎に向けた。
「星一郎さん、紹しよう介かいするわね。とはいえ、もう知ってらっしゃるかも知れないけれど」

アスタがころころと笑いながら言う。
無論、星一郎はこの男を知っていた。公式情報ではすでに還かん暦れき間近なはずだが、その立ち振る舞いにも、自分を見み詰つめてくる瞳にも、老いや衰おとろえの影は微塵も見み出いだせない。
「こちらがカルディア委員会代表の物ものの部べ昴こう造ぞうよ。昴造、こちらは宿儺星一郎さんよ」
「物部昴造だ。はじめまして、宿儺星一郎くん」
国連魔導工学諮問機関カルディア委員会代表にして、国内屈指の魔ま導どう企き業ぎようのＣＥＯも兼かねる重じゆう鎮ちん——物部昴造は、静かながら重々しい声で名乗るのだった。

古代バビロニアの遺物が並ぶ地下博物館の奥おくに、一ひと揃そろいのソファセットが置かれていた。
物部昴造は星一郎とディーナへ席を勧めると、自身はアスタとともにその対面へ腰こしを下ろした。
「さて、何ど処こから説明したものかな……」
いったいどんな話が始まるのかと、星一郎は居住まいを正す。
「——ああ、そうだ。そういえば握あく手しゆを忘れていたな」
しかしそんな星一郎に気付かなげに、物部は一人納なつ得とくしたようにうんうんと頷いた。
「やはり、こういった儀ぎ礼れいを疎おろそかにはできん……と改めてよろしく、宿儺星一郎くん」
立ち上がり、物部は右手を差し出してきた。
——意外に天然なのだろうか？
肩かた透すかしを食らった気分で、星一郎も立ち上がって握にぎり返すと、
「——落ち着いているな」
腹に響くようなその声に、星一郎ははっと顔を上げた。
物部昴造が、じっとこちらを見ている。別段、鋭するどいという感じはしない。しかし、誤ご魔ま化かしや隠し事をたちまち暴あばき出

すような、強い意志の光がその双眸にはあった。
「私はてっきり、突然の事態に混乱した少年を落ち着かせることから始めなければと思っていたのだが」
「……やせ我慢してるんです。男の子なので」
「君の手はそうは言っていないみたいだがな」
　星一郎の手を握る物部の手が、わずかに力を込めた。
「知っているかな？　最も古い握手の記録は紀元前九世紀まで遡れるそうだ。三千年前から、そのさらに大昔から、人類は握手という行為を続けてきた。初対面の相手の心を測るのにもっとも手軽な方法だからだ。
　然しかるに、君は発はつ汗かんもわずかで心しん拍ぱくも乱れていない。驚きよう異い的てきな能力を持った者たちの戦いに巻き込まれ、自らにも突然異常な力が宿り、挙句のはてにこんな地下深くに連れて来られたというのに、まるで慌てたところがない。異常なほどに正常だ」
「……」
「己おのれの力を自覚した〈聖楔者〉は、先ず落ち着かせるのが一番の難事なのだよ。彼らは突とつ然ぜん湧わき上あがる巨大な力に戸と惑まどい、恐おそれ、そして興奮のあまり攻こう撃げき的てきになっている。なのに何な故ぜ、君は、それほどまでに落ち着いていられるのかな？」
「……これは尋じん問もんですか？」
「個人的な質問だ。君のようなケースは珍めずらしいのでね。後学の為に教えてくれると嬉うれしい」
「……」
　物部から視線を外せぬ星一郎は、逆に鋭い視線が刺ささるのを頬ほおに感じた。きっとディーナのものだろう。物部の質問にある意味一番興味があるのは彼女みたいであった。
「……たぶん、ですが」
　星一郎は言葉を吟味しながらゆっくりと口を開いた。

「十年前に一度死んだことが原因だと思います」
　物部の眉がぴくりと動いた。
　横のディーナが短く息を呑のんだ音が聞こえた。
　物部の隣に座るアスタが興味深そうに首を傾げる。
「一度死んだ、か。だが、君はこうして生きている」
「死んでもおかしくない――というより生きている方がおかしい重傷を受けたんです。胸に大穴が空いて、いまも胸にその傷きず痕あとがあります。毎年水泳の授業でギョッとされるので、この季節の体育は苦手です」
「ふむ……」
「地じ滑すべりに巻き込まれたそうなのですが、その時の記き憶おくがないんです。衝しよう撃げきと大量出血による逆行性健けん忘ぼうと言われましたが……けれど、感覚だけははっきりと覚えています。死んでゆく感覚は」
　突とつ然ぜん病院で目覚めた幼い星一郎が先ずしたのは、大声で泣なき喚わめくことだった。「やめろ」「いやだ」と繰くり返し、暴れたせいで傷口が開いてさらに泣いた。
　怪け我がをした記憶などないのに、暗い場所へ引ひき摺ずり込まれてゆくリアルな感覚だけが脳に焼き付いていた。身体が端から徐じよ々じよに闇やみに喰くわれてゆく、ゾッとする喪そう失しつ感――あれが〝死の感覚〟だと、幼い星一郎は直感した。
　十年近く経たった現在でも年に数回、あの〝死の感覚〟を夢に見て飛び起きる夜がある。
　そうやって死の追体験を繰り返した星一郎は、トラブルの折には〝死の感覚〟を思い出すようになった。あれに比べればなんてことはない、と心を冷れい却きやくする。
　十年前からこちら、星一郎はたいていの事は〝死の感覚〟で己を落ち着かせていた。それが通じなかったのは、一年前の事故の時くらいだ。
「……なるほど」

うっすらと口くちの端はしを持ち上げ、物部は手を解いた。
「なら、面めん倒どうな前置きもしないで済みそうだな。さっそく君と、君の巻き込まれた状況について話をするとしよう」
星一郎が座すわるのを待つと、物部はパチンと指を鳴らした。
地下空間の照明が落ち、次いで幾いくつもの映像スクリーンが空中に投とう影えいされた。
「西暦二〇〇〇年の『世界同時多発魔ま力りよく災害』以後、急速に高まった魔力濃のう度どに呼応して、数々の『聖遺物レリツク』が発見された。……聖遺物については、もちろん知っているね？」
「魔ま術じゆつ的てき機構が再始動した呪具、霊具の総そう称しようですね。低魔力濃度下では起動する事も出来ずに単なる古美術品として扱あつかわれていましたが――有名なのは大英図書館に収蔵されていた魔導書グリモワールの類ですね」
「そう。現代では製法が散さん逸いつした、力ある道具たちだ」
並べられた映像に、魔力災害以降に再発見・再認にん定ていされた聖遺物たちが映し出された。古ぼけた魔導書、青銅製の剣けん、色いろ褪あせた布などだ。
「これら聖遺物の研究によって、我らは魔導工学を生み出し、魔術を技術として起動しうる機械、ＭＡＲデバイスを造り出した。人類は、一度はその暴走により多大な被ひ害がいをもたらした魔力を、新たなエネルギーとして活用しはじめた。だが、それによって新たな問題が生じた……将来生じるであろう、魔力の枯こ渇かつだ」
物部が再び指を鳴らす。
空中の映像スクリーンには新たに、人々が手にする携けい帯たい型がた汎はん用ようＭＡＲデバイス、防犯設備に多用される結界技術、警察でも採用されている人体に一いつ切さいの後こう遺い症しようを残さない鎮ちん圧あつ用攻性デバイス、そしてエネルギー問題を一気に解決した結界式核かく融ゆう合ごう発電施設などが映し出されていった。
「魔導工学がもたらす恩おん恵けいは、すでに社会になくてはならな

いものだ。現在の地上の魔力濃度を計算すれば、あと数十年は大だい丈じよう夫ぶだが——それで終しまいだ。魔導工学は使えぬ技術として消え去るだろう。だが、中世以前の古典魔ま術じゆつのように、魔導工学消しよう滅めつを漫まん然ぜんと待つわけには行かない。魔力の安定した供給は人類の急務といえる」

現在、魔術を顕けん現げんさせる為の触しよく媒ばいでありエネルギー源である『魔力』とは、この三次元世界とはまったく別の法則が支配する異次元——『幽世かくりよ』とも『神しん界かい』とも呼ばれる世界から滲にじみ出してきた『異界の素そ粒りゆう子し』であるとされている。

この異界の素粒子は複雑に発達した意識、つまりは人間の思念に反応して情報を伝でん播ぱし、三次元世界——『現世うつしよ』の素粒子に影響を与あたえる。これが魔術の大まかなメカニズムだが、魔力は常に現世に供給されているわけではない。それは中世以降の魔力濃度の低下による魔術の衰すい退たいを見れば明らかだ。

故に、過去の古典魔ま術じゆつ師したちも、現代の魔導工学師たちも、安定した魔力の供給システムは最大の悲願の一つであった。

だが、魔術が生み出されてよりおよそ五〇〇〇年。未いまだ魔力を人じん為い的てきに引き込む術は発見されずにいる。

「それを覆くつがえすための大規模実験施設が、この〈ＢＡＢＥＬ〉だと伺うかがっていますが？」

星一郎は、他ほかならぬ〈ＢＡＢＥＬ〉の建造を統すべる男に尋たずねた。

魔力を神界から現世へ引き込むための研究開発。それこそが〈ＢＡＢＥＬ〉の建造意義であるはずであった。

「そういうことにしている——が、真の意図は別にある」

三度、物部が指を弾はじいた。

新たに映し出されたのは、楔くさび形がた文字の刻まれた石版の欠片かけらだった。だが、ただの石版ではない。周囲に飾かざられているものとは、材質がまったく違う。

深く、深く澄すんだ青――鮮あざやかな瑠る璃り色いろの滑らかな表面。その表面には、白光りする細かな斑はん紋もんが淡あわく輝いていた。あたかも、冬の澄んだ夜空をそのまま磨みがき抜いたような、神秘的な質感の鉱物であった。

「この石版が発見されたのは西暦二〇〇五年。場所は地中海のシリア沖おき。これを皮切りに、世界各地でこれと似た石版の欠片が続々と発見された。大おお騒さわぎになったよ。何しろ微び弱じやくとはいえ、この石版は魔力を湧ゆう出しゆつしていたのだから」

一いつ瞬しゆん、星一郎は物部の言葉を理解できずに無反応となったが、もう一度その言葉を咀そ嚼しやくするに連れて徐々に表情を強こわばらせていった。

「……魔力を湧出……？」

「調査の結果、これらはおよそ五千年から一万年前のものと推測された。これまで発見された中で最も古い情報媒ばい体たい。そして間ま違ちがいなく最古の魔術的機構を持った聖遺物だ」

「……」

星一郎はまじまじと映像の中の石版を見つめた。物部の話が本当なら、この粘土板は歴史的価値のみならず、魔導工学的な研究価値も極きわめて高いものだ。

「古代の人間たちは、魔力を供給する技術を持っていた、と……？」

「さて、どうかな。いずれにせよ〝この石版を製造したものたち〟が〝神〟と呼ぶに斉ひとしい叡えい智ちと力を備えていたのは間違いないなかろうが」

「つまり、この石版の謎なぞを解明する為にバビロニアの遺物を？　魔力を湧出する機能を〈ＢＡＢＥＬ〉で再現しようと……」

言いながら、星一郎は引っ掛かりを覚えた。

魔力湧出炉の建造。本当にそれだけなのだろうか？

カルディア委員会は何らかの『戦たたかい』の監督をしようとしている。アルヴィンの蛮ばん行こうをカルディア委員会の執行部隊が止めに入ったことから見てそれは明らかだ。

それに、と星一郎は、すこし離はなれて座るディーナをちらりと見やった。何より、先ほどディーナは何と言っていた？

――あれを完成させる為に、我々〈聖楔者〉は戦い合う定めなのだから――

「そう……話はそう簡単ではなかった」

言葉を切って熟考する星一郎に、物部は重々しい息を吐いた。

「この石版の欠片たち――バビロニア神話に準なぞらえて《天命の書版トウプシマテイ》と呼こ称しようするこれらは、他に類るい似じ物ぶつのないロストテクノロジーであり、現代と比しても隔かく絶ぜつしたオーバーテクノロジーの塊かたまりだ。魔力湧出現象を起こすシステムについては完全なブラックボックスだった。

なおかつ、《天命の書版》は誰にでも触れることが出来る存在ではない。この石版の欠片はまるで意思があるかのように触れる者、扱う者を選定した。そして選定された者は、すさまじい能力を与えられた。伝説の英雄の如き圧倒的な能力を」

「……それがディーナや、あのアルヴィンのような……」

「《天命の書版》に選定された神の力の担にない手て。それが君ら〈聖楔者〉だ」

「……神の、力……」

星一郎は自分の右の掌を見詰めた。意識を集中すると、八芒星の楔形文字が浮き上がる。

「君の掌に刻まれた楔形の八芒星は『Dingirデインギル』……『神』を意味する文字であり、君に選定の楔が打ち込まれた証あかしだ。そして神性の顕あらわれたる畏光メランムの虹にじ色いろの輝き。君は間違いなく《天命の書版》に選定されし〈聖楔者〉の一人」

「……〈聖楔者〉については概おおむね了りよう解かいしました」

八芒星の楔、『神』の刻印を吹ふき消けして、星一郎は顔を上げた。

「僕も、知らないうちに《天命の書版》に選ばれていた、と。しかし、分かりません。何故その〈聖楔者〉同士が戦わなければならない

のですか？」
「……世界中で発見された《天命の書版》が、元はひとつの大きな石版であったことは分かっている。断面をパズル合わせにすればすぐに分かることだがな。太古のバベルの塔に完全なる《天命の書版》が安置され、それが魔力湧出炉の中ちゆう枢すうであったことも分かって来た。《天命の書版》が統合されれば、欠片の一つ一つはか細い湧出機構もその機能を回復するだろうとも。……だがどれほど手を尽くしても、《天命の書版》は元に戻もどらなかった」
「原因は分かっているのですか？」
「ああ……時に、宿儺くんは『汎はんバビロニア主義』というものを知っているかな？」
　急な話題転てん換かんに、星一郎は眉まゆを顰ひそめる。
　しかし答えを待つ物部の真しん剣けんな表情に、星一郎は戸惑いながらも彼の問いに答えた。
「……汎バビロニア主義は、世界各国の神話や文化の発はつ祥しようを古代バビロニアに求めるという考え方ですね」
　バビロニア神話と旧約聖書との間には酷こく似じした記述――大だい洪こう水ずいや世界樹、バベルの塔とうなど――がある為に『聖書の起源』として引き合いに出されるのだが、他にもバビロニア神話を模も倣ほうしたと思われる神話や伝説は数多い。
　現代でも人気な星座占いに使われるギリシャ神話の星座は、元々はバビロニアの星座を当時の人々が分かりやすいよう〝翻ほん訳やく〟して発展させたものである。
　インド神話の太陽神ミスラは同時に契けい約やくを司つかさどるが、太陽神が契約神を兼ねる思想はバビロニアの太陽神『シャマシュ』に由来すると云いわれる。
　東ではトリシェーラ、西ではトライデントと呼ばれる三みつ叉またの槍やりも、その出自はバビロニア神話の最高神『マルドゥーク』が携たずさえていたとされる雷かみなりの槍である。
　バビロニアの正当な後こう継けいは存在せず、その記録のほとんど

が中東の砂の下に埋うまってしまっても、その偉い大だいな痕こん跡せきは各所に見出すことが出来る。
　もっとも、中には『日本人シュメール起源説』という眉まゆ唾つばなものも少なくないが……。
「それがどれほど大昔のことかは定かでないが――バベルの塔に安置されていた《天命の書版》は、バベルの塔の崩ほう壊かいとともに砕くだかれ、世界各地に散逸した。そして世界各地の神話の萌ほう芽がとなったのだ。ユダヤ、ギリシャ、インド、ゾロアスター、さらには極東の日本にも。バビロニア神話こそが、《天命の書版》に宿った神々の力こそが、凡ての神話の原版だ。古代の英雄には、君ら〈聖楔者〉の先せん輩ぱいが相当交じっていただろうな」
「……バビロニア神話――《天命の書版》が神話の原版であることは理解しました。しかしそれが、どう〈聖楔者〉同士の戦いに関係するのですか？」
「それがそのまま答えだよ」
　謎なぞ掛かけのような答えだった。
　星一郎が首を傾かしげると、物部は《天命の書版》の映像を眺ながめた。
「世界中に散逸した神話の原版……永い時の中で、これら欠片たちはその土地の神話の影響を色いろ濃こく受けていった。語られる内、崇められる内に、書版の欠片に宿った神格も変質していった。〝翻訳〟された神話が〝原版〟を歪ゆがめていったのだ。
　旧約聖書に語られる通りだよ。『いざ我らくだり、かしこにて彼らの言葉を乱し、互たがいに言葉を通ずることを得ざらしめん』……世界各地の様々な言語で翻訳された神話が、《天命の書版》が元の姿へ戻ることを阻そ害がいしている。
　故に、《天命の書版》を再びひとつにするには、結合を阻害する〝翻訳された神話〟を解体せねばならない」
「……ようやく分かって来ました」
　星一郎は頭を振ふりながら納得した。

「だから戦いが必要なんですね？　神を降くだしてその力を喰らう――『神喰らい』の儀ぎ式しきが」
「よく出来ました」
　それまで大人しくしていたアスタがぱちぱちと手を鳴らし、上じよう機き嫌げんで物部を仰あおぎ見みた。
「話が早くて良いわね、昴造。あなたの長くて大おお仰ぎようしい説明、今回は早く終わりそうね」
「そうだな」
　にこやかに揶や揄ゆするアスタに、物部は淡々と頷うなずく。
　星一郎は難しい顔で思案し、少ししして慎しん重ちように口を開いた。
「……ふたつほど質問がありますが、よろしいですか？」
「もちろん」
「魔力の安定した供給という目的はよく分かりますが、それで〈聖楔者〉なんていう存在の戦いが許容されるのですか？」
　先ほどの戦いを思い出す。アルヴィンの放つ魔術は手元を誤れば家屋のひとつふたつを簡単に吹き飛ばすほどだった。しかも、まだ奥の手を持っている素そ振ぶりもあった。
　あんな能力を持った者たちが戦い合うことで生じる被害はすさまじいのではあるまいか。
「だからこそ、我々カルディア委員会が監かん督とくするのだ。〈聖楔者〉同士の戦いは逐ちく一いち監かん視しし、怪我人は速すみやかに収容する。その為ための態勢を、我々はこの街に整えている」
「この街――まさか新京都市で戦いを？」
　さすがに驚きを隠せず、星一郎は腰を浮かせた。
「街中で大規模な魔ま術じゆつ戦せん闘とうなんて、正気の沙さ汰たじゃない！」
「そうかな？　この街には壊こわしても壊れない場所が、至る所にあるのではないかな？」
　物部の静かな言葉に眉を顰める星一郎だったが、やがてその言葉が

示す場所に思い至る。
　新京都の住人なら、ほとんど毎日目にするもの。
「……再現史跡……」
「そう、ＭＡＲによって再現された史跡群。そこが〈聖楔者〉同士の戦い――『摩天のバビロン・夜宴ナイト』の舞ぶ台たいだ。いくら壊そうが、もともと壊れているのを実体幻像で再現しているのだ。戦いの痕跡はすぐに修正できるし、被害も最小限で済む。さらに言えば、京都は古来より世界的な霊れい地ちで魔力濃度も十分。〈聖楔者〉たちが戦う舞台として打って付けだ。計画を提出した時は日本政府も渋しぶい顔をしたが、魔力湧出炉の建造地とすることで納得してくれた」
「……物理的な復元が遅おくれていた理由は、そういう意図もあったんですね」
「そういうことだ。ふたつめの質問は？」
「……戦いの対価に、あなた方カルデイア委員会は何を用意しているんですか？」
　物部の眉がぴくりと動いた。
　アスタが感心したように溜ため息いきを漏らす。
　星一郎の様子を窺うかがっていたディーナも息を呑んだ。
「人類の発展のため、といえば聞こえはいいですが、それだけで戦いを了りよう承しようする人間なんてごく少数でしょう。〈聖楔者〉たちは、戦いに見合う報ほう酬しゆうがあるからこそ新京都市に集まってきているのではないのですか？」
「……君は実に理性的だな」
　物部が、ゆっくりと笑えみを浮うかべた。
「この状じよう況きようでそこまで考えが回るとは。実に頭の回転が速い」
　満足気に頷くと、物部は人差し指を立て、まっすぐに頭上を指さした。
「この〈ＢＡＢＥＬ〉だ。すべての神格を喰らって《天命の第トウプ

シマテイ二書版・セカンダリイ》を完成させた〈聖楔者〉には、〈ＢＡＢＥＬ〉の最初の使用権を与える。〈ＢＡＢＥＬ〉の魔力湧出炉の中枢となるのは、他ならぬ《天命の第二書版》だからな。そして〈ＢＡＢＥＬ〉は史上最大のＭＡＲデバイスでもある。あらゆる望みが可能となるだろう。奇き蹟せきであっても、な」

「……奇蹟とは、また大きく出ましたね……」

「神界から直接汲くみ出す濃のう密みつで膨ぼう大だいな魔力があれば、およそ現代の魔ま導どう工学で不可能とされている現象を力づくで再現できるだろう。あらゆる病の完治、永遠の命、老いぬ身体からだ。君の願いも叶かなうかも知れん。そう――死者の復活でさえもな」

――ガンッ！

甲かん高だかい破は砕さい音が響き渡わたった。

ローテーブルが真っ二つに砕け、細かい破は片へんがぱらぱらと零こぼれる。

それを為なした星一郎の拳こぶしは、白銀の魔力光を周囲に放っていた。背にも、ゆらゆらと虹色の畏光が顕現しかけている。

「……すまない。言葉が過ぎた」

星一郎の行動に反射的に立ち上がっていたディーナとアスタへ、物部は黙だまっているようにと手を上げた。

「本当にすまない」

「……いえ」

物部が深々と頭を下げ、星一郎は拳を解いて深々と深呼吸した。顕現しかけていた虹色の光が霧む散さんし、右の掌に浮き上がっていた『神』の刻印も輝きを収める。

「……備品を壊してしまい、申し訳ありません」

「いや、私の不注意だ。他人が軽々しく踏ふみ入ってよい話題ではなかった」

再び一同は腰を下ろした。テーブルの残ざん骸がいが転がっているが、気にする者はいない。

「だが、分かって欲しい。これは魔導工学の――いや、人類の未来に関かかわることなのだ。完成した〈ＢＡＢＥＬ〉に何を願うかは君次し第だいだ。

宿儺星一郎くん。我々カルディア委員会は、君に『摩天の夜宴』への参加を要よう請せいする」

物部がじっと星一郎を見詰める。アスタも微笑ほほえんで返事を待つ。ディーナもまた、彼が放つ次の言葉に耳を澄ませていた。

「……分かりました」

息を整え、星一郎は静かに頷いた。

「……いずれにせよ『摩天の夜宴』という戦いが始まれば、巻き込まれるのは目に見えています。最低限の知識と力がなければ、ただ翻ほん弄ろうされるだけでしょうから」

「感謝する」

物部はもう一度深く頭を下げると、隣となりのアスタへ目配せした。

アスタは、この部屋に来る際持ち込んだ金属のケースを膝ひざに置いて蓋ふたを開いた。

「それは……」

ケースの中には、金属光こう沢たくと魔導晶体の輝きで装そう丁ていされた、本型のＭＡＲデバイスが収められていた。ディーナが神こう々ごうしい大槍を顕現させ、アルヴィンも使おうとしていた、あのデバイスである。

「〈聖楔者〉専用デバイス、〈第二書版セカンダリイ〉。カルディア委員会の技術力の粋すいを集めて造り出した、世界最高のＭＡＲデバイスよ」

「この〈第二書版〉は《天命の書版》に宿った神格と神性をまるまる移うつし替かえる事の出来る器うつわだ。そして降した神格を吸収し、《天命の第二書版》を構築する『神話再編プログラム』が封ふう入にゆうされている。君たち〈聖楔者〉の武器であり、標的であり、命いのち綱づなとなるものだ」

　アスタからケースを受け取ると、物部は蓋を閉じて星一郎へと差し出した。
　星一郎は複雑な表情で〈第二書版〉のケースを受け取る。
「〈第二書版〉の詳しい使い方は――ディーナ・チャレンジャーに教えてもらうと良い」
「――――は？」
　突然名を呼ばれ、ディーナが驚きの声を上げた。
「……物部代表？　何故わたしが？」
「君は立場上、英国の魔導工学機関からカルディア委員会へ出向している身分だ。出向が解除される『摩天の夜宴』の前日まで、君は我々に協力する義務があると思うが？」
「……あと一週間で敵になる相手にレクチャーしろと？」
「君は危ないところを彼に救われている。ここで恩を返しておいた方がいざ相対しても気き後おくれしないのではないかな？」
「……それはそうですが……」
「ぶっちゃけて言うとね、妾わらわたちもいっぱいいっぱいなのよ」
　言いよどむディーナに、アスタがあっけらかんと肩かたを竦すくめた。
「『摩天の夜宴』を十日後に控えて、委員会はあっちもこっちも目が回る忙いそがしさなの。妾の部下たちもほとんど出で払はらってるわ。使えるものなら猫ねこの手だって借りたいのよ」
「……しかし……」
「委員会はあなたたちに十分な援えん助じよをしているはずよ？　離れる前にもうひとつくらいご機き嫌げん取りをしても無む駄だではないと思うけれど？」
「……了解しました」
　反論の言葉を飲み込むように口を引き締め、ディーナは硬かたい面おも持もちで小さく頷いた。
「ありがとう、ディーナ・チャレンジャー。あなたの協力に感謝するわ。――それじゃ、あとは若い人同士ということで」

「今日は有あり難がとう、宿儺星一郎くん。君の健けん闘とうを祈っている」
　物部が立ち上がり、会談の締めとなる握手を求めてきた。
　星一郎は物部の手を取ったが、正面の彼より斜ななめ後うしろから視線を突つき刺してくる少女が気になって、なんと言って別れたか曖あい昧まいなままカルディア委員会を後にした。

※　※　※

「……宿儺星一郎、か」
　一人地下博物館に残った物部昴造はぽつりと呟つぶやいた。
　歳としに似合わぬ落ち着きぶりを見せる少年だった。突然『戦え』と言われても、実に冷静に自分の立ち位置を把は握あくしようとしていた。彼自身が言った『死んだ経験』がそうさせるのだろうか。
「……ふむ」
　物部は次に、足元に転がったテーブルの残骸に目をやった。
　正直、それまでの穏おだやかで冷静な印象から、あのような行動に出たのは意外だった。
　そして内心、背筋がひやりとした。
　拳を打ち込んだ後こちらを睨にらんできたあの表情。理によって導みちびかれたものではない、純じゆん粋すいな感情の発はつ露ろ。あの怒いかりは、人間よりもむしろ獣のそれに近い荒あら々あらしさだった。
　静かな理性と荒々しい激情。相反する性質を宿した彼は、いったいどちらが本質なのか。
「……なるほど。確かに宿儺摩ま子この弟だ。よく似ている」
　確かく認にんするようにひとりごちていると、客人を送ってきたアスタが再び姿を現した。

「送ってきたわ。ディーナ嬢じようは最後まで不ふ機き嫌げんだったけれど。いまごろヘリの機内はギスギスしていることでしょうね」
「そうか」
　物部は素っ気なく頷いた。そんな彼の返事に構わず、アスタは幼いた気いけな顔に艶えん然ぜんな笑みを浮かべる。
「けれど、皮肉な偶ぐう然ぜんね。あの宿儷摩子の弟が〈聖楔者〉となるなんて」
「そうとも言えん。〈第二書版〉の基き礎そ設計は、彼かの女じよの手で造り出されたものだからな。ある意味、必然とも言える」
「彼女自身はどう言うかしらね？」
「死者は何も語らない」
「あら、そうとも限らないわ。彼が〈ＢＡＢＥＬ〉に願うのが『姉を蘇よみがえらせる』ことだったら、彼女も冥界クルヌギから戻ってくるかも」
「――かもな」
「彼、勝ち残れるかしら？　それも彼を選んだ神格次第だけど……ねぇ、いったい彼を選んだのは何なのかしら？　あなたはどう思う？」
「いずれ明らかになる事に興味はない」
　物部はソファから立ち上がった。
「無む駄だ話ばなしが済んだなら掃そう除じの者を呼んでくれ。お前と違ちがい、私は忙しい」
「お言葉ね。掃除くらい妾がしてあげるわよ」
　アスタがぱちんと指を鳴らす。
　砕かれたテーブルとその破片が、幻まぼろしだったかのように塵ちりひとつ残さず消失した。
「それじゃあね。妾も部下たちを労ねぎらう大事な仕事があるから」
　アスタはひらひらと手を振ふって歩み去っていった。
　物部も仕事に戻ろうと踵きびすを返し、遺物の収められたガラスケースの列を歩いてゆく。

初めに星一郎に声を掛けた『ギルガメッシュ叙事詩』が収められたケースの前にやってくると、物部はふと思い付いたように足を止めて粘ねん土ど板ばんを眺めた。

「……本能と理性……獣じゆう性せいと人間性……いや、まさかな」

物部は軽く首を振って歩みを再開した。

やがて明かりが消え、世界最古の物語も闇の中に沈しずんでいった。

3

再びヘリに乗せられ送られた先は、星一郎の秘密の特訓場である廃はい工こう場じようだった。ヘリは二人を降ろすとすぐに飛び立ち、赤く染まりつつある空路みちを慌あわただしく引き返していった。

「……」

「……」

洛らく外がいの廃工場はすぐに静かになり、なんとも言えない沈ちん黙もくが漂ただよいはじめる。

星一郎が語りかける言葉を探していると、ディーナは懐ふところから細長いビニールの包みを取り出し、封ふうを切って中に詰つまっていた黒っぽい何かに齧かじり付ついた。

海外のお菓か子しなのだろうか。甘あまいにおいが漂う。

糖分補給で多少落ち着いたのか、ディーナは意を決したように星一郎に振り向いた。

「……ひとまず」

硬い声でディーナは告げる。

「引き受けたからには、仕事は全まつとうする。これから十日、わたしが貴方あなたに〈聖楔者〉のことを教授させてもらう。貴方も、それでいいな？」

「あ、はい……」

「それでは早さつ速そくだが、貴方の家に案内してくれ。先まずは貴

方を選んだ《天命の書版》を見つけねばならないからな」
　そう言うや、ディーナはさっと背を向けた。星一郎の顔を見ていたくないかのような態度に、星一郎は何か悪いことでもしたのかと首を傾げた。
　――と。
「ああ……そういえば、自己紹介がまだだったな」
　背を向けたディーナが金きん髪ぱつを翻ひるがえして振り返る。物部との対話中もヘリの中でも不機嫌さを隠かくし切れていなかったが、振り返った今の彼女は内心はどうあれ、凛りんとして真しん摯しな面持ちで真まっ直すぐ星一郎を見詰めていた。
「――わたしはディーナ・チャレンジャー。英国の魔導工学機関『図書館ライブラリ』出身の魔術師にして〈聖楔者〉だ」
「……星一郎。宿儺星一郎です」
「了解している。よろしくお願いする、宿儺」
　そう言って、ディーナは微笑んだ。
　あくまでも礼れい儀ぎとしての笑え顔がおなのだろうが、凛と引き締められた口元が緩ゆるむと、そこに現れたのは『天使のような』という形容を付けたくなる、可か憐れんな美少女であった。
「――では行こう」
　だがそんな笑顔もほんの一瞬。ディーナはすぐさま表情を引き締め直して背を向け、廃工場の出口へつかつかと向かっていった。
　星一郎はしばしぽかんと彼女の背を見送り、すこし遅れてその背を追った。
　廃工場の出口には、星一郎がここに来るのに使った自転車がひっくり返っていた。自転車を立たせて鍵かぎを外そうとすると、ディーナがそれに待ったをかける。
「自転車は置いてゆく方が良いだろう。そんなものでゆっくり走られたら堪たまらない」
　そう言うと、ディーナは懐から本型デバイス――〈第二書版〉を取り出した。〈第二書版〉を開き、ディーナは呪じゆ文もんを唱え始め

る。
「――〝我に付き随したがう機械仕じ掛かけの守護獣よ。疾とく来たりて我わが足、我が鎧よろい、我が牙きばとなれ〟――」
　開かれた〈第二書版〉の、魔導晶体で形作られた頁ページが魔力光を発する。魔力光を帯びた頁は風もないのにぱらぱらと捲めくれ、やがて綴とじられた頁は装丁を離れて空中に乱らん舞ぶした。
　小鳥の群れのごとく飛び立った頁たちはすぐさま地面に急降下して渦うずを巻く。星一郎が観察する間に、魔力光を帯びた頁の群れは見えない骨格に張り付くようにして何かを形作り始めた。
　やがて最後の一頁が貼はり付き魔力光が吹き消えた後には、目の覚めるような赤い大型バイクが現れていた。
「これは……？」
「わたしの『随ずい騎き』、ドライグだ。随騎とは〈聖楔者〉の乗騎。神々に付き随したがう使し役えき獣じゆうを魔導工学の技術で再現したものだ。貴方も、貴方を選んだ《天命の書版》の神格に応じた随騎を創造することになるだろう」
〈第二書版〉をしまい直すと、ディーナは慣れた動作で随騎ドライグに跨またがった。そして自分の後ろのシートをくいっと顎あごで示す。
「僕ぼくが後ろ？」
　星一郎が渋い顔をすると、ディーナは小さく鼻を鳴らした。
「男の面子メンツがあるか？　案外貴方は狭きよう量りような考えの持ち主なのだな」
「面子はともかく、ディーナは怪我人じゃないか。しがみついても大だい丈じよう夫ぶ？」
　ディーナの脇わき腹ばらには治ち療りよう用の呪符が巻かれたままだ。後ろのシートに乗れば、必然的に星一郎は彼女の脇わきに手を回さねばならない。
　星一郎の指し摘てきに、ディーナは何な故ぜが眼めを丸くし、少しして不機嫌そうに唇くちびるを歪めた。

「……傷はすでに塞ふさがっている。貴方が気にすることではない。それとも貴方は大型二輪の免めん許きよを持っているのか？」
「持ってはいないけど、魔ま導どう器きに大型二輪の免許が適応されるの？」
「慣れてないなら同じことだろう。さっさと乗れ」
　意固地な声で急せかされ、星一郎は内心で首を傾げながら大人しく従った。自分の〈第二書版〉が入ったケースごと抱かかえ込むようにしてディーナの腰こしに手を回すと、彼女はぴくりと肩を震ふるわせた。
「やっぱり不ふ愉ゆ快かいなら、僕は自転車で帰ってもいいけれど？」
「……それには及およばない。この上貴方を煩わずらわせるわけには行かない」
　つっけんどんなその返事に、星一郎は「ああ、そうか」と微笑ましい気分になった。
　ディーナは不機嫌で意固地な態度をとっているが、言葉の端はし々ばしから自分を厳しく律する性格なのは明らかだ。だからきっと――
　――恩を返す立場の自分がこれ以上借りを作るわけには行かない。
　きっとディーナは、そんな風に思っているのだ。
「む……」
　内心が自然と顔に出てしまっていたのだろう。肩かた越ごしに振り向いたディーナが星一郎の表情を見て眉まゆ根ねを寄せる。彼女が懐をジャケット越ごしに指で叩たたくと、〈第二書版〉の頁が一枚ぺらりと泳ぎ出て星一郎の顔を覆おおい、すっぽりと頭を包つつみ込むフルフェイスヘルメットに変じて表情を閉じ込めた。
「……自宅の住所は？」
　住所を告げると、ディーナは頭の髪かみ飾かざりを指で弾いてヘルメットに変化させた。
　真しん紅くの大型バイクは魔力光を発し、竜たつが吠ほえるような排はい気き音おんを立てて急発進した。

　警察に捕つかまらなかったのが不思議な速度で突っ走るドライグは、あっという間に星一郎の自宅マンションの前に辿たどり着ついた。
　星一郎が降りると、魔導バイクとヘルメットが元の頁に戻り、吸い込まれるようにディーナの〈第二書版〉へ還かえっていった。
「……普ふ通つうのマンションなのだな」
　高価格帯寄りだがファミリー向けとしては一いつ般ぱん的てきな部類から飛び出てはいないマンションを、ディーナは意外そうな顔で見上げていた。
「どういうのを想像していたの？」
「《天命の書版》に選ばれたからには、歴史ある旧家かと思っていた。〈聖楔者〉は魔ま術じゆつ的てき素養か、もしくは血筋による縁えんによって選ばれることが多い」
「残念ながらたいした家いえ柄がらじゃないよ。ここは叔お母ばさんの住まいだし、僕も京都の生まれじゃないし。父は中国地方の農家、母は東京の下町出身だった。まぁ、二人とも民みん俗ぞく学がくやら歴史学やらの研究をしていたおかげで、神社やお寺の知り合いは多いけれど」

「そのご両親は？」
「十年前に死んだよ」
　ごく普通の調子で答えたのだが、ディーナは申し訳無さそうに顔色を曇くもらせた。
「……済まない。余計な事を言わせてしまった」
「世間話だよ。気にすることじゃないさ」
「家族の死が世間話であるわけがない」
　思いの外強い声に顔を向け直すと、ディーナは蒼あおい瞳ひとみで真っ直ぐ星一郎を見み詰つめていた。
「家族の死を、世間話などにするべきではない」
「……うん。そうだね。ありがとう」
　彼女の真っ直ぐな瞳と言葉に救われた気持ちになって礼を言うと、ディーナは不可解そうに首を傾げた。
「礼を言われるようなことは言っていないと思うのだが？」
「当然のことがありがたいこともあるよ。ありがとう、ディーナ」
「……変な人だな、貴方は」
　よりによって彼女がそれを言うのかと、星一郎はぷっと吹き出してしまった。
「……不愉快な男だ、貴方は」
　ハの字だったディーナの眉が、見る見るうちに逆方向に吊つり上あがってゆく。彼女は不機嫌に星一郎の背中を押おして帰宅を急かせた。
　自宅に戻ると、当然ながら人気はなかった。
　ケースを自室に放ほうると、星一郎はディーナをリビングへ案内した。
「何か飲む？　緑茶に紅茶、なんなら本格烏ウー龍ロン茶ちやも用意できるけれど」
「いらない。余計な気き遣づかいだ」
　ソファにも座すわらず、ディーナは壁かべに背を預けて言い放った。

「しばらくは貴方のサポートをするとはいえ、『摩天の夜宴』が始まればわたしと貴方は敵同士だ。馴なれ合あうつもりはない」
「まぁまぁ。お茶の一杯くらい出さないと、僕の方が落ち着かない」
「それは貴方の都合だ」
　知ったことではないと、ディーナは取り付く島もない。
「貴方の住まいは分かったから長居をする気はない。この後すぐに新しい住まいを探さないとならないしな」
「新しい住まいって……泊とまるところがないの？」
「アルヴィンとのいざこざのお陰かげでもう使えない。とはいえ、必要な物はここにすべてあるからどうとでもなる」
　ディーナは懐の〈第二書版〉を叩いて言った。
「そういう訳だ。明朝八時にまた伺う。わたしの連れん絡らく先さきは決まり次第伝える。今日はこれで失礼する」
　話は終わりだと態度で告げ、ディーナはすぐに出てゆこうとする。
　――と。
「ごめんごめん、星くん！　朝はあんな事言ったけどやっぱり忘れ物しちゃった！」
　玄げん関かんが開く音の後に慌ただしい足音が続き、リビングのドアが勢い良く開いた。
「星くん、ブラとパンツってどこに――」
　苦く笑しようしながら飛び込んできた圭けい子こが、いましも出て行こうとしたディーナを真正面から捉とらえて言葉を途と切ぎれさせた。
「――――どちら様？」
「あ……わたしは……」
　予想しない一般人の乱入に、ディーナは面食らった顔でどう受け答えすべきかと言葉を探す。その隙すきに、
「ああ、ちょうど良かった。圭子さん、客間を使ってもいいですか？」
「へ？　ええ、物置き代わりに使ってるだけだから構わないけど……

なんで？」
「彼女を泊めてあげたいんです」
「……は？」
　言葉を探していたディーナが言葉を失ってぽかんと星一郎を眺める。
　圭子は星一郎とディーナの間で視線を行き来させ、腕うで組ぐみをして甥おいっ子こを見み据すえる。
「……説明してくれるのよね、星くん？」
「圭子さん、彼女はディーナ・チャレンジャーさんです。ディーナ、こっちは僕の叔お母ばの圭子さん」
「……ディーナ・チャレンジャーです」
　圭子に見詰められ、ディーナは居い心ごこ地ち悪そうに名乗った。
「実は……朝言ったようにバイトを探してたんですが、彼女はそのバイト仲間なんです。面接場所で知り合って」
「バイト、ねぇ。どんなバイト？」
「再現史し跡せきの整備です。技術も磨みがけて丁度良いと思ったので」
「……」
　ディーナは無言でまじまじと星一郎を眺めた。よくもまぁさらさらと口から出任せが出てくるものだと半ば唖あ然ぜん、半ば感心しているようである。
　が、星一郎の流りゆう暢ちような出任せはまだ始まったばかりだった。
「それで、ですね……実は彼女、実家から家出同然で飛び出して、新京都の親しん戚せきを頼たよってきたらしいんです」
「……あなた、ディーナさん？　ご出身は？」
「は、はい……イギリスのロンドンです……」
「そこから日本なんて、ずいぶん思い切りが良いわね？」
「もともと魔導工学の留学で新京都に来る予定だったらしいですよ。その留学で揉もめたのが家出の原因だとか」

「……新京都には多いからね。私の職場でも留学生を預かってる同どう僚りようがちらほらいるし。……それで？　フライング留学の家出娘さんをどうして泊めてあげたいの？」
「彼女が頼ろうと思っていた親戚が、家族旅行で居なかったんですよ。急に飛び出してきたせいで連れん絡らくしてなかったらしくて。かといって無理を言ってバカンスを切り上げさせるのは忍しのびないので、バイトしつつ親戚が帰ってくるのを待つことにしたらしくて」
「……それで？」
「ホテル代もバカにならないし、知り合ったのも何かの縁。どうせなら僕の家に泊まらないかと、こうして引っ張ってきたんです」
「……ふぅん……」
　甥の説明を聞いた圭子は、じぃっとディーナを観察する。
　いつの間にやら家出娘にされてしまったディーナは、かといってややこしい真実を説明することも敵かなわず、居心地が悪くなる視線を受け止めざるを得なかった。
「……それだけ？」
　圭子の呟きにディーナがはっとする。
　――何か勘かん付づかれたのか？
　警けい戒かいに表情が引きつるディーナから視線を移し、圭子は星一郎に改めて問とい質ただした。
「それだけ？　星くん、本当にそれだけが理由なの？」
「もちろん、それだけじゃありません」
「っ！」
　――まさか話す気か!?
　ディーナが視線で咎とがめてくるが、星一郎はそれに構わず、
「母親同然の圭子さんにこんなことを言うのは恥はずかしいんですが……そりゃ、下心はあります。彼女、すごく綺き麗れいですから」
「……は？」
　呆あきれたり緊きん張ちようしたりと忙しいディーナが、これまで

で一等気の抜ぬけた表情をした。
　綺麗と言ったが、そうやって気を張らない素の顔は思いの外幼げで、むしろ『可愛かわいい』と言うべきだったかと星一郎は反省した。
「……ぬふぅん……」
　星一郎の言葉をしばらく吟ぎん味みしていた圭子だったが、一声唸うなると組んでいた腕うでを解き、リビングを横切って電話を手に取った。
「……星くん！」
「はい」
「いつもお世話になってるお寿す司し屋やさんの電話番号っていくつだったかしらっ？」
「出前表は台の横にありますよ」
「ああ！　そうだったわね！　ねぇ、お赤飯ってお寿司屋さんにもあるのかしらっ？」
「仕出しもやってたから大だい丈じよう夫ぶなはずですが」
「ついでに特上も頼たのみましょう！　めでたい日なんだからお祝いしなきゃ！」
　難しい顔をしていたのから一転。圭子は、正月と夏祭りと、ついでにクリスマスとハロウィンまで一いつ緒しよにやってきたような凄すさまじいハイテンションで騒さわぎ始めた。
「星くんが……一時は女性不信なのかしらと心配した星くんが女の子に興味を持つなんて！　記念日よ！　これは記念日だわ！　天国の兄さんと義姉ねえさんも喜んでるわ！」
「それで、圭子さん。客間は？」
「ええ、使ってもらって構わないわ！　いえ、ぜひとも使ってもらいなさい！　あ、お寿司屋さんっ？　赤飯と特上寿司を三人前！　一番いいネタをお願いね！」
　圭子の大げさなはしゃぎっぷりに星一郎が苦笑していると、襟えりがぐいっと引っ張られた。

「……どういうつもりだ？」
　引き寄せたディーナが怒りで顔を赤くして睨んでくる。
「何であんなデタラメを？」
「でたらめもあるけど、一番大事なことは間ま違ちがいないと思うけど？　君は当面の住む場所を探してる。そしてここには空いてる部屋がある。連絡のタイムラグもないしね」
「だからといって……！」
「それに君は勘かん違ちがいしてる。またあのアルヴィンが襲おそってきたらどうするんだい？」
「……それはそうだが……」
「僕も彼かれに顔を覚えられた。一緒に居た方が何かと合理的だと思うけど？」
「……それだけか？」
　ディーナが疑わしげに目を細める。
「本当にそれだけが理由か？」
「――ちょっと前に同じセリフを聞いた気がするなぁ」
「答えろ」
「まぁ、いろいろ理由はあるけど……一番の理由は君が心配だからかな」
「……」
　ディーナは口をパクパクさせた。何か言いたいが、うまい言葉が見つからないらしい。
　彼女はさらに口を捻ねじ曲まげたり眉根を寄せたり髪かみを掻かき毟むしったり身体を捻ひねったりと身体全体で懊おう悩のうぶりを表現した後、肩を落とし、諦あきらめたような視線をじとりと向けてきた。
「……貴方、実はものすごい女ったらしだろう？」
「ホテルでも言ったけど、彼女いない歴＝年ねん齢れいだよ」
「どうだか……〝彼女〟がいないだけではないのか？」
　ひどい言い草だが、星一郎の場合は単に慣れているというだけだ。

幼い頃ころは姉に加えて幼おさな馴な染じみの姉妹と一緒に育てられたし、京都に越してきてからも叔母と姉という家族構成で、とかく身近には女性ばかり。おまけにその誰だれもがやたらと馴れ馴れしいものだから、あしらい方だけはすっかりお馴染みになってしまったのだ。

疑わしげな瞳を向けるディーナに、星一郎はおどけるように肩を竦めた。

「どうしても嫌いやだって言うなら仕方ないけど、右も左も分からない初心者を置いてきぼりにするのはちょっと無責任なんじゃないかな？」

「……分かった」

ディーナは諦めたように肩を落とした。金髪も疲つかれたように重々しく肩から零れ落ちる。

「……『摩天の夜宴』が始まるまでの十日だけ、世話になる」

「うん。よろしく、ディーナ」

星一郎は笑顔で右手を差し出す。ディーナは恨うらめしげに睨んだ後、溜め息交じりにその手を握にぎり返した。

「星くん、お寿司屋さんすぐに来てくれるって！　冷えたビールと吟ぎん醸じよう酒しゆを用意して！」

電話を終えた圭子が勢い良く振ふり向き、ディーナは慌てて星一郎の手を解いた。

言いい含ふくめられて悔くやしげなディーナを横目にしつつ、星一郎は叔お母ばの物言いに首を傾かしげた。

「圭子さん、仕事はいいんですか？」

「いいのよ！　部下ってのは上司の無理を通すために存在するんだから！」

「ブラック上司だなぁ……」

「いいから早く！　ディーナさんはゆっくりしててね！　あ、お茶でも飲んでる？　もっとも私は麦茶を注ぐことしか出来ないんだけど！」

「は、はぁ……」
　ハイテンションな圭子に気け圧おされるディーナが縋すがるような目を向けてくるが、星一郎は素知らぬ顔でキッチンに引っ込む。
　星一郎が宴うたげの用意をしている間にも、圭子は早速ディーナを質問攻めにし始める。
「ディーナさん、綺麗な金髪ね！　金髪は劣性遺伝とされているけどご家族も金髪なの？」
「い、いえ……母と兄は黒毛で……」
「そうなの？　だとしたら星くんとの赤ちゃんは金髪になる可能性が少なそうね！」
「あ、赤ちゃんって……！」
「ああ、ごめんなさい！　ちょっと調子に乗りすぎたわ！　そうよね、まだこの話題は早すぎるわね！」
「はぁ……」
「それじゃあ話題を変えましょう！　おっぱい大きいけれどもう星くんに揉まれちゃったのかしら？」
「ぶふぁらっ！」
　宿儺家に、あっという間に姦かしましい空気が満ちてゆく。それが妙みように懐なつかしく思えて、星一郎はエプロンを身に着けながらひっそりと微笑むのだった。

※　※　※

　その闇やみには、絡からみつくような粘ねん度どがあった。
「……失敗した、ねぇ」
　揶や揄ゆする声が、闇の粘度をさらに増した。
　おそらくは何ど処こかのビルの空あき店てん舗ぽなのだろう。がらんとした空間を、窓から差し込む月光だけが弱々しく照らしている。

月明かりだけではすべてを照らし出すには到とう底てい足りず、広い室内のところどころに暗くら闇やみが黒々と居い座すわっていた。

その部屋の真ん中に、一人の男が両りよう膝ひざを突いている。横合いから差し込む月光に照らされた顔の右半分が、出来たばかりの生々しい火傷やけどで引ひき攣つっている。

アルヴィン・ヴァイスだった。

廃工場での戦せん闘とうにおいて獰どう猛もうさを剥むき出だしにしていたアルヴィンであったが、今の彼は瞳が曖昧で口を半開きにしている。まるで心を抜き取られたかのようだった。

「……失敗した、ねぇ」

揶揄するセリフが絡みつくような悪意を増して繰くり返される。部屋の奥おくの一番濃こい闇に身を浸ひたしていた人物が、カツンと踵ヒールを鳴らして月明かりに歩み出た。

黒い——黒い長ちよう髪はつに黒いドレスの若い女だった。

反対に、肌はだは青あお褪ざめて見えるほどに白々としている。

モノトーンの装よそおいながら、彼女から漂ってくるのは婀あ娜だめいた蠱こ惑わく的てきな気配であった。

「……まさか、失敗するなんて……」

女は悩なやましげに嘆たん息そくして右みぎ腕うでを持ち上げる。肩から剥き出しになった右腕のぬめるような白い肌に、精せい巧こうな金属製の蛇へびの彫ちよう刻こくが巻き付いていた。

黒いマニキュアの塗ぬられた指がアルヴィンの顎に添そえられる。

「……本当、使えないわね」

女はアルヴィンの顔を容よう赦しやなく叩いた。乾かわいた音が響ひびく。

「相手はディーナ・チャレンジャー——『最強の力を持った最弱の〈聖楔者〉』じゃないの。美お味いしい獲え物ものよ。それこそ夜宴が始まれば他の〈聖楔者〉が放っておかない。だから多少の危険を冒おかしてでも襲わせたのに……おめおめと逃にげ帰かえって来るなんて」

女は再び右手を振るう。だが、頬ほおを張られても表情を変えないアルヴィンを、彼女は心底馬ば鹿かにしきったように見下ろす。

「いじめ甲が斐いのない男。もっとも、そうしたのは私なのだけれど、ね」
　女はにたりと笑うと、右腕に巻き付いた蛇の彫刻にキスをする。すると蛇の彫刻――いや、蛇の形をした何かが、しゃらりと鱗うろこを震わせた。
　途と端たん、アルヴィンが奇き声せいを上げてのた打ち回った。胸むな元もとを掻き毟り、首に巻かれた金属製の蛇に手を掛かける。
「ふふっ。ムリムリ、絶対外れないわよ。その蛇は単なるマーキング。私の権能ちから――〈夜魔のチエーン・オブ縛鎖・ナイトメア〉ががっちり喰くい込んでいるのは、アンタの魂たましいそのものなんだから」
　女はくすりと笑い、もう一度右手の蛇へキスをする。
　するとアルヴィンは恍こう惚こつの表情となって身体を仰のけ反ぞらせた。
「アンタをイカすも殺すも私次し第だいってわけ。ほんと、男を犬にするのは簡単だわ。ちょっと桃もも色いろな夢を見せてやるだけなんだから。……ああ、勝手にイッてはダメよ？」
　腕に巻きついた蛇をぺろりと舐なめ上げ、女はアルヴィンを蹴けり転がした。無様に転がったアルヴィンが、縋るような声を上げる。
「くふふ……あぁ、情けないったらありゃしない。惨みじめったらしく夢でイキたいの？　だったら犬は犬らしくしなさいな」
　女の言葉に、アルヴィンはすぐさま四よつん這ばいになって女のヒールに舌を這わせた。
「すっかり犬らしくなったわね。……けど張り合いがなさすぎて興ざめだわ」
　女はわざとらしく溜ため息いきを吐つくと、靴くつを舐めるアルヴィンの顎を蹴り上げる。無理やり顔を上げさせられた青年の額に、女がとん……と指先を置く。
　――しゅるる……
　右腕に巻き付いていた蛇が鱗を震わせて鎌かま首くびを持ち上げ

た。金属光沢を持つ蛇は本物の蛇よりもよほど生き物めいた滑なめらかな動きで、アルヴィンの額にしゅるしゅると巻きつく。
「さて……それじゃ一部始終を見せてもらいましょうか」
　女が呟くと同時に目を閉じると、逆にアルヴィンの目がかっと見開かれた。見開かれた目玉は別の生き物のようにぐるぐると蠢うごめき、全身から一気にどっと汗あせが吹ふき出した。
「……あら？　へぇ、助すけっ人となんていたのね。ふぅん……けっこうイイ男ね」
　女はガクガクと震えるアルヴィンを一いつ顧こだにせず、瞼まぶたの裏に映っているらしい別の光景に興味深げな反応を示した。
「かっこいいじゃない、この子。ちょうどこの犬にも飽あきてきたし……くふふ。この子はいったい、どんな〝夢〟で私を愉たのしませてくれるのかしら」
　女は艶然に微笑ほほえむと、獲え物ものを見つけた蛇のように舌舐めずりをするのだった。

三章　少年ト少女

1

　ディーナ・チャレンジャーが目を開くと、そこにあったのは薄うす暗ぐらく見知らぬ天てん井じようだった。
「……？」
　のろのろと起き上がる。途端、ずきりと頭痛がして頭を押さえた。
　しばらくじっとして頭痛をやり過ごし、続いて自分から漂う酒さけ臭くささに思わす鼻を摘つまんだ。
「うぅ……いったい何が……」
　周囲を窺うかがい、ようやく自分がソファに横になっていたらしいと気付く。目の前のテーブルや床ゆかに大量のビールの空き瓶びんが散らかり、さらに空の一升瓶を抱えて眠ねむりこける女性を見つけた。
「……ああ、そうか……そうだった……」
　ようやく記き憶おくが戻もどってきた。
　昨日、宿すく儺な星せい一いち郎ろうの口車に乗せられる形で逗とう留りゆうすることになった後、彼の叔母の宿儺圭けい子この歓かん待たいを受けたのだ。
　圭子の押しの強さはすさまじく、ディーナはほとんどなされるがままだった。挙句、
「ディーナさんは何なん歳さい？　十七？　じゃあビールまでならオッケーね！」
　と言ってビールを押し付けられた。
　飲めるには飲めるのだが、ディーナは日本のビールは好みではない。やはりビールと言ったらラガーではなくエールだろう。そう思いつつも礼儀から一杯だけと注いでもらったら、これが思いの外美う味まかった。京都の地ビールとのことだった。

――思えば、この一杯できっぱり断るべきだったのだろう。

実のところ、ディーナはそれほど酒に強くない。どうにも日本人は外国人を一緒くたに酒に強いと思っているようだが、それは大きな間違いである。

ほろ酔よいのディーナのコップに、圭子はいつの間にか地ビールではなく日本酒を注いでいた。飲んで初めて入っていたのが透とう明めいな液体と気付き……そこで記憶が途切れている。

身体からだに染しみ付いたアルコール臭しゆうからして、かなり長く付き合わされたようだ。よくよく見れば圭子が抱え込んでいる以外にも、一升瓶がそこらにごろごろと転がっている。

「……最悪だ……」

二ふつ日か酔よいとは別の痛みを覚え、ディーナは頭を押さえて蹲うずくまった。

辛かろうじて服はそのままだが、いったいどんな醜しゆう態たいを晒さらしたのかと気が遠くなる。寄宿学校の無礼講でさえこんなことはなかった。思わず目め頭がしらが熱くなる。

ディーナは情けなさを堪こらえ、もう一度状じよう況きようを確かく認にんしようと顔を上げた。

室内は薄暗いがそれも当然。壁かべ掛かけ時計が示す時刻は午前五時を回ったばかりだ。

リビングにはディーナと圭子しかいない。星一郎の姿はない。自分だけさっさと寝しん室しつに引っ込んだらしい。こんな状況に放り込んでおいてなんという無責任さだろうか。

ディーナは苛いら立だち紛まぎれに勢い良く立ち上がった。すると足元にぱさりとタオルケットが落ちた。今気づいたが、どうやら眠りこけた後に誰かが掛けてくれていたようだ。よくよく見れば、圭子の横にもタオルケットが丸まっている。

「……ふんっ」

圭子にタオルケットを掛け直し、ディーナは静かにリビングを抜け出した。

家主の許可がなくて恐きよう縮しゆくだが、シャワーを使わせてもらわねばならない。こんな酒臭い無様な姿をあの少年に見られるわけには行かない。業ごう腹はらだ。

「……宿儺星一郎……」

名を呟つぶやくと、ますます腹立ちでむかむかしてくる。

助けてもらったのは感謝している。彼がいなければ、自分は『摩天の夜宴バビロン・ナイト』を待たずして降くだされていただろう。だからこそ〈聖楔者ヒエロス〉の教導を引き受けたのだ。

……が、感謝しているからといって好意を抱いだけるかは別問題だ。

まず、あの余よ裕ゆうぶった態度が気に入らない。女性は男性が守るべきという傲ごう慢まんなフェミニズムが見みえ隠れする。たしかに自分は力の足らない〈聖楔者〉かも知れない。だからといってそんな風に扱あつかわれるのは、自分の覚かく悟ごが安く見られているということではないか。

それに、妙に女性の扱いに慣れている風なのも苛いら立だたせる。紳士的ジエントルマン？　まさか。あれは軟なん派ぱ極きわまりない女ったらしの態度だ。男たるもの、やはり平時より毅き然ぜんとした態度であるべきだ。あんな擦すり寄よるような言動は好きになれない。

極きわめつけは、あの笑顔だ。日本人の悪い意味での曖あい昧まいな笑えみそのままの表情ときたら！　本心を見せないなら、いっそ仏ぶつ頂ちよう面づらの方が万倍もマシだ。

考えれば考えるほどに眉み間けんに皺しわが寄る。彼かの女じよはそれに気付いて慌あわてて額を擦こすった。

いけないいけない。あんな男のせいで皺なぞ出来たら余計に腹が立つ。

これから十日間、否いやが応おうでも彼と顔を合わせ続けねばならない。大事なのは平常心だとディーナは心に刻んだ。

ディーナはふらふらと歩きながら、洗面所のドアを開けた。

「ぁ――」
「あ。おはよう、ディーナ」
　噂うわさをすれば悪あく魔ま、というべきか。ドアを開けた先にいたのは星一郎だった。
　しかも、素すっ裸ぱだかである。
　睡眠中の人間を気遣ったのか、湯気の上る濡ぬれタオルで身体を拭ぬぐっている。ごしごしと首筋を擦りながら、星一郎はドアに手をかけたまま固まっているディーナに苦笑を向けた。
「ええと……さすがに恥ずかしいからちょっと待っててくれる？」
「……あ、ああ!?　す、す、すまないっ！」
　ディーナは慌ててドアを閉め、後ろによろめき廊ろう下かの壁にぶつかってずるずると蹲った。
「……う、ううう……」
　見てしまった。
　はっきりと見てしまった。
　男の人の身体をあんなにはっきりと見てしまった。
「う、ううう……に、兄様の――だって見たことないのに……っ！」
　ぶんぶんと頭を振るが、余よ程ほどショックだったのか、それとも残った酒精が邪じゃや魔まをしているのか。焼き付いた映像はなかなか脳のう裏りから離はなれてくれない。
　昨日の戦闘を見てある程度予想はしていたが、魔ま導どう工学士を目指す学生とは思えぬ鍛きたえられた身体だった。これ見よがしな筋肉は付いていないが、よくしなる撥ば条ねを思わせる引き締まった立ち姿。
　そして――胸の傷きず痕あと。
　大きな傷痕が星一郎の胸に刻まれていた。まるで砲ほう弾だんでも命中したような、冗じょう談だんみたいに大きな傷痕だった。
「……」
　さっきまで胸中で罵ののしっていた人物の思いも掛けない姿を目ま

の当あたりにし、ディーナは申し訳無さを覚えた。あんな目立つ傷痕、見られて楽しいものではあるまい。
　そもそも急にドアを開けたのはディーナである。一言謝あやまらなければと、彼女は自分に言い聞かせたが、
「――驚おどろかせちゃってごめん」
「まったくだ！」
　星一郎が服を着て出てきた瞬しゆん間かん、ディーナは即そく座ざに立ち上がって怒ど鳴なり返した。
「男女が同じ家で暮らしていてその無防備さはなんだ！　そんないい加減さでよくも宿を提供するなどと言えたものだ！」
「それを言われると……油断してたのは確かかな。反省してます」
「猛もう省せいしろ。もう終わったなら、シャワーを借りるぞ」
　星一郎を押しのけて洗面所に入ってドアを閉め鍵かぎを掛け――ディーナは盛大に嘆息した。
「……やってしまった……」
　ノックをしなかった自分こそが油断していたのに責任を押し付けてしまった。己おのれの卑ひ怯きような言動に、ディーナは頭を抱えて泣きたくなる。
　彼と――宿儺星一郎と向かい合うとペースが崩くずされる。訳もなくイライラさせられ、意味もなく言葉がキツくなる。自分は堅かた物ぶつであると自覚しているが、あんな礼れい儀ぎ知らずではない筈はずだ。彼を見ると何であんなに攻こう撃げき的てきになってしまうのだろうか？
　いくら自問しても頭の中はまだアルコールの霧きりがしつこく居座っており、明めい瞭りような答えは見つからない。ディーナは頭を振って思考を切きり替かえた。さっさとシャワーを浴びてスッキリしなければと服に手を掛け――その手がぴたりと止まる。
「う……」
　ディーナは気付いてしまった。ほんのついさっきまで、今まさに彼女が立っているその場所に、裸はだかの星一郎が立っていた事に。

「う、うぅ……」
　一度気付いてしまうと、さっきの光景が自然と浮うかび上がってくる。女の自分とは骨格からして違ちがう男の身体。おまけに止よせばいいのに、鼻が無自覚に洗面所の空気から微かすかな汗の臭においを嗅かぎとってしまう。
「……男の、におい……って、わたしは何をやっているんだ！」
　ディーナは慌てて自分の頭を殴なぐり始めた。かなり本気な拳こぶしの痛みに映像と嗅きゆう覚かくがびっくりして引っ込む。
　自意識過剰だ。初心な初等部の女子でもあるまいし！
　芽生えた怒いかりの助けを借り、ディーナは羞しゆう恥ち心しんも一緒に捨てるように勢い良く衣服を脱ぬぎ放った。さっさとシャワーを浴びようと浴室のドアに手をかけ、
「――ディーナ？」
　ノックとともにドア向こうから届いた星一郎の声に、ディーナは「ひゃっ！」と小さい悲鳴を上げて蹲った。脱ぎ放った衣服を引き寄せ、慌てて肌を隠かくす。
「聞きそびれてたんだけど、何か嫌きらいなものはある？　リビングの掃そう除じついでに、朝ご飯の用意もしちゃいたいんだけど？」
　何をいけしゃあしゃあと！　どうせ隙あらば覗のぞき見みようという魂こん胆たんだろうに！
　ディーナはいつ開かれるとも分からない洗面所のドアをきつく睨にらむ。
　が、ドアはノックされただけでそれ以上何が起こるわけでもなかった。それに考えてみれば、さっきしっかりと自分で鍵を掛けたのだ。彼が入ってこれるワケがない。
「……嫌いなものはない」
「そう？　それなら良かった。邪魔してごめんね」
　それだけ言って、ドアの外の星一郎は戻っていった。
「……おのれ、おのれ、おのれっ！」
　馬鹿みたいな自分に苛立ち、それ以上にあの呑のん気きな声に腹が

立つ。
　ディーナは浴室の給湯器の温度設定を上げ、思いっきり熱いシャワーを頭に被かぶった。

　リビングに戻った星一郎がますやるべきは、床に寝っ転がって邪魔な圭子を寝室に運ぶことだった。よっこらせと抱き上げると、圭子は酒臭い息を撒まき散ちらしてむずかる。
「うう～ん……星くぅん、眠いぃ……」
「飲み過ぎですよ、叔母さん」
「うぅん、オバサンなんていっちゃやぁ……うふふっ、お姫ひめ様さま抱だっこだぁ……んんっ？　なんで顔が赤いのかなぁ？　圭子お姉さんのあられもない姿に欲情しちゃったぁ？」
「……そう思うんだったらもう少しどうにかして下さい」
　星一郎は少し乱暴な手つきで圭子を運んでベッドへ放り投げた。

※　※　※

「それじゃ、行ってくるわね」
「いってらっしゃい、圭子さん」
「本当なら仕事なんてしてる時じゃないけど、使えない部下ばっかりでね」
「部下の人たちが聞いたら泣きますよ？」
「けど、安心したわ！　星くんもやっぱり男の子なのね！　本当に安心したわ！」
「男じゃないなら何だと思ってたんですか？」
「くれぐれもディーナさんに失礼のないように！　ガツガツしてる男は嫌われるから！」
「いつもは肉食系になれって言ってましたよね？」

「だからといって淡たん泊ぱくすぎるのもいけないわ！　女の子は男の子が思ってる以上に心細い生き物なのよ？　私も女の子だからよく分かるわ！」
「昨日はもう賞味期限切れって言ってませんでした？」
「繊せん細さいに、けれど時には力強く！　優やさしさだけでも逞たくましさだけでも駄だ目めよ？　女の子はね、男にいろいろ求めるものなのよ！」
「いいからさっさと行って下さい。部下の皆みなさんが待ってるんですから」
「それじゃあディーナさん、くれぐれも星一郎をお願いね！　こう見えてこの子――」
「いってらっしゃい、圭子叔お母ばさん」
　いいかげん面めん倒どうになった星一郎は圭子をぽいっと放ほうり出だし、夜中に虫が侵しん入にゆうするのを警戒するような動きで素す早ばやくドアを閉めた。
「……」
　覗き見で外を窺うと、圭子は締め出された猫ねこのように玄関の前をうろうろしていたが、やがて後うしろ髪がみを引かれるような顔をしながらぐずぐずと廊下の向こうへ消えていった。
「――やっと行った。ごめんね、騒そう々ぞうしくて」
「……いや」
　げっそりとやつれたディーナが力なく首を横に振る。
「……とても家族思いの叔母上だ……」
「そう言ってくれるのは嬉うれしいけど……」
　かなり控ひかえめで、かなり分厚いオブラートに包まれた表現をするディーナに、星一郎は申し訳なさと妙な焦あせりを覚えて言い訳を探した。
「……責任感が空回りしちゃってるんだ。事ある毎ごとに『学生らしい日常』ってのを期待するんだけど、その『日常』には、僕ぼくが恋こい人びとをつくるって項こう目もくが含まれてるらしくて」

圭子には感謝しているし、大事な家族として親愛の情もある。だが、あの『幸せにしなきゃ』という想おもいからくる期待には――それこそ実の母親に対するのと同じように――すこしばかり辟へき易えきすることがある。

「……家族思いの叔母上なのだな」

さっきと同じセリフだが、さっきと違う温かみのある声だった。笑いはしていなかったが、ディーナの顔にリラックスしたようなごく自然な緩ゆるみが見え隠れしている。

そういえば昨日も、父母の死について真しん剣けんに苦言を呈ていしていた。

彼女にとって『家族』はとても重要な話題であるらしい。

「……うん。自じ慢まんの叔お母ばさんだよ」

ここで「そんなことないよ」などと謙へりくだったらまた怒おこられそうなので、星一郎は素す直なおにディーナの言葉を受け取った。

「あ、今のセリフは圭子さんには内ない緒しよにしておいてくれる？　あの人、すぐに調子に乗っちゃうから」

「ああ……そう、かもな」

くすりとディーナは苦く笑しようした。

ようやく笑ったと星一郎はホッとしたのだが、ディーナは自分の頬が緩んでいるのに気付くと、すぐさま表情を引き締め直した。

「……では、さっそく準備しよう」

彼女は無理やり話を変えるように、懐ふところから〈第二書版セカンダリイ〉を取り出した。

「〈第二書版〉の説明書は、すでに目を通したな？」

「一応はね」

星一郎も尻しりポケットから自分の〈第二書版〉を取り出した。

「〈第二書版〉は高性能のＭＡＲメーデバイスとしても使える。規格外、といっても良い。事実上無限に等しい術式保存容量に、スーパーコンピュータ並みの演算機能――人間の造り出したもっとも優すぐれた道具ツールだ」

「けど、それはほとんどおまけのようなもの……」
「そうだ。〈第二書版〉の真の機能は《天命の書版トウプシマテイ》の欠片かけらに宿った神格を移うつし換えること。そしてすべての神性と神格を統合して《天命の第トウプシマテイ二書版・セカンダリイ》を完成させる『神話再編プログラム』。規格外の保存容量と演算機能はすべてその為ためにある」
　ディーナは自分の〈第二書版〉を、星一郎の持つ〈第二書版〉と並べた。
「〈聖楔者〉となって、霊視の力も上がっている筈だ。分かるな？　わたしとお前の〈第二書版〉の違いが？」
　言われるまでもなかった。ディーナの〈第二書版〉には周囲の魔ま力りよくが集まるだけでなく、緩やかに自らも魔力を湧わかせていた。そのせいか彼女の〈第二書版〉には生き物の息いき遣づかいのような、奇き妙みような存在感が備わっている。
　一方、星一郎の〈第二書版〉はただそこにあるだけだった。スイッチを入れなければ反応しない、無機質で機械的なデバイスのままである。
「まずは、お前を選定した《天命の書版》の欠片を探さねばならない。お前の〈第二書版〉に、お前を〈聖楔者〉たらしめている神格を移行させる」
　家の中を振り返ってディーナは言った。
「手近なところから始めよう。最初はこの家の中からだな。何か魔ま術じゆつ的てきな物品が保存されている場所に心当たりは？」
「……この家でそんなものがある場所は、一箇所しか心当たりがないな」
　星一郎は彼女がこちらを見ていないのを幸いに、小さく溜め息を吐いた。心当たりのある場所に入るのは、すこし億おつ劫くうなことだった。
　星一郎はディーナを先導して、リビング横の部屋の前に立った。
「……」

ほんの一いつ瞬しゆんだけ逡しゆん巡じゆんし、ドアを開く。後ろのディーナが息を呑のむ気配を感じた。
「これは……すごいな」
八畳ほどの広さの部屋だったが、フローリングの床はほとんど見えない。ハードカバーの専門書が積み重ねられているからだが、それらはまだ序の口だった。
入って右側には、動いてはいないが、天井まで届く大型コンピュータが並んでいる。およそ個人で所有するには敷しき居いの高い高性能個人サーバーに、しかも非常用電源機まで併へい設せつされている。
向かって正面、ベランダに面した窓には、びっしりと何らかの数式、漢字やらラテン語やらで殴り書かれたメモ、そして東西を問わない各種魔法式が描えがかれていた。
さらに左手。壁かべのほとんどを占せん拠きよする硬こう化かガラスのケースには、古びた書物がズラリと並び、土み産やげ物もののような人形の横には、用よう途と不明正体不明の奇妙な道具が置かれている。
「すごいな……さすがは噂に聞こえた〝天才魔導工学士〟の私室、というわけか」
「……やっぱり気付いていたんだ」
「さすがに苗みよう字じだけでは分からなかったが、カルディア委員会での言葉を追っていれば察しは付く。そしてこの部屋だ。お前の姉は――あの宿儺摩ま子こなのだな？」
「……そう。宿儺摩子は、僕の姉だ」
「そうか……言い忘れていたが、心からお悔くやみを」
ディーナは黙もく祷とうしてそう言った。
――宿儺摩子。
星一郎の二つ年上の姉で、十五歳にして数学、言語人類学、魔導工学の博士号を取得した〝天才魔導工学士〟。魔導工学の歴史を一人で二十年は進めたと賞賛され、彼女の為だけに専門の研究施設まで用意された。

叔お母ばの圭子も優ゆう秀しゆうな魔導工学士だが、天才は彼女の為にある言葉だと舌を巻いていた。

およそ栄光と名めい誉よが約束された彼女であったが、その輝かがやく道は突とつ然ぜんに断たち切られた。

一年前、大規模な魔術理論の実証実験中、術式が暴走。実験を行っていた嵐あらし山やまの研究施設を中心に小規模な——しかし一区画を更さら地ちにするには十分な『魔力災害』が発生した。この局地的魔力災害の犠ぎ牲せい者しやはたった一人。実験の総責任者である宿儺摩子ただ一人だった。遺体は見つからず公的には行方不明とされているが、魔力災害の中心地に居たことは確実であるため、生存は絶望視されている。

実験事故は宿儺摩子の所為せいで起きたとも、彼女がただ一人残ったからこそ被ひ害がいは最小限に収められたとも言われたが、いずれにせよ魔力災害で一度壊かい滅めつした新京都において、この『嵐山の悲劇』はタブー視されるようになった。

おそらく叔母の圭子があれほど星一郎を気にかけるのも、摩子の一件が尾おを引いているからだ。『嵐山の悲劇』を知って出張先から帰ってきた圭子は、星一郎に取り縋ってひたすら「ごめんなさい」と繰り返した。

「本当は認にん定てい死亡の手続きもしなきゃいけないんだろうけどね。この部屋ももっと早く片付けるべきだったんだけど……まぁ、よい機会かもね」

星一郎は肩かたをすくめて部屋に踏ふみ入った。

ディーナは姿勢を正して礼をしてから入ってくる。

二人はまず床に積み上がった書しよ籍せきを廊下に運びだして積み上げた。書籍の山はいつ崩れるか分からなかったが、一時しのぎでも足の踏み場が出来なければはじまらない。

フローリングの床が見えるようになって、ようやく呪物の捜そう索さくが始まる。

「……それっぽい反応はなさそうだけど」

魔術的機構を備えた聖遺物は歴史を経へてその魔力親和性を増し、自おのずと魔力を引き寄せるようなる。星一郎は〈聖楔者〉となってより高まった霊視力で部屋を探さぐるが、不自然な魔ま力りよく溜だまりは見当たらない。

「これほどの設備を備えた部屋に、聖遺物を何の処理もせずに置くとは考えられない。なんらかの封ふう印いん処理がしてあるとも考えられる」

「結局は手作業、力仕事になるわけか」

部屋のほぼ一面を占めるガラスケースを開き、ひとつひとつ取り出して確認し始める。

「そういえば、《天命の書版》はどんな形を？　カルディア委員会で見せられた石版の欠片と同じもの、で良いのかい？」

「それで間ま違ちがっていない。《天命の書版》の欠片は、欠片というだけあってどれも同じような形と質感をしている」

手て掛がかりはないかと古びた書籍を捲めくりながらディーナが答えた。書版の捜索などは星一郎の仕事と割りきって知らんぷりも出来るだろうに、律りち儀ぎな娘むすめである。

「見ればすぐに分かる。書版の欠片を目にしたからこそ〈聖楔者〉となったのだ。お前は覚えていなくても、『神デインギル』の楔くさびで《天命の書版》と〈聖楔者〉は繋つながっている」

頷うなずきながら、星一郎はいつの間にか彼女が自分を「貴方あなた」から「お前」と呼ぶようになっているのに気付いた。

――ちょっとは距きよ離りが縮まっているのだろうか？

とはいえそんな野や暮ぼな質問は出来ないので、代わりに昨日から考えていた事を口にした。

「――僕を選んだのは、いったいどんな神格だと思う？」

「それは、わたしも疑問に思っていた」

新しい古書を取り出しつつ、ディーナは横目に星一郎を見た。

「……時代の変へん遷せんとともに様々に〝翻ほん訳やく〟されて変質したとは言っても、《天命の書版》に宿った神格は〝原版〟の流れ

を汲くむものだ。だからある程度は類推できるものだが……お前は劇的に向上した身体能力と神性の宿った拳でアルヴィンに迫せまった。故に『戦いくさ神』か、その眷けん属ぞくたる『戦士』の神格かとも思ったが……」

　空から振ぶりに終わった古書を背後に積んで、ディーナは奥おく歯ばに物が挟はさまったような顔をした。

「……『戦神』に連なる神格ではないような気がする。かといって『戦士』とも異なるような……我ながら上う手まく言葉に出来なくてもやもやするが……」

「それを考えると、ディーナを選んだ神格ははっきりしているね」

　よく分からない置物に魔術的な痕こん跡せきがまったく無いのを確認しながら星一郎は言った。

「昨日、ディーナが戦闘で見せた大おお槍やり。アルヴィンはあれを『ブリューナク』と呼んでいた。ディーナが《天命の書版》から引き出した顕けん現げん神格は『光明神ルー』か、その武器である『神しん槍そうブリューナク』。つまり君を選定した《天命の書版》は『戦神』か『神槍』に連なる神格の原版なんだろう？」

「……己を選んだ《天命の書版》の情報はアキレス腱けんともなりうる。ペラペラと喋しやべるほど、わたしはお人ひと好よしじゃない。他人のことより、まずは自分の心配をしろ」

　ディーナはこちらに向けていた視線を手元に戻し、黙もく々もくと確認作業に戻った。

　少し調子に乗りすぎたかと反省し、星一郎も口を閉じて次の物品の確認に取り掛かる。

　二人は黙々と摩子の私室の捜索を続けたが、ケースにも、機材の裏や押おし入いれの中を総ざらいしても、星一郎を選んだと思おぼしき書版の欠片は発見できなかった。

「他に心当たりのある場所は？」

「この家の中じゃ、あそこ以外には考え付かない」

　遅おそめの朝食を摂とりながら、二人は次の行動を相談した。

「探すだけで一日を無む駄だにするのも考えものだな……」
　ディーナは昼食の野や菜さい炒いためを頬ほお張ばり、むっと口元を引き締めた。朝食の時も同じ反応をしていたが、何やら星一郎の作った食事の味あじに納なつ得とくがいかないようだった。
「口に合わなかった？」
「……別にそういうわけではない」
　器用に箸はしを使い、礼儀よく茶ちや碗わんを持ち上げ、ディーナは行ぎよう儀ぎよく料理を口に運んだ。
「……ちゃんと美味い。それくらいは分かる。英国人が舌馬鹿ばかりと思われるのは癪しやくだ」
「そういう事を言ってるんじゃないんだけど……」
　星一郎は苦笑を隠すように味み噌そ汁しるを啜すすった。
　どうにも彼女は自分が気に入らないらしい。癪に障さわるのは、気に入らない相手の作った食事が舌に合うことなのだろう。
「……他にも心当たりやお前の生せい活かつ圏けんを探しはするが、これからは午前は書版探し、午後は戦闘訓練に充てる事にしよう。教えなければならないことは多いからな」
　気に食わない人間の作った食事であろうと、しっかり噛かみ締めながらディーナは言った。

　訓練場所は昨日の戦せん闘とう跡あとも生々しい廃はい工こう場じようとなった。もともと洛らく外がいで人気も少なく、だからこそ星一郎も魔術の実じつ践せんに利用していたのだ。打って付けの場所であった。
　随騎ドライグで廃工場に辿たどり着つくと、ディーナはさっそく戦闘訓練を始めた。穴の空いた廃工場の屋内で向かい合う。
「まずは『摩天の夜宴』の戦闘条件の確認だ。『七聖条約』に目を通したな？」
　頷き、星一郎は〈第二書版〉を取り出した。金属光沢の装そう丁ていを開くと、一ページ目に文字が浮かび上がる。曰いわく――

〝カルディア委員会は『摩天の夜宴』に臨のぞむ〈聖楔者〉に以下の条約の批ひ准じゆんを要よう請せいする。

1、〈聖楔者〉は神性と神格の器たる〈第二書版〉を賭かけて戦う。

2、その名の通り『魔天の夜宴』は基本的に夜間に行うものとする。

3、一般人に危害を及およぼさぬよう、戦せん闘とう場所は再現史し跡せきとするのが望ましい。

4、1～3に反しない限り、戦闘形式は一いつ切さい問わない。

5、『摩天の夜宴』の開始とともに《天命の書版》と〈聖楔者〉の存在は公開され、戦いはモニタリングされ全世界に発信される（注、認にん識しき阻そ害がいによって〈聖楔者〉の個人情報は保護される）。

6、『魔天の夜宴』終しゆう了りよう時まで〈聖楔者〉は新京都市内に留とどまること。

7、『摩天の夜宴』に勝かち抜ぬき最後の一人となった〈聖楔者〉、すなわち《天命の第二書版》を完成させた者に〈ＢＡＢＥＬバベル〉の最初の使用権を与あたえるものとする。

以上の7つを『七聖条約』として設定する。この『七聖条約』が遵じゆん守しゆされる限り、カルディア委員会は全力で〈聖楔者〉のバックアップに努めることを約束する。

カルディア委員会代表　物ものの部べ昴こう造ぞう〟

「七聖条約の最初に明記されているように、『摩天の夜宴』における勝利条件は相手の神性と神格を奪うばうこと――すなわち〈第二書版〉を砕くだくことだ」

ディーナは自分の〈第二書版〉を取り出して言った。

「〈第二書版〉が砕かれると、そこに宿っていた神性と神格は自動的に一番近い〈第二書版〉に移る。故に〈聖楔者〉は自分の〈第二書版〉を守り抜かなければならないが、だからといって厳重に隠すことは出来ない。この〈第二書版〉は〈聖楔者〉にとって最強の武器でも

あるからだ」
　右みぎ腕うでを胸の高さに持ち上げると、ディーナはその背に神性の顕あらわれである畏光を発現させた。虹にじ色いろの後光が周囲の魔力を支配下に置く。そして右手の甲こうに八はち芒ぼう星せいの楔――『神』の刻印が輝き出す。
「――〝神の威い光こうよ！　神の門バベルの鍵よ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版》よ！　その力の一いつ端たんをいま此こ処こに示せ〟！」
　力ある言葉によって、ディーナの〈第二書版〉に変化が生じる。神こう々ごうしい光がその表面を縦横に走り、その輪りん郭かくが崩れて再構成されてゆく。
「――『権能武装』。神々の武ぶ威いを象しよう徴ちようする〈第二書版〉の攻こう撃げき形態だ」
　本を持っていた筈のディーナの手には、いままた再び神々しい大槍が握にぎられていた。
「神々の使し役えき獣じゆうの再現たる『随騎』と、武威の象徴たる『権能武装』。これが〈聖楔者〉の武器となる。特に権能武装は神性と神格を宿した〈第二書版〉そのものが変形したものだから、その能力は凡ぼん百ぴやくの魔ま導どう攻こう性せいデバイスをはるかに凌りよう駕がする。〈第二書版〉は守るべき命いのち綱づなであると同時に、敵を貫つらぬく最強の矛ほこでもある」
　大槍――自らの権能武装を一ひと振ふりしてディーナは説明する。
「なおかつ、権能武装の展開時には〈聖楔者〉の身体能力は更さらに向上する。〈第二書版〉に宿った神性と神格が器に触しよく発はつされて攻撃体勢にシフトする、ということだな。そして、権能武装は〈聖楔者〉が《天命の書版》から引き出した顕現神格に応じて様々な機能と能力を備えている。〈聖楔者〉同士の戦いは、この権能武装の能力を見極める事が重要となる。――などと説明したところで、実践では何の役にも立たないだろうが」
　ディーナはさらに大槍を振ふり回すと、その幅広の刀身の鋒きつさ

きを星一郎に向けた。
「結局は慣れるしか無い。本来ならお前も権能武装を発現してからが望ましかったが、時間が無い。手荒ではあるが、これからの十日間はすべて実戦訓練に充てる」
「剣けん呑のんだなぁ」
　いかにも切れ味の良さそうな鋒から身体を移動させるが、大槍はぴったりと星一郎に向けられて逃そうとしない。
「こう見えても、昨日までごくごく普ふ通つうの学生のつもりだったんだけど」
「――それはジョークのつもりか？」
　星一郎のセリフを聞いた瞬間、ディーナはじとりと半眼で睨み付けてきた。
「プロの魔導工学士顔負けの術式構築能力に、明らかに荒事を見据えて鍛えた動き――あれがごく普通の学生なのだとしたら、日本の学生がヒーローをやっているのはオタク・アニメだけの話ではなさそうだな」
　皮肉って、ディーナは表情を引ひき締める。
「もしお前の言葉が真実だとしても、お前はもう普通の学生などではない、宿儺星一郎。お前は〈聖楔者〉――《天命の書版》に選定された神話の担にない手てだ。さぁ、分かったなら構えて準備をしろ」
「……了りよう解かい」
　彼女は彼女なりに真剣に考えてこの訓練に臨んでいる。実戦訓練は確かに荒っぽいが、時間が無いのも事実だ。
　星一郎は深呼吸し、自分の中に宿った〝力〟を奮い起こした。畏光が背に浮かび上がり、右の掌てのひらに刻印が浮かび上がる。
「――来い」
　行った。身体を駆け巡る力が常人という言葉を置き去りにして星一郎を駆けさせる。
　一呼吸どころか瞬まばたきの間で接敵した星一郎に、ディーナは容よう赦しやなく大槍を突つき出した。

「――っ！」

　竦すくみかけた本能を力の高揚で塗り潰して横っ飛びに跳躍。大槍を躱かわすや一気にその間合いの内側に踏み込み、夥おびただしい魔力を纏まとった右拳を振るう。

　――ギッギギギギッッ！

　空間が軋きしむような異音が響ひびいた。星一郎の攻撃の意思を乗せた魔力が、ディーナを覆おおう虹色の膜まく――畏光の不ふ可か侵しん領域とぶつかり合って互いを削り合う。

　――ギッ――ィィイイッッン！

　鋼が折れるような音がしてディーナの畏光の加護が砕けた。

　青い瞳ひとみが驚きに見開かれる。

　追つい撃げき。彼女の腕うでを取って無力化しようと左手を伸のばし――

　空を切る。

　驚きに目を見張ろうと、ディーナは星一郎の動きを精密に追っていた。流れるような回かい避ひ行動を金の残像が追尾する。

　躱された瞬間、星一郎はすぐさま距離をとって体勢を立て直そうとし――

「――〝雹ひようよ、貫き、勝利せよ〟！」

　ディーナの携える槍の刀身に秘文字ルーンの連なりが浮かび上がる。刀身が描く白銀の残像とともにルーン文字が宙に描かれ、周囲の魔力が無数の光弾となり迸ほとばしった。

「ぐっ!?」

　星一郎の周囲に光弾が撃うち込まれる。とっさに腕を掲げて防ぼう御ぎよの姿勢を取る。着ちやく弾だんした攻撃はすべて畏光の加護が無効化した――が、

「ふっ！」

　周囲に着弾した光弾の巻き上げた粉ふん塵じん――目め眩くらましの煙幕を大槍が貫く。

　再び異音が廃工場に響き渡る。

大槍の鋒を彩る虹色の輝きが星一郎の畏光の加護とぶつかり合って拮きつ抗こうし、かろうじて撥ね返す。
「はあああああっ！」
だが、翻る大槍の風圧で粉塵を振り払い、ディーナの追撃が立て続けに撃ち込まれた。持ち上げるのも一苦労な大槍が目にも留まらぬ速さで引きと突きを繰くり返す。
身体能力の強化の恩おん恵けいもあるのだろう。だが何よりも鍛えぬかれた技倆の為なせる業であるのは、彼女の攻撃が常に同じ位置に叩たたき込まれることからも明らかだった。
――ギィィンンッ！
星一郎を護まもる虹色の畏光に穴が開く。
大槍がひらりと半回転し、物理的魔術的に無防備となった星一郎の脇わき腹ばらへと石いし突づきが深々とめり込む。
強きよう烈れつな衝しよう撃げきを食らい、星一郎は大きく弧を描いて吹ふき飛とばされた。ごろごろと転がり、しばらく咳せき込こむことさえ出来ずに身体を痺れさせる。
「――その拳には、相手の畏光を効果的に打ち砕く力があるようだな」
引き戻し、石突きで地面を打ち鳴らしてディーナが分析する。
「魔力の絶対支配権たる神性の証あかしである畏光を放つ〈聖楔者〉の肉体は不可侵の加護を帯びる。同じ〈聖楔者〉が放つ魔術でも、この畏光の加護を打ち破るのは容易ではない。故に〈聖楔者〉同士での戦いの第一段階は互いの畏光の削り合いとなる。だが、お前の拳は相対する〈聖楔者〉にとって脅威そのものだ。余程の出力差がない限りは近接戦闘で畏光を削り合うしかないが、お前の拳は他の者より容易たやすく畏光の加護を奪うのだから」
ディーナはそら恐ろしげに首を振った。
「本当に、お前を選んだ神格は何なのだろうな。まるで〈聖楔者〉と戦う為にあるような能力だが――当然ながらそれだけでどうにかなるほど甘あまいものではない」

なんとか呼吸を再開して立ち上がった星一郎に、ディーナは厳しい教師そのものの顔で叱り付けた。
「もともとわたしの畏光の強度は他の〈聖楔者〉と比べてそう強いものではない。常に畏光の加護を破られるのを想定した戦い方を模索している。それに――追撃で手加減したな？　押おさえ付けて無力化しようなどと考えず、容赦なく打だ撃げきを食らわせて圧あつ倒とうすべきだった。中ちゆう途と半はん端ぱな攻撃は自分を危険に晒すだけだ」
厳しい口調で言い捨て、ディーナは再び槍を向けてくる。
「言ったはずだ、これは〝実戦〟訓練だと。まずは、その中途半端な覚かく悟ごを捨てさせる」
「……厳しい先生だなぁ」
地面を転がる際に唇くちびるを切って流れた血を拭ぬぐい、星一郎は再びディーナへ向かっていった。

「今日はここまでにしようか」
権能武装を〈第二書版〉本来の本型ストレージタイプへと戻してディーナは言った。
廃工場の屋内に差し込む陽光はすっかり赤く染まっている。血に染まったような光に照らされ、星一郎はまるで死人みたいに力なく倒たおれ伏していた。
「……っ……」
うんともすんとも返事できない。呼吸が乱れすぎて、声帯が機能不全を起こしていた。
呼吸を整えるのに必死な星一郎を横目に、ディーナは懐から細長いビニール包づつみの封ふうを切って、あの黒っぽいお菓か子しを頬張っている。
咀そ嚼しやくしながら星一郎を眺ながめていたディーナは、飲み込んだ後で軽く首を傾かしげた。
「……随ずい分ぶんと頑がん丈じようなのだな」

「っ……じぶん、でっ……も……おどろいて、るよ……」
　手加減して石突きを見舞われたとはいえ、冗談みたいにふっ飛ばされ続けて骨折も無いのだから、なるほど〈聖楔者〉というのは頑丈に出来ている。
　だが、ディーナは星一郎とは違う意味で驚いているようで、細い顎あごに指を添え、思案げに眉まゆ根ねを寄せていた。
「……〈聖楔者〉の身体能力の向上には眼を見張るものがある。神の力を背せ負おうのだから、英えい雄ゆうと呼ぶに相応ふさわしい肉体が必要なのだろうな。だが、それにしてもお前の治癒力は凄すさまじい。手足の二、三本はへし折るつもりだったのに、すでに青あお痣あざも残ってないとは」
「……いまの言葉で、むしろ顔が青くなりそうだよ」
「情けないことを言うな。骨折程度なら一晩で治してやれる。問題はない。だが、身体能力も治癒能力もそこまで高いのなら、明日あしたはもう少し本気でゆくか」
「……」
　やっぱり彼かの女じよをなにか怒らせるような事をしたに違いないと、星一郎は必死に記き憶おくを手探りした。
「では、帰るか。明日はもっと広い範囲で書版の欠片を探さねばならないしな」
「あー……それなんだけど、どこかでご飯を食べてからにしない？」
　星一郎は控えめに手を上げて提案した。
「正直、これから帰って夕御飯の用意をする体力も気力もないんだけど……」
「ふむ……ならしょうがない。適当な店を探すとしよう」
　ほっとしたような残念そうな曖あい昧まいな顔でディーナは出口へと歩いていった。
　一方星一郎は心底ほっとした顔で、足を引きずるようにして彼女を追った。すでに敷しき地ちの外で随騎を召喚しているディーナへ駆け寄ろうとして、

「……？」
　ふと視線を感じ、背後を振り返る。
　赤く染まった夕暮れの空を背景に、廃工場が黒々と蹲うずくまっている。
　その屋根に、双そう眸ぼうを光らせる鳥が止まっていた。すんぐりとしたシルエットの、梟ふくろうだ。そう珍めずらしいものでもないが、妙みようにじっとこちらに目を向けている。
「どうした！　置いてゆくぞ」
　ディーナに呼ばれ、すぐに行くと返事をする。もう一度振り返ると、すでに何ど処こかへ飛び立ったのか、梟の影かげはどこにも見当たらなかった。

　夕食は手近なファミレスで摂ることになった。
　適当に選んだ注文がテーブルの上に揃そろうと、ディーナは呆あきれたように眼めを細めた。
「お前……本当にこれを全部食べる気か？」
「今日はこっぴどくシゴカれたからね」
　テーブルには、ハンバーグセットがふたつ、パスタが三種、山盛りフライドポテト超大盛りと、どう考えても五人前以上はありそうな量である。その五人前以上はありそうな量の食料が、次々と星一郎の口の中へと消えていく。
　和定食を食す手を止めて半ば呆ぼう然ぜんと対面の食事風景を眺めていたディーナは、ややあって首を横に振った。
「……見た目によらずよく食べるのだな」
「よく言われるよ。だから、あまり外食は好きじゃないんだよね。食費がかさむから」
「男にしては料理が上手いのはそれが理由か」
　ディーナは納得したように頷いた。
「それもあるけど」
　星一郎は苦笑した。

「どうにも圭子さんも姉さんも、勉強や仕事は出来るけど家事がからきしで……一番暇な僕が家事の役回りになったんだ」
「なるほど」
「昔から慣れてたのもあるけどね。両親がなくなった後しばらくお世話になった家のお母さんが、僕にいろいろと家事を仕込んでくれたんだ。『刀と羽う華かも亜あ矢や香かもパンツ一枚まともに畳めないダメ女だから、星くんが世話してやってね？』って、冗じよう談だんめかしながら」
「それは冗談というより……」
　ディーナがぼそりと呟つぶやく。昔を懐かしんでいた星一郎が目を向けると、彼女は慌あわてて咳せき払ばらいした。
「こほん……何でもない」
「そう？　ともかく、なぜだか昔から僕の周りの女性たちは家事が不得意で、必然的に料理やら何やらが得意になってしまったんだ」
「なるほど……って、わたしは違ちがうぞ！」
「まだ何も言ってないけど？」
　これまでの経験からなんとはなしにディーナから『へっぽこ臭しゆう』を嗅ぎ取っていた星一郎であったが、そんな内心はおくびにも出さずに首を振った。
　しかし、動物的な勘か、はたまた星一郎への個人的な不信からか、ディーナは納得せずに口を尖とがらせる。
「ば、馬ば鹿かにするな！　確かに家事が得意とは言いがたいが、料理はなかなかのものだ。兄様も『ディーナの料理を食べてるとままごとしてた記憶が蘇よみがえるよ』と褒めてくれた！」
「それは褒めたというより……へぇ？　お兄さんが居るんだ？」
　瞬しゆん間かん、ディーナはハッと顔色を変えた。しまった――そんな声が今にも聞こえそうな表情だった。
「……席を移る」
　下手なことを言えず黙だまっていると、ディーナが立ち上がりながら硬かたい声で言った。

「茶を飲んでいる……ゆっくり食べていろ」
　ディーナはそれだけ言うとグラスだけ持って店の奥おくへ歩いていった。しっかりと、星一郎の視界が入らない場所へ。
　追いかけるワケにもゆかず、星一郎は目の前の食事を片付けるのに戻った。とはいえほとんど作業と化し、味覚はまったく脳へ入ってこない。
　――あの顔……
　ディーナの、しまったと後悔した後の、無理をして作ったような無表情。星一郎は、あれとよく似た表情を知っていた。
『気にするな、星一郎』
　あれはいつの事だったろうか。自分が中学生になったばかりの頃ころだったが。姉と、ささいな理由で喧けん嘩かをしてしまったのだ。
　姉の摩子を、星一郎は幼い頃から尊敬していた。だがそれと同じくらいに、優秀で優しい――どんな時も自分を気遣うその優やさしさに、劣等感を抱いてもいた。
　だからちょっとした喧嘩が、売り言葉に買い言葉でどんどんエスカレートしていったのは、ある意味当然のことだったのかも知れない。とうとう星一郎は姉に向かって、『姉さんだって僕を邪じゃや魔ま者だと思ってるくせに！』と言ってしまった。
　直後、摩子は星一郎の頬を叩いていた。
　叩いた後、彼女はしまったと後悔に顔を歪ゆがめた。
　そんな姉の顔を見て、星一郎は泣いてしまった。頬の痛みより、言ってはいけないことを言った自分に、星一郎は惨めさと悲しさでいっぱいになってしまった。
『――大だい丈じよう夫ぶ。大丈夫だよ、星一郎』
　自分も感情を持て余しているだろうに、摩子はぐっと表情を引き締めて弟に語り掛けた。
『わたしは何にも気にしていないから……叩いてしまってごめんな、星一郎……』
　そう言って、姉は泣きじゃくる自分の頭を撫なぜ続けた。

シチュエーションが違うし、そもそも摩子とディーナはまったく似ていない。

なのに、なんでディーナの表情が、こうも姉と重なるのだろう？

考えつつも、星一郎は目の前の料理を平らげた。とはいえ食べてすぐ彼女のもとへ行く気にもならず、コーヒーをちびちびと飲んで時間を引き延ばした。

「……いつまでもこうしてはいられないか……」

星一郎は重い腰こしを上げた。ディーナが歩いていった店の奥へ進み……たいして捜す手間もなく、あっさりと見つかった。

「なぁ、いいだろ？」

「一人じゃいろいろ不便やろ？　オレたちが案内してやるさかい」

ガラの悪い青年たちが四人、テーブルを囲んでしきりに粉をかけている。当然と言うか勿論と言うか、彼かれらに言い寄られているのはディーナだった。

「……」

ディーナは無言でコーヒーカップに口を付けている。そうやって何気なく振舞っているだけでもなんとはなしに気品を感じるのは、彼女の並外れた容姿によるものだろうか。

彼女ほどの美少女だとナンパする方も気き後おくれしそうなものだが、いま言い寄っている青年たちはよほど面の皮が厚いらしい。

とはいえ反応がないのに苛いら立だってきたのか、青年たちは段々と言動を荒くする。

「おい、お高くとまってんじゃねぇよ」

一人がどすんと席に座すわり、ディーナの顔を覗のぞき込こむ。

「オレたちが案内してやるっつってんだろ？　ちょっと付き合えよ」

「……Go home」

ぼそりとディーナが告げたが、青年たちはぽかんと顔を見合わせた。彼女の発音が流りゆう暢ちようすぎて聞き取れなかったらしい。

ディーナはふぅと溜ため息いきを吐つくと、今度は日本語で喋り始めた。

「……小学生レベルの英語力もないお前たちに、幼稚園児でも分かる日本語でわかりやすく言ってやろう。いま、わたしは機嫌が悪い。さっさと家へ帰ってその不快な阿あ呆ほう面づらを二度と見せないで欲ほしい」

　青年たちはまたもやぽかんとしたが、今度は徐じよ々じよに顔を赤くしていった。

「こ、このビッチが……！」

「阿呆面に加えて脳まで阿呆なのだな。女と見れば誰だれかれ構わず『ビッチ』だのとほざく語彙力しかないのに英語で語り掛けたのは、どうやらわたしの失策だったらしい」

「このっ！」

　席から引き立たせようと、青年の一人がディーナへ手を伸ばす。

　ディーナの眼がすっと細められた。指一本でも触ふれた瞬間に反撃に出るつもりなのを見て取り、星一郎は慌てて声を上げた。

「遅おくれてごめん！」

　言って、ディーナと青年たちの間に割り込む。ディーナが何か言い出す前に、星一郎は彼女の手を取って立たせた。

「本当にごめん。さぁ、行こう」

　さっさと離脱しようと思った星一郎だったが、その前と後ろを青年たちが取り囲んだ。不ふ機き嫌げんな顔でじろじろと星一郎を睨にらみ付つける。

「んだ、オメー？　その金きん髪ぱつビッチの男か？」

「そうだと言ったら？」

　ディーナが顔を赤くして何か言い出す前に頷いた。

　青年たちは嗜し虐ぎやく的てきな顔で笑いはじめる。

「そうかそうか。なぁ、ニィチャン、オレたちオメーの女に名誉毀損されてさ。ちょっと話があるわけよ？　分かる？」

「――分からないな」

「んあ？」

「『名誉毀損』なんて難しい言葉をどうして知っているのか、理解に

苦しむ」
　真顔でぽんと出てきた痛烈な皮肉に、青年たちはもちろん、後ろのディーナも、こわごわと彼らを窺うかがっていた客たちもみんな唖あ然ぜんと口を開いた。
　やがて、青年たちの顔に血管がぴくぴくと浮うき上がった。
「……出ようか、ニィチャン。ゆっくり話をしようや？」
　星一郎は頷くと、テーブルに迷惑料込みの料金を置いた。
　青年たちに囲まれながら連れて行かれた路地裏で、さっそく彼らは顔を歪めて怒ど鳴なりはじめた。
「テメェ！　舐なめてんじゃねぇぞ！」
「覚悟しろや。ボコしてひん剥むいたる」
「ついでにその女もヒィヒィ言わしてやらぁ」
　そう言うやいなや、さっそく拳こぶしが飛んできた。眠くなるようなその拳を、星一郎は胸中でやれやれと嘆たん息そくし――避よけることなく頬に受けた。
　よろめく星一郎に、青年たちがげらげらと笑い声を上げる。
「弱っ！」
「ははっ！　女にイイとこ見せたいだけの口先くんかよ！」
　気を良くした彼らは、星一郎を取り囲んで好き勝手にいたぶり始める。彼らの笑い声がどんどん大きくなってゆく。
「はははははははっ！」
「ははははは……？」
「は、は……」
　しかし次し第だいに笑い声が収まり、やがて彼らは無言になった。
　顔は傷だらけ、服も靴くつ跡あとだらけ泥どろだらけとなった星一郎だが、いまだ倒れる気配がない。直立の姿勢に戻って次の攻撃を待つ。青年たちの中に、マネキンを殴るような徒労感と、未知の化け物を前にしたような気味悪さが湧わき上がるのも無理からぬ事だった。
「な、なんだよ、こいつ……」
「……どうした？　もう殴らないのか？」

　星一郎が口を開くと、威勢を失った青年たちがびくっと身体からだを震ふるわせた。
「こ、こいつ……！」
「お、おい、待て……まさか、こいつ……『スクナ』なんじゃないのか？」
「は？　いや、そんな……いや、まさか……」
　青年たちは改めて星一郎を眺め直し、だんだんとその顔を青あお褪ざめさせていった。
「一見優等生っぽいが、よく見ると目が鋭するどくて……お、お前まさか、胸にでかい傷きず痕あとがあるんじゃないだろうな……？」
「――あるけど？　いまここで確かめる？」
　どうやら自分のことを知っているらしい彼らに、星一郎は頭痛を堪こらえて睨み付けた。
　途と端たん、青年たちが「ひいっ！」と悲鳴を漏もらす。
「ほ、本物？　本物の『血ち塗まみれの星』……！」
「こ、こいつが『鴨かも川がわの悪鬼』か……！」
「な、なんで『地獄からやって来たシスコン』がパツキン女と……！」
　ぶるぶる震え出す彼らに、星一郎はせいぜい不敵に見えるよう笑い返した。
「……で？　まだやるならそろそろ……」
『す、すみませんでした――――――ッ！』
　一糸乱れぬ返事をして去ってゆく三人組。躊ちゆう躇ちよのないその逃にげっぷりは、夜道で鬼に行き遭ったかのようだった。
「……」
　バツの悪い顔で振り返ると、案の定ディーナは胡う散さん臭くさそうな視線を星一郎へ向けていた。
「……『地獄からやって来たシスコン』？」
「……何はともあれ、移動しようか」
　星一郎はディーナを促して路地裏を出た。

　すこし歩いて近場の公園を見つけると、自販機でお茶を買ってベンチに座る。
「はい、どうぞ」
「ああ」
　ディーナはお茶を受け取ると、懐ふところから細長いビニール包みを取り出した。
「……よく食べてるけど、それって一体どんなお菓子なの？」
「ん？　どんなも何も、何処にでもあるものだが？」
　ビニールチューブから捻ひねり出だした黒っぽいお菓子を咀嚼していたディーナは、もう一本ビニール包みを取り出して星一郎の目の前に突きつけた。公園の街灯の中で明らかになったそのビニール包みは、
「……羊よう羹かん？」
　食べやすいようビニールチューブに小分けされたスティック羊羹だった。てっきり外国の珍しいお菓子かと思っていたら、何とも庶民的なものが出てきたものである。
「……羊羹が好きなの？」
「うむ。羊羹も好きだが、なにより餡あんこだ。餡こは素晴らしい」
　新たなスティック羊羹の封を切りながら、ディーナは真面目くさった顔で何度も頷いた。
「豆ビーンズを砂糖シユガーで煮るなどと、普通なら考えられない。まったく日本人の食へのこだわりは感心するばかりだ！」
　ずいぶんと大げさだが……日本人が炊いた米に砂糖をかけると聞いて眉まゆを顰しかめるのと同じような感覚なのだろうか？
　ディーナは袋から押し出された羊羹を頬張って、そこはかとなく目元を緩ませた。
「そんな餡こを固形整形した羊羹、わけてもこのスティック羊羹は素晴らしい！　餡こという偉い大だいな発明を、いつでもどこでも味わうことが出来る。おまけに甘さの割にそこらのスナック菓子よりよほどヘルシーだ。栗羊羹や芋羊羹、塩羊羹とバリエーションもあるが、

わたしはやはり小豆の食感も楽しめる小倉羊羹が――」
　立て板に水とばかりに滔とうとうと餡こと羊羹の素晴らしさを語るディーナだが、興奮しすぎを自覚したのかハッと口を噤つぐんだ。
　恥はずかしげに星一郎を見やり、ディーナは不ふ貞て腐くされたように唇を尖らせる。
「……別に良いだろう。それとも何か？　外国人がスティック羊羹を食べていたら可お笑かしいのか？」
「いや、別に何も言ってないよ」
　と、星一郎は空とぼけて言った。
　生真面目な金きん髪ぱつ碧へき眼がんの美少女が美お味いしそうに頬張っていたのがよりによってスティック羊羹。なんだか妙に身近な存在に感じられて微笑ほほえましくもあり、見た目によらず子供っぽい部分もあったりで、星一郎はさっきから顔が緩ゆるむのを我慢しっぱなしだった。
「……ふん。まあ、いい」
　じとりと睨んでいたディーナだが、星一郎の澄すまし顔が崩くずれないので諦あきらめたらしい。代わりに、ここまで我慢していたであろう質問をぶつけてきた。
「――それで？　さっきの者たちは随分と大おお仰ぎようなことを言っていたが？」
「……ちょっとやんちゃな時期があったんだよ……」
　星一郎は観念して話し始めた。
　三年くらい前だろうか。京都に越こしてきたばかりの頃、摩子に声を掛けてくる者たちがいた。さっきの青年たちみたいな連中だ。すげなくした摩子に苛立った柄がらの悪い連中が乱暴に彼女の腕を掴つかんだ瞬間、星一郎はすぐに飛び出しナンパしてきた連中を叩き潰した。
　そういう事が何度が続いて、いつの間にか今度は星一郎が目を付けられるようになった。このままだと姉にいらぬ火の粉が降りかかるのではと懸念した星一郎は、一転して近隣の柄の悪い連中の〝掃そう除

じ〟を開始した。
　闇夜に乗じて連中の巣を急襲し、二度とちょっかいを出せぬよう徹底的に叩いて回った。再起不能にしたのが百人に達した所で、近隣の不良連中から『触ると危険アンタツチヤブル』と知れ渡って、ようやく平和な日々を手に入れたのだった。
「そのおかげもあって姉さんにちょっかいを出すような連中はいなくなったけど、僕ぼくの顔は意外に広く知れ渡った……変な二つ名を付けられたのには辟へき易えきしたけど」
「……」
　話を聞いたディーナは、いつの間にか唖然呆然と口を開きっぱなしにしていた。咥くわえていたスティック羊羹が落ちかけて、慌てて気を取り直す。
「……三年前って……その時はお前も普通の中学生だったのだよな……？」
　ややあって、ディーナは半信半疑で問とい掛ける。
「いったい何をどうすれば、中学生が不良連中を百人も叩きのめせるんだ……？」
「昔から鍛きたえられてたんだよ、こう見えても」
　星一郎は懐かしい思い出を引っ張りだしてしみじみと語った。
「小さい頃お世話になった家のお母さんには家事を教わったけど、お父さんには身体を鍛えられた。神社の宮司さんなのにやたらに強い人でね。『一家を守る男は強くなければ務まらない』って言って、いろいろ戦い方も教わった。僕の家族は女性ばかりだから、気を使ってくれたんだろうね」
「いや、それは『一家』の括くくりが食い違ってると思うが……くっ、くく――」
　呆れた顔をしていたディーナだが、やがて徐々に身体を震わせ始めた。
「く、く……あはははははっ！　なるほど！　確かに『地獄からやって来たシスコン』だ！　恐おそれ知らずというか、向こう見ずという

か……」
　しばらくの間、ディーナはくつくつと腹を抱かかえていた。
　星一郎がやっぱり笑われたと顔を曇くもらせていると、散々笑ったディーナが顔を上げた。
「……ちょっと似てるかもな……」
「似てる？　誰に？」
　問うと、ディーナは口を押さえた。
　また怒り出すかと身構えた星一郎だったが、口元から手を離はなしたディーナは、あるかなしかの朧おぼ気ろげな微笑を浮かべていた。
「……わたしの兄に、ちょっとだけ、な」
　懐かしむような声で、ディーナは言った。
「……わたしの兄様も、過保護な嫌きらいがあってな。わたしが十で兄様が十三の時分だったかな。庭で遊んでいたら、切り株に足を取られて転んでしまった。次の日、その切り株がなくなっていた。あとで聞いたら、兄様がその日の内に夜を徹して切り株を斧おので叩き割って掘り返したそうだ」
「それは……」
　聞くだけでも重労働だが、十三の少年ともなれば相当なものだ。よくやるものである。
「呆れた顔をするな。お前の方がよっぽどだろうが」
「そうかな？　僕はそんなにシスコンじゃないと思うけど？」
「……どの口が言うのだ？」
「家族を守るのは当然だろう？」
　星一郎が何気なく言うと、ディーナはぱちくりと目を瞬かせた。
「なに？」
　まじまじと凝視するディーナに、今度は星一郎が面食らった。別段、気の利いたことは言っていないのだが。
「……ちょっとだけ似てるが……やっぱり、全然似ていない……」
　ぽつりと呟くと、ディーナは勢い良く立ち上がった。数歩進み、くるりと振り返る。街灯の弱々しい明かりが、翻る鮮あざやかな金髪を

さめざめと照らした。
「――ひとつ訊きく。さっき、なんでお前は殴なぐり返さなかった？　相手の拳が何らダメージにならないにしても、なんで反撃しなかった？　いや、反撃の必要もない。畏光を発して、心を折ればいい。それだけであの場は済んでいたはずだ。何な故ぜ、甘んじて殴られた？」
　ディーナは静かに問うと、じっと星一郎の返事を待った。
「……許して欲しかったから、かな」
「何？」
「あの連中に絡まれたのは、君が席を立って一人で居たからだ。だから、君を不機嫌にした僕が責任を取らないと、って思って」
「……ふん」
　答えを聞いたディーナは、不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「まるで騎士ナイト気取りだな。わたしに向いた悪意を全部身に受けようというわけか？　お前はわたしの家族ではないし、彼氏ボーイフレンドでもなければ騎士でもない。ただほんの僅わずかな間行動を共にするだけの関係だ。そんなお前があんな風に振る舞っても、それはただの自己満足。わたしにしてみればいい迷惑だ！　……だが」
　ディーナは言葉を切ると、これまでで一等厳しい目付きで、文句は言わせないとばかりに胸を反らせた。
「だが、勝手に不機嫌になって席を立ったわたしの無礼は謝罪する。すまなかった」
　謝あやまっている筈はずなのに、態度も声も偉そうである。なのに、言葉や態度とは関係なく、彼女がちゃんと心から謝罪しているのは不思議と納なつ得とくできた。
　――ああ、そうか。
　星一郎は腑ふに落ちた。ディーナと摩子は、容姿も性格もまったく似ていない。けれど一点だけ、とてもよく似ている部分がある。
　二人とも、とても気高い。
　ちょっとやそっとでけして弱音を吐かず、常に強く在ろうとする。

そんな気高さとも意地っ張りとも取れる部分が、驚おどろくほど似通っていた。
　――もっとも、姉さんはこんなに分かりやすくなかったけど。
　星一郎はくすりと微笑んだ。
　ディーナがむっと口を歪める。
「……わたしは何も可笑しいことは言っていないぞ？」
「いや――ディーナは可愛かわいいなって」
「……は？」
　ディーナは訝いぶかしげに眼をパチクリさせ、次にかぁっと顔を赤らめた。
「な、何をいきなり!?　か、からかっているのか？」
「ううん。本心だよ。ディーナは可愛い」
　繰り返すと、ますますディーナは顔を真っ赤にした。
「そ、な、あぅ……」
　タイプは違えど、意地っ張りな女性との付き合いは慣れ親しんだものだ。偽らず、本音を述べること――これに尽つきる。
　やがて、ディーナは羞恥と怒りで赤くなった頬もそのままに星一郎を睨んだ。
「……お前は、ほんとうに不ふ愉ゆ快かいな男だ！」
　意地を張るのが馬ば鹿か馬ば鹿かしくなったのだろう。ディーナは子供がするみたいに苛立ち紛まぎれに地面を蹴って、無遠慮に人差し指を星一郎の鼻先に突つきつけた。
「だいたいだ！　明日もまた訓練しなきゃいけないのに、無む駄だな体力を使って！　……そうか、体力が有り余っているんだな？　なら明日はお前が馬鹿な真ま似ねをする元気が残らないくらいに痛め付けてやる！」
　言いたいことを一方的に言って、ディーナは乱暴に星一郎の服を掴んで引ひき摺ずった。
「さっさと帰るぞ！　明日からさらに覚悟しろよ、星一郎！」
　偽らずに本心を述べ、しかし余計な事は口にチャック。経験則に従

い、いつの間にか名前で読んでいる事実には突っ込まず、星一郎は苦く笑しようして頷くのだった。

2

　ぱっと目を覚ました星一郎は、いつものように目覚まし時計が鳴る前にタイマーを切った。時刻は、セットした時間の三十秒前だ。
　すでに夏休みで、世話の掛かる叔お母ばは研究所に泊とまり込み。おまけに連日シゴカれているのに、習慣とは恐ろしいものだと星一郎は我ながらに呆れてしまう。
　それでも起きた以上は時間を有効に使おうとベッドから起き上がる。ドアを開けて廊ろう下かに出ると、斜め向かいの客室のドアも同時に開いた。
「おはよう、ディーナ……っ？」
「……ぅ……ぁ……ぉ、はよぅ……」
　不明めい瞭りようで、まったく意志というものが感じられない声が返ってくる。
　寝起きのディーナは、寝ね巻まき代わりらしきシャツ姿だった。しかも第二どころか第四ボタンまで外れていて、ずるりと右肩からずり下がっている。そのまま落ちていかないのは、ひとえに彼女の豊満な双丘にかろうじて引っ掛かっているからだ。

ある意味『シャネルの５番』よりよっぽど挑発的な格好である。
とはいえ自覚的にやっているワケでないのは、彼女の両目が重たげで、足取りもふらふらしていることからも明らかであった。
不意打ちでたじろぎかけた星一郎だが、これまでの人生で得た教訓を思い出す。
深呼吸し、心中を落ち着かせる。こういう場合、何よりも先まずごく当然のように振ふる舞うのが大事なのだ。某日本人大リーガーも言っている。「大事なのは平常心だ」と。
「……だらし無いよ、ディーナ」
そう言って、星一郎はディーナの脱げかかったシャツのボタンを留め直した。指の先にやわらかな感触が掠かすめるが、努めて冷静に作業を続ける。そうして彼女の体裁を整えると、その背を押して洗面所へ誘ゆう導どうしてゆく。
「先にどうぞ」
「……ぁ……ん……」
こくり、というよりかくんと頷き、寝ぼけ眼の少女はずるずると歩き始めた。
ドアを閉め、彼女の強烈な姿が視界から消えて、星一郎はほっと胸を撫で下ろしてリビングへ向かった。冷凍しておいたご飯を取り出して電子レンジに放ほうり込んだ時、
『きゃわぁぁぁぁあああああああ

空気を和やわらげようとなるべく軽妙に喋しやべってみるが、彼女の発する思っ苦しい気配は小こ動ゆるぎもしない。
　星一郎はひっそりと苦笑したが、ひっそりというにはいささか注意が甘かったようで、ディーナがじろりと睨んでくる。
「……笑いたければ堂々と笑えばいいだろう。陰かげで笑うなど、紳士のすることではない」
「あはははははははっ！」
「笑うなっ、大馬鹿者ォ！」
　叫んでからはっとした顔で周囲を見回し、ディーナは「ぐぬぬ」と呻うめいた。
「……わかった！　わたしが悪かった！　それで良いのだろっ!?」
　ディーナはハンカチを差し出したらすぐに噛かみ千ち切ぎりそうな悔し顔になった。
「……本当に忌々しい……ふんっ、女のあしらい方は手慣れたものというワケだっ！」
「八日も寝起きを共にしてれば、会話の合わせ方ぐらいは慣れるものだと思うけど？」
　自分を軟派男に貶おとしめたいらしいディーナに、星一郎は今度こそはっきりと苦笑した。
　すでに、訓練開始から八日目であった。午前の《天命の書版》の探索、午後の戦せん闘とう訓練も、すでに七回繰くり返されたことになる。
　現在は八回目の探索の最中であるのだが、それは八日目になってもまだ星一郎を選定した《天命の書版》の欠片かけらが見つかっていない事を意味している。すでに主要な行動圏は調べ終わり、心当たりのありそうな場所を手当たり次第に調べている情況であった。
　今二人が歩いているのは、星一郎も度々利用する大型ショッピングモールの中であった。夏休みの世相を反映してか、まだ開店間もないのにすでに人混みが出来ていた。家族連れや若いカップルの姿が目立っている。

「こんな所に魔ま術じゆつ的てきな聖遺物があるとは思えないけど……？」
　星一郎は隣を歩くディーナに質問した。
「わたしもそう思うが……だが敷地内に小さな神社の類たぐいがあって、そこに埋うもれているという可能性もなくはない」
「漠然としてるね」
「しょうがない。主要な場所はすでに調べたが、それらしいものはなかったのだから」
　二人は手近な案内板へ向かった。案内板の隅すみには文字と記号が組み合わさった複雑な二次元コードが描えがかれており、ディーナがそのコードに触れると、魔ま力りよく光こうが発して案内板の前に二頭身のマスコットが顕れた。
〝ようこそお客様。わたくしはお客様案内用式神『ノイ』です。いかなるご要望でしょうか？　本日は二階カジュアル売り場の夏休み突入セールが見どころです〟
「この敷地内に神社のような施し設せつはあるか？　または建設に際して移転したような寺社があったか？」
〝そのような施設は存在しません。役所に保存されている地図を現在検証中……過去百年に遡っても、当敷地内に寺社仏閣に相当する施設が存在した情報は確かく認にんできません〟
「……そうか。ありがとう」
〝他にご用はありますでしょうか？　よろしければ当施設の見どころを――〟
「いや、もういい」
〝かしこまりました〟
　二頭身の式神マスコツトはペコリとお辞じ儀ぎをすると、「ポンッ」と煙の効果を残して姿を消した。
「空から振ぶりかな？」
「そうらしいな……お前は何も感じないのか？　〈聖楔者〉の『神』の刻印は、最上級の魔ま術じゆつ経路パスなのだぞ？」

「そう言われても……」
　星一郎は右手を握にぎったり開いたりして掌てのひらに打ち込まれた楔くさびの刻印を意識してみるが、これまで同様に何かを感じ取る事はできなかった。星一郎にも元々見鬼の才があった為ため、いくつかの古典魔術を習得している。その中には物品と魔術的経路を通すものもあったから、その繋つながりを元に距きよ離りと方向を測るのも経験があるのだが。
「……やっぱりダメだ。距離も方向も判然としない。もしかして、ものすごく遠くにあるんじゃ？」
「それはない。いかに《天命の書版》とはいえ、距離という壁かべに隔てられてあれほどの加護を与あたえられるワケがない。少なくとも新京都市内にはある筈だ……ある筈だが……」
　ディーナは溜め息を漏らした。
「ちょっと疲つかれた？　ちょうどいいし、どこかで休憩していこうか？」
「……呑のん気きだな。書版が見つからなくて困るのはお前なのだぞ？」
「そうは言っても、急いだからって見つかる物ではないでしょ？　それに午後からはまた戦闘訓練だし」
「……わたしが疲れるとしたら、そのせいなのだがな……」
　ディーナはもう一度溜め息を吐く。今度のものは幾いく分ぶん呆れ交じりで、さらに言えばどこか当あて擦こするような響きも交じっていた。
「技術はともかく、たった二日で体力的にはすっかり順応してしまって……いったいどういう身体をしているのだ？　打ち据えてるこちらの方が音を上げそうだ」
　ディーナはさらに溜め息を漏らした。ただし三度目のそれは怒り交じりで荒あら々あらしい。
　星一郎が考えるに、きっと朝の一件を思い出しているのだろう。
　初日のいざこざの後、ディーナは宣言通りに一いつ切さいの手加減

を止やめた。多分に憂さ晴らしもあったのか、嬉き々きとして星一郎を蹴けり回した。

元々が生真面目な質たちだから、星一郎がシゴキに順応すればするだけ本気になって——結果として疲ひ労ろうが蓄積する。そう考えると、朝の一件は星一郎の責任と言えなくもない。

もっとも口でなんと言おうと、ディーナはあまり本気で星一郎を詰なじってはいない。不満を覚えて怒っていても感情の大半は彼かの女じよ自身に向けられているようで、自分の不ふ甲が斐いなさにこそ腹を立てている感じだった。

己を厳しく律する——それがまた自分のよく知る女性とそっくりで、星一郎は胸の奥にちくりと痛みを感じた。

「……ああ、ちょうど喫茶店がある。外は暑いし、ちょっと涼んでいかないかい？」

「お前は……っ。まぁ、良い。たしかに日本の夏は暑くて敵かなわんからな」

ディーナは何か言い返そうとしたが渋々と頷うなずいた。

コーヒーショップに入ると、ひとまずアイスコーヒーをふたつ注文する。運ばれてきたアイスコーヒーを見て、ディーナはかるく首を傾かしげた。

「日本に来て驚いた事はいくつもあるが、このアイスコーヒーはまだ違和感がある」

「そう？」

「氷を入れたら薄まってしまうだろうと……だが、たしかに日本の暑さでは熱いものなど飲みたくないな」

ディーナはそう言うとストローに口をつけた。違和感があると言ったが味は別らしく、すこしほっとしたようであった。

「デザートは？　ケーキもあるけど？」

「……ここまできたら何を言っても野や暮ぼだな。なら、白玉あずきを頼たのむ」

「和風だね」

「日本の餡こは素晴らしいからな」
　と、ディーナは力強く言った。
　白玉あずきが運ばれてくると、ディーナはさっそくスプーンで掬すくって、宝石を扱あつかうような慎しん重ちようさで口へと運んだ。
「……うむ、やはり素晴らしい。半殺し具合もちょうど良い」
　粒餡の舌触りに満足気な表情に、星一郎はたまらずくすりと笑ってしまった。
　ディーナはそれを見てわずかに「むっ」と口角を下げかけたが、餡こに免めんじて捨て置くことにしたらしい。目の前の白玉あずきに集中する。
　そうして、なかなか懐かない猫の食事風景でも眺ながめている気分でいると、
「――――宿儺くん？」
　名を呼ばれて振り向くと、夏休み前にデバイスの調整をしたクラスメートの鈴すず木きさんとその友人たちが、みんなそろって目を丸くしていた。
「こんにちは。奇遇だね」
「そ、そうね……宿儺くんは……デート？」
　目を丸くしていた彼女たちは、星一郎の対面の金髪碧眼の美少女をまじまじと凝視した。自分には関係ないことだろうと目の前の白玉あずきに集中していたディーナだったが、複数の視線が注がれて顔を上げる。
「わぁ……」
「すごい美人さんや……」
　鈴木さんたちが関心したような溜め息を漏らした。
　そして、彼女らは顔を見合わせてひそひそと話し合うと、面白そうな顔で提案してきた。
「ねぇ、宿儺くん？　お邪魔虫なのは理解してるけど、同席してもいいかな？」
「……」

対面のディーナが『断れ』と言いたげな視線を送ってくるが、星一郎はそれを見なかった事にした。
「うん、どうぞ」
「ありがとう！」
鈴木さんたちはいそいそと席に座ってくると、興味津々に星一郎とディーナへ質問した。
「ねぇ、こっちの彼女さんとはどういう馴なれ初そめなの？」
「綺き麗れいな金髪やねぇ。これって地毛なん？」
「彼女さん、日本語は大だい丈じよう夫ぶ？」
彼女たちは完全にディーナを星一郎の彼女だと認にん識しきしたようだった。ゴシップ好きな女子魂を剥き出しに、情け容よう赦しやのない質問のシャワーを浴びせ掛けてくる。
ディーナは質問される度に口元や額が引ひき攣つるのを誤ご魔ま化かすのに必死だった。強気な彼女もさすがに多勢に無勢で押おされ気味で、
「そんな関係ではない」
と否定してみても、「またまた恥ずかしがっちゃってぇ！」という返しにたじたじとなっていた。
「しっかし、そうかぁ……宿儺くん、こんなに綺麗な彼女がいたんだね。道理で浮いた話がない筈よね」
鈴木さんたちは納得したようにうんうんと頷き合った。
「一時期は『女じゃなくて男の方が？』とか言われてたけど」
「単に彼女にぞっこんってことだったんやねぇ」
さらっと衝しよう撃げき的な事を言われた。
さらに彼女たちは深々と頷き合うと、みんな揃そろってディーナに向き直った。
「彼女さんっ！」
「は、はい!?」
「宿儺くんをヨロシク！」
「女の子全般に優しいから勘かん違ちがいしちゃうこともあるかもだ

けど」
「絶対に放しちゃダメだからね！」
「……」
「それじゃ、私たちは映画の時間だから行くね。バイバイ、宿儺くん、彼女さん」
　そう言って鈴木さんたちは去っていった。映画の時間までの時間潰しにしては長居しすぎたのか、会計後はバタバタと駆け足気味だった。
　こっちもそろそろ行こうかとディーナに声をかけようとした星一郎だったが、彼女が複雑な面おも持もちでこちらを見ているので質問の言葉が先に出る。
「どうかした？」
「……意外だな」
　いったい何のことだと首を捻ると、ディーナは至極真面目な顔で、
「意外だ。本当に彼女がいなかったとは」
　半信半疑なその声に、星一郎もさすがに眉をひそめる。
「……君、僕をなんだと思ってたんだい？」
「プレイボーイ気取りの嫌いや味みな奴やつとばかり思っていた」
「……人間が分かり合えるのは、とても難しいらしい」
「何をいまさら。歴史に残っているだけでも五千年前から相争っていたのが人間だ。苦労もなく簡単に分かり合えると考えるのはあまりに傲ごう慢まんだ」
　ディーナは鼻で笑い、次いで眉まゆ根ねを寄せた。
「しかし、分からんな……彼女らの物言いから察するに、お前は体育館裏に呼ばれたのも一度や二度ではないのではないか？」
「一回言おうと思ってたけど、君の日本観はちょっとおかしい」
「わたしの読んだコミックには、日本の女子学生は意中の男子学生を体育館裏に呼び出すのが作法だと書いてあったが？」
「……作法かどうかはともかく、確かに二、三度そういうお誘いを受けたことはあるよ」

「なのに付き合ったことはないと？　試めしに付き合うとさえ思わなかったのか？」
「断ると分かっていて付き合うなんて、真しん摯しとは言えないだろう？」
「何故断ることが前提なのだ？　わたしが分からないのはそこだ。お前が親切で丁てい寧ねいなのは壁を作るためなのではないか？　彼女らの話を聞いて、そんな風に思えた」
「……」
「宿儺星一郎。お前は何を恐れている？」
「……」
　こちらも、驚いた。
　てっきりディーナは自分に興味はないものだと思っていたのに、こうして見透かされるほどに観察されていたとは思っていなかった。
「お前は、何を怖がっているのだ？」
　射抜くような青い双そう眸ぼう。嘘うそや誤魔化しは許さないと告げるその瞳ひとみに、星一郎は言葉を選びながら口を開いた。
「……恐こわいのは、きっと……そう、きっと〝守れないこと〟なんだと思う……」
「……」
　ディーナは黙だまって続きを促うながす。星一郎は深呼吸して話を続けた。
「……両親が死んでから、姉さんは僕を守ってくれた。僕のことを一番大事に想おもってくれた。姉さんが早熟だったのは、才能もあるだろうけど、たぶん僕の為に早く大人にならないとって思ってたんだろうと思う。姉さんは、ずっと僕を守ってくれた。だからきっといつか、今度は僕が姉さんを守るんだって思ってきた」
「……それがお前の高い能力の理由か」
「最低限の強さは必要だと思ってたからね。いろいろやったよ。その度に姉さんは『星一郎はそんなことしなくてもいい』って言ってたけど」

「……優しく、強いお姉様だったのだな」
　感じ入ったようにディーナが言った。
　姉を褒ほめられて嬉うれしくなる星一郎だったが、同時に、心中で暗い絶望が重みを増した。
「……けど、いなくなった。僕は、姉さんを守れなかった」
「……お前の責任ではないだろう」
「事実だよ。それだけが事実だ。僕は姉さんを失った。姉さんを守れなかった。必ず守るって誓ってたのに、守れなかった。間に合わなかった。だから……恐い。もしも大事な人が出来たとしたら、また守れないんじゃないか？　また間に合わないんじゃないか？　心の何ど処こかでそう思ってるから、尻込みしているだけなのかも知れない。……我ながら情けない話だけど」
「……そうか」
　ディーナは頷き、テーブルの伝票を摘つまんで立ち上がった。
「詫わびや代わりと言っては何だが、ここはわたしが払おう」
　慮おもんぱかるような声で言ってディーナは歩き出した。
　態度を軟化させた――いや、スッキリしたようなディーナの背を、星一郎は疑問交じりに見み詰つめるのだった。

※　※　※

　――素晴らしいな。
　午後の戦闘訓練。すでに二十三回目になるダウンから素す早ばやく復帰して向かってくる星一郎に、ディーナは心からの賞賛を送った。
　当初は為なす術すべなく畏光の護まもりを破られて吹ふき飛とばされるのを繰り返していた新米〈聖楔者〉は、立ち直ってからまた吹き飛ばされるまでの間隔を徐じよ々じよに延長していっている。最初に見みえ隠かくれしていた本物の武器への恐怖も警けい戒かいへと移行

している。恐怖をコントロール出来るようになっている。

無論、高度な魔ま術じゆつ戦せん闘とう、それも魔術剣士として訓練を積んできた自分とは及ぶべくもない。動きにキレがあると言っても、あくまで一般人と比べてだ。無駄な動きも多いし、むしろ格段に上じよう昇しようした身体能力に振り回されてもいる。

が、その無駄が少しずつ、しかし確実に減ってきている。吹き飛ばされる度に模索し、駆け抜ける毎ごとに修正し、拳こぶしを振るう刹那にも最適化していく。

現に今も、自分の攻こう撃げきを無理やり腕うでを差し込んで防いだ。よほどの出力差があれば別だが、畏光が削けずり取とられない限り〈聖楔者〉同士の攻撃は反発し合って決定打とはならない。闘い方を実戦の中で瞬く間に体得している。

余計な説明を省いて実戦形式にしたのは大正解だった。

一見理性的に見えるが、宿儺星一郎は知性を旨とする研究者タイプではない。強きよう烈れつな意志で突き進む冒険者タイプの男だ。熱い風が吹く荒野でこそ、この男は強くなっていく。

――これでよくも普ふ通つうの学生だなどと言えたものだ。

この男には強烈な『目的』がある。そうでなくばこれほど戦いに順応など出来ない。戦いに放り込まれて、恐怖を克服しようなどとは思えない。戦いすら視野に含めた目的があったからこそ、この男はこれほど強きよう靭じんな精神力を獲得できたのだ。

大事な者を守る――それがこの男の目的。

気に入らない男だと思っていたが、いまは少しだけ身近に感じる。彼かれの目的は、自分ととても近しいものだ。

――故ゆえに、手抜きはしない！

連続突きで畏光を削られた星一郎が後退する。距離を取ると、彼は〈第二書版〉を取り出して装そう丁ていを開いた。

頁ページが乱らん舞ぶし、保存されていた術式が活性化する。頁は無数の炎ほのおとなってディーナの視界を幻惑した。

己を選定した《天命の書版》を見つけられない星一郎は、その間も

〈第二書版〉を遊ばせることなく、自らが組んだ魔術を次々にインストールしていた。〈第二書版〉を一級のＭＡＲデバイスとして利用しているのだ。

いま発動しているのは、日本の古式魔術の〝狐きつね火び〟を基にした幻惑術だ。しかも、

「！」

間近に着ちやく弾だんした炎ほのお弾だんが爆裂して砂すな煙けむりを巻き上げる。幻に混じらせて威力のある攻性術式が織り込んである。

手が込んでいる、が。

「〝イチイよ、太陽よ――守り、知らしめよ〟！」

秘文字ルーンの連なりが浮うき上あがった槍やりを地面へ突き刺すと、一ひと際きわ強い魔力光が瞬いて周囲の炎弾を幻惑と脅威の区別なく吹き散らす。

正面に星一郎の姿はない。

「そこだ！」

ディーナは振り返りもせずに大槍を背後へ振り払った。

右斜め後ろで手応えと畏光の拮きつ抗こうする異音が生じる。

畏光の加護は砕くだけなかったものの、不意打ちを不意打ちで返された星一郎は堪こらえ切きれずに吹き飛んでいった。

「まだまだ――」

振り返ったディーナは言葉を途と切ぎれさせられる。

吹き飛んだ星一郎は猫のように空中で体勢を直し、着地と同時に飛び込んできた。

対してディーナは、半ば安心して振り向いたばかり。

「ち、ぃ――っ！」

突き出した大槍の穂先は星一郎の頬ほおを掠めたがそれだけ。彼は最小限の動きで勢いを殺さぬまま突っ込んでくる。

「お、おおおおっ！」

拳の一ひと振ふりでこちらの畏光を打ち払われた。加護を丸裸にさ

れる。
　星一郎はさらに追つい撃げきの拳を、
「っ!?」
　驚いた顔が逆さにこちらを見返す。
　大槍から手を離したディーナが、星一郎の打だ撃げきを受け流しざまに放り投げたのだ。
　彼が大きく弧を描いて飛んで行く間に、ディーナは手放した槍を掴み直して疾走した。
　器用に中で体勢を整える星一郎だったが、着地と同時に首へ穂先を突き付けられて動きを止める。
「――今日はここまでにしようか」
　そう言ってディーナが刃やいばを下げると、星一郎はほっとした後に悔しがった。
「今日こそは、と思ったんだけど」
「いや、最後のは危なかった」
　大槍を〈第二書版〉へと戻もどしながらディーナは言った。
「実際、お前の身体能力は大したものだ。この短期間で身体能力だけでわたしをひやりとさせるほどに成長するとは」
「……なんだか、今日は優しいね？」
「たまには褒めねば、伸びるものも伸びないからな」
　いつもなら「どういう意味だ？」と恫どう喝かつするところだが肩をすくめるに止とどめる。そんな彼女の様子を目まの当あたりにした星一郎はますます意外そうな顔になり、いつも彼にやり込められているディーナはさらに気分を良くした。
「だが、勘違いはするな？　いざ『摩天の夜宴』が始まれば容赦はしない。互たがいに譲れぬ願いがある以上は、な」
「……願い？」
　星一郎が意外な言葉を聞いたようにきょとんとする。
　ディーナの方もその反応が意外であり、訝しげに星一郎を見返した。

「……完成した〈ＢＡＢＥＬ〉への願い……それがあるからこそ、こうして強くなろうとしているのだろう？」
　その問とい掛けに、星一郎は埃ほこりを払いながら立ち上がって、かるく首を振った。
「僕ぼくには、戦たたかう為の願いなんてないよ」
「……何を言っている……？」
　星一郎の言葉が理解できなくて、呆ぼう然ぜんと問い返す。
　いや。言葉の意味は分かる。分かるが、その理由が判わからない。
　何故、願いがないなどと言えるのだ……？
「……姉を――宿儺摩子を蘇よみがえらせるのではないのか？」
「物部代表が言っていたように、かい？」
　星一郎は物悲しげに、あるいは自じ嘲ちようするように笑った。
「あんなものは大言壮語にも程がある。それにもし可能だったとしても、僕はそんな事は願わない。願える筈がない。姉さんを守れなかった僕に、そんな事を願う資格はない」
「……」
「僕には〈ＢＡＢＥＬ〉で叶かなえようとする願いなんて、持ちあわせてはいないよ」
「……なんだ、それは……ッ!?」
　いつの間にか握り締めていた拳が震ふるえていた。奥おく歯ばがギリッと軋きしみ、速まった血流がごうごうと耳の奥おくでがなり立てている。
　ディーナは、怒いかり狂っていた。
「……お前は……貴様は……ッ！」
　先ほどまでの親近感から一点、目の前の男の涼すずしい顔を憎にく々にくしげに、それこそ肉親の仇かたきのごとく睨にらみ据すえた。
　――ああ、そうか。
　熱くなった脳髄の奥から、唐突に答えが湧いてきた。自分がこの男を気に入らなかった、その答えが。

戦うことを了りよう承しようし、こうして積極的に訓練を受けて実力を向上させたというのに、この男には願いがないという。それはつまり覚かく悟ごがないという事だ。

覚悟もない者が戦いに赴くその傲慢さに、我慢がならなかったのだ。

――いや、違ちがう。それだけではない。わたしは……嫉妬している。

この男には力がある。才もある。《天命の書版》を見つけて真に覚かく醒せいしたなら、極きわめて強力な〈聖楔者〉となるだろう。なのに彼には、強烈な欲望も覚悟もない。

それが妬ましいのだ。

強さに覚悟はいらないのだと。覚悟も願いも下らないと言われているようで、堪たまらなく苛いら立だつのだ。

「……」

ディーナは無言のまま星一郎に近付いていった。

爆ばく発はつ寸前の硬く張はり詰つめた無表情で歩み寄るディーナに、星一郎はたじろぎ半歩退いた。

「……ッ！」

間かん髪はつ容いれず、右手を振り抜いた。

小気味良い音が響いたが、たいして心は晴れなかった。

叩たたかれた頬を押さえるのも忘れ、星一郎が呆然とこちらを見返してくる。

「……くっ」

すべてを拒絶するように背を向けて〈第二書版〉から随騎を喚び出す。背後で星一郎が何かを言おうとしていたが、ディーナは魔力光の残ざん滓しを振り払うようにドライグを急発進させ、全速力で廃はい工こう場じようから飛び出した。

廃工場で別れてから、結局ディーナは帰ってこなかった。

念の為にとリビングで待っていた星一郎だったが、窓の外が白んできたのを見てようやく諦あきらめの溜ため息いきを長々と吐はき出した。

「……ああいう言い方はなかったかな……」

すでに昨日の事となったやり取りを思い出す。

もう少し、よい言い方はあったように思う。ここ数日をともに過ごして、ディーナが清廉な気質の少女であることは分かっていた。覚悟もなく戦おうというのは、覚悟を持って戦いに臨のぞむ彼女にしてみれば遊び半分のように思えたことだろう。

そう、彼女には覚悟がある。

勝ち抜こうという覚悟が。

そして、誰かを守るための覚悟が。

星一郎にはよく分かる。誰かを守ろうと決意した表情を、ずっと近くで見てきたのだ。

だからこそ、ほとんど生の感情を言葉にしてしまっていた。

「……」

ソファから立ち上がると、星一郎はそのままリビングを出て玄げん関かんへ向かった。鍵かぎを掛け、自宅マンションを後にする。

早朝の新京都には、早くも抹まつ香こうの匂においが何処からか薄うすく漂ただよってきていた。

星一郎は歩き始めた。

早朝にもかかわらず宵越しの熱気の残る祇ぎ園おん方面へ向かい、そこから鴨川を下って京都駅方面へ歩く。かなりの距離を早足で歩いたにもかかわらずまったく疲れなかった。おそらく現在の星一郎の持久力を含めた身体能力は、フルマラソンどころかトライアスロンの金メダリストを余よ裕ゆうで追い抜きゴールしてお釣りが来るだろう。だからほとんど足を止めることなく、黙もく々もくと新京都の街を歩き続ける。

やがて白々とした早朝の光は人いと熱いきれに追いやられ、新京都

はすっかり目覚めて喧けん騒そうに包まれる。太陽がすっかり昇って昼も近付きつつある頃ころ、星一郎は二に条じょう城じょうへと辿たどり着ついていた。新京都市街を歩いてほぼ半周したことになる。

この二条城も、魔力災害によって一度壊かい滅めつしている。さすがに堀の石垣は残っていたものの、城壁や正門はもちろん、二の丸や本殿も軒並み吹き飛ばされ、庭園を含めたほとんどがＭＡＲ技術の実体投とう影えいによる再現史し跡せきであった。であるから入場する観光客が払うのも、現在は拝観料ではなく復興料という名目に変わっていた。

疲労はないが、暑さはすでに最高気温に達しつつあった。星一郎は木陰のベンチに座すわって、観光客が飲まれてゆく出入口をしばし眺める。

「……さすがに無む謀ぼうだったかな……」

もともと当てがあって出てきた訳ではない。これは捜そう索さくでなく彷ほう徨こうで、気分に浸りたいだけの誤魔化しであるのは重々承知している。

もう明後日あさつてには『摩天の夜宴』が――〈聖楔者〉たちの戦いが始まる。無む駄だに歩き回るくらいなら、己おのれの《天命の書版》を探すべきだ。

分かっているが、それでもこのまま自分の為に時間を使う気にはなれない。

今度は北側に向かおうと星一郎は立ち上がり――右手にチリッ、と刺激を感じた。

「ん……？」

右の掌に目を向けるが、何か変化があるわけでもない。そもそもが気のせいで片付けてもいいくらいの、幽かすかな違和感だった。

「……」

だが星一郎は何かの合図を――それこそ〝虫の知らせ〟を受けたように辺りを見回した。

すると二条城の出口から、ここ最近で目に馴な染じんだ金色の髪か

みが目に入った。
　ディーナだ。
　出てきた彼女は、そのまま外壁に沿って歩いて行く。
「……」
　星一郎はそっと彼女の後を追った。

　二条城再現史跡から出てきたディーナは地下鉄に乗って西へ向かった。幸いにして、彼女は星一郎の尾行に気付く様子はなかった。なんといっても絵に描いたような金きん髪ぱつ碧へき眼がんの美少女だ。彼女に向けられる視線がカモフラージュになっていた。
　それでもバスを使われたらさすがに気付かれただろうが、東西復興線の西の終点で降りたディーナはバスロータリーには向かわずに歩き始めた。
　すでに市街の外れなので、歩くに連れ風景の中に緑が目立ってゆく。とはいえ、景勝地として有名な嵐山からは微妙に外れているので、特に見どころのない、全国の何処にでもあるような郊外の風景である。
　ディーナはそんな中でも、どんどんと建物も人気も疎まばらな方へと向かっていった。代わりに、蝉せみの声がどんどん大きくなる。蝉ががなり立てる森の中の坂道を、彼女はどんどんと上っていく。
　坂道の先を仰ぎ見ると、木々の合間に白い壁面がチラリと見えた。
　――病院？
　とっさにそう感じたものの、こんな辺へん鄙ぴで車もすれ違えないような道の先に、病院などあるものだろうか。
　やがて森が開けた小山の頂上には、生命あふれる山林の中では場ば違ちがいに清潔な白い建物が鎮座していた。建物も白なら、それを囲む高い塀へいも白。まるで外界からの刺激をすべて跳ね返すかのように真っ白だった。
　ディーナの姿はすでにない。開かれた正門の向こうへ進んでしまったらしい。

多少迷ったものの、ここまで来たのだ。星一郎は正門を潜り――
「――この病院は許可がない者は入れないぞ」
背後から掛かった声に振ふり向けば、正門のすぐ横の塀に、ディーナが腕を組んで背中を預けていた。彼女の青い瞳は予想通りと言わんばかりの冷静さで星一郎を見据えている。
「……もしかして最初から気付いてた？」
「気付いたのはついさっきだ。人混みに紛まぎれる手管はまあまあだったが、人気のない場所での気配については及第点には程遠い」
組んでいた腕をほどいて壁から背中を離すと、彼女は小さく「ふぅ」吐と息いきを漏もらした。溜め息のようにも、諦めのようにも、あるいは覚悟を決めるようにも聞こえる、複雑な吐息だった。
「気付いた時点で追い返しても良かったが……良い機会だからな」
ディーナは自分を納なつ得とくさせるように頷き、病院内へと歩き出した。
星一郎はディーナの背中を追いかける。
外観から推測したように、やはりこの建物は病院かそれに準じる施設のようだった。入り口の警備員にディーナがＩＤカードを示して扉とびらが開放されると、病院特有の消毒された空気に出迎えられた。
建物の中にはほとんど人気はない。むしろ蝉の鳴き声が締め出された分、外よりも余計に人気のなさが目立つ。時折ほんの僅わずかすれ違う白衣の人間も、医者というよりは研究者という感じで、こちらに視線のひとつすら向けてこなかった。
ディーナは迷う様子もなく進んでゆく。だが勝手知ったるというには雰ふん囲い気きが硬すぎる。エレベーターに乗り込んだ時も、階数表示のパネルをじっと見つめて身動ぎもしなかった。
入院病棟と思わしき階でエレベーターを降りると、どの部屋のドアも名札は掛かっておらず、部屋番号の代わりに管理コードが無個性に表記されていた。
ディーナは目的地らしい部屋の前で止まると、深呼吸し、何かを期待するような眼めでドアをノックした。だがしばらく待っても、ドア

の向こうからは何の反応も返ってこない。
「……入ります、兄様」
　硬かたい声で言ってディーナはドアを開けた。
　病室、なのだろう。
　心電図計や投薬機の作動する静かな機械音が聞こえるほど、その部屋は静せい寂じやくに満たされていた。沈しずんだように静かな空気は何の臭においも感じさせない。普通、病室はどれだけ清潔に保とうと、人間の生活臭は染み付くものだ。病とは、生きている人間の闘いなのだから。
　故にこの部屋は、病室というより霊安室のような無機質さを感じさせた。
　部屋の中央に、生きている人間が居るにもかかわらず。
「……」
　ディーナがベッドに近付く。
　ベッドの上には二十歳前後の青年が目を閉じて横になっていた。長身の白人男性だ。肌はだの色は悪くない。すこし癖のついた黒くろ髪かみも艶やかだ。なのにまったくと言っていいほど生きている人間という気がしない。わずかに胸が上下し自律呼吸をしているというのに、星一郎は精せい巧こうな人形を見ている気分になった。
　何か――人間を人間たらしめている〝何か〟が、その青年から決定的に喪そう失しつしていた。
「……わたしの兄、クリストファ・チャレンジャーだ」
　平淡な声でディーナがベッドの上の青年を紹しよう介かいした。星一郎が察していた通りだった。ベッドの青年の顔には、どことなくディーナと似た面影がある。
「……誰よりも優しくて、誰よりも強い方だった。古典魔ま術じゆつにも武技にも優すぐれた、『図書館』随ずい一いちの俊英だった。兄様は、わたしの誇りだった」
　ディーナの声は平淡だったが、それが激情を堪えたものであるのはすぐに分かった。ベッドの手すりを握にぎる彼女の右手は小刻みに震

え、力むあまりに八はち芒ぼう星せいの刻印までが瞬くように浮かび上がっている。
「……神の武ぶ威いの象しよう徴ちようたる『神しん槍そう』に選ばれた、最強の〈聖楔者〉の一人だった。権能武装〈ブリューナク〉で『摩天の夜宴』を勝ち抜くだろうと多くの者が声を揃えていた……」
「ブリューナク？」
「ああ、そうだ。〈ブリューナク〉は――あの権能武装の力の源となっている神格は、元々は兄様のものだった……」
　ぎりっ……とディーナは歯軋りした。
「……一年とすこし前だ。カルディア委員会に出向していた〈聖楔者〉が襲おそわれる事件があった。〈第二書版〉の完成の為ために集められた、古典魔術にも魔ま導どう工学にも造詣の深い者たちだ。襲われた者たちは書版の神性を奪うばわれ、ただ生きているだけの骸むくろと化した……！」
　ベッドで眠り続ける兄を慮って声を抑えていたものの、ディーナの声はいつ叫び出してもおかしくないほどに強こわばっていた。
「……〈聖楔者〉を倒せるのは〈聖楔者〉のみ。書版の神性も奪われていたとなれば、目的は十中八九『摩天の夜宴』の障害の除去だろう。実験と調整に従事する彼らを、卑ひ怯きようにも闇やみ討うちしたのだ。憎き『書版狩り』は……っ！」
　――『書版狩り』。
　それがディーナの兄らを闇討ちした〈聖楔者〉の仇あだ名なのだろう。仇名で呼ぶのは、未いまだに正体が不明だからか。
「……唯一、兄だけは自分の書版を守り切った。だが、意識は戻らなかった。身体からだにはなんの異常もないのに、ただ、意識だけが、何をどうしても戻らなかった……そんな兄を、国くに許もとの魔ま術じゆつ師したちは口汚く罵ののしった。『夜宴の前に脱落した役立たず』だと『生き恥はじを晒すくらいなら死んだ方がマシ』だと……恥知らずにも、兄を褒めそやしたその口で！」
「……」

おそらく、この青年——クリストファは本当に優ゆう秀しゆうだったのだろう。周囲と隔かく絶ぜつした実力を持った、天才と呼ぶに相応ふさわしい人物だったに違いない。

だからこそ、彼への糾弾もより根深いものだったのではないか。どれほど輝かがやかしい天使も地に落ちれば、悪あく魔まと呼ばれ忌み嫌われる。

星一郎も、姉の摩子に対する誹ひ謗ぼう中ちゆう傷しようを耳にしたのは一度や二度ではない。

「……兄様が襲われたその時、わたしは国許で訓練中だった。わたしは……名も判らぬ書版に選ばれた〈聖楔者〉だったからな……」

「名が、判らない？」

「わたしを選定した《天命の書版》は、肝かん心じんの神名が破損してた。故にわたしは自分の身に宿った神格を発揮できない、不完全な〈聖楔者〉だった……ある意味、お前の同類だ」

ディーナは皮肉げに自嘲した。

星一郎は、ようやく理解したように思った。

いかにカルディア委員会に命じられたとはいえ、助けられた恩があるとはいえ、ディーナが星一郎の戦せん闘とう訓練や書版の捜索に積極的だったのは、自分と彼かの女じよが境遇的に似ていたからだったのだ。

そして恐らく、彼女があれほど怒った理由も……

「兄様が倒たおれたと聞いて駆け付けたわたしの〈第二書版〉に、兄様の神格が移った。関係者は皆みな驚おどろいたが、わたしはこれこそ天命だと思った。だからわたしは、たとえ偶ぐう然ぜんでも手にした兄様の〈ブリューナク〉で、『摩天の夜宴』を勝ち抜かなければならない。兄様の名めい誉よを取り戻すために。兄様をこんな風にした『書版狩り』を討つために。そしてなによりも——兄様を助けるために……っ！」

いつの間にかディーナの声は震えていた。だが最後の砦とりでと言うべきか、彼女の表情は固く固く感情を封ふうじ込める、あまりに硬

い無表情だった。
　それきり、ディーナは押し黙ったまま、じっと眠り続ける兄に視線を注いでいた。
　やがて踵きびすを返し、ディーナは病室を後にした。星一郎もそれに続く。
　一言も漏らさず建物から出たディーナは、正門の前まで来たところで振り向き、ようやく口を開いた。
「……わたしには目的がある。〈ＢＡＢＥＬ〉にかける願いがある。なのに……お前は『無い』と言う。戦うための理由が無いと」
「……」
「わたしは、お前が似た者同士だと思っていた。不完全な〈聖楔者〉。大切な者を守る為に強くなろうとする姿勢。お前は、わたしと想いを同じくする者だと思っていた。願いは違えど、その想いの方向は同じだと……だが、お前には戦う理由がないと言う」
　ディーナは目を閉じ、深く長く息を吐いた。少しでも落ち着こうとするかのように。
　だが、その程度でどうにかなる胸中ではなかったのだろう。
　再び開かれた彼女の青い双眸は、強い怒りの光こう芒ぼうを宿したままだった。
「……戦う理由がない者は、戦うべきではない。否いや、戦う資格はない。たとえ〈聖楔者〉であっても、お前には『摩天の夜宴』に参加する資格はない」
「……」
「最後にひとつだけ忠告しておく。書版を見つけたらすぐに破棄することだ。理由なき者、覚悟なき者が、こちらに踏ふみ込んでくるな」
　吐き捨てるように言って、ディーナは背を向けて歩き去ってゆく。
　星一郎は無言で立ち尽くし、ただ彼女の後ろ姿を――戦いに臨む者の背を見詰めていた。

四章　夜宴ノ開始

1

　帰宅した後、星せいーいち郎ろうはリビングのソファに座り込んだままじっと考え込んでいた。日が沈んで暗くなっても明かりを付けず、手を組んだままほとんど身動ぎもしなかった。
　そのまま夜を越して明るくなった七月三十一日早朝、〈第二書版〉にカルディア委員会からの通達が送られてきた。本日深夜二十三時五十分より、カルディア委員会による『摩天の夜宴バビロン・ナイト』の開始宣言がなされると。
　神の力に選ばれ、神の力を振るう超常者、〈聖楔者ヒエロス〉たちの戦いが始まるのだ。
　だが、こと此こ処こに至って、星一郎は戦う理由を喪失していた。
　いや、そんなものははじめからなかったのか。
　――理由なき者、覚悟なき者が、こちらに踏み込んでくるな――
　ディーナの言葉は正しい。『摩天の夜宴』は命に関かかわる戦いだ。〈聖楔者〉たちは己の願いを叶える為に戦い抜き、勝ち抜こうと決意しているのだから。
　戦う理由のない――半端な覚悟の者が立ち入っていい戦いではない。
　すぐにでも戦いを破棄すると、カルディア委員会に届け出るのが正しいのだろう。
「……」
　結局、星一郎はソファに座ったまま、丸一日も考え込んでいた。
　さすがに丸一日も飲まず食わずでは身体がもたない。星一郎は冷蔵庫の中の残り物を温めて適当に腹に詰め込み、またソファに座り、また暗くなってきた室内の薄暗くら闇やみを漫まん然ぜんと見詰めた。

星一郎ははっと目を覚ました。

いつの間にか寝入ってしまったらしい。室内はすでに真っ暗だった。

時間を確かく認にんしようと頭を巡らして、いつの間にかベランダの窓が開いているのに気付く。じわりと差し込む月光が、微風に揺らめくカーテンの向こうに佇たたずむ人ひと影かげを照らし出した。

「――誰だ？」

「誰だ、なんてひどい言い草だな、星一郎……」

柔やわらかくも毅き然ぜんとしたその声の響ひびきに、星一郎はびくんっと身体を震わせた。

「もう、私を忘れてしまったのか……？」

風が止やみ、カーテンが収まる。窓まど際ぎわに佇んでいたのは、短めに切りそろえた黒髪に、右目を眼帯で覆おおった女性だった。

星一郎は驚きよう愕がくに目を見開き立ち上がった。

「……姉、さん……魔ま子こ、姉さん……」

「そうだ。私だよ、星一郎」

隻眼の女性はゆっくりと安心させるように笑った。切れ長の隻眼――残った左目がうっすらと細められる。

ズキンッ、と胸の古傷が痛みを発したように星一郎は感じた。姉も星一郎同様に幼い頃の事故で大おお怪け我がを負い、右目を失ったのだ。

姉――摩子が窓際から歩み寄ってくる。

摩子はもっぱら男物の服を着ていた。いまも、ゆったりとしたシャツにジーンズという格好だ。彼女がどういう意図でそういう格好を好んでいたのかは知らないが、マニッシュな服装は彼女の女性らしさをむしろ強調している。

混乱から動けない星一郎にするりと近づき、摩子は両手を伸のばして頬に触ふれてきた。

「ちょっと痩せた……いいや、逞たくましくなったのかな？　ちょっと見ない間に、どんどん男らしくなるな、星一郎は」

「……姉さん……いままで、何処に……」
「野や暮ぼなことを言うもんじゃない。せっかく久しぶりに会えたんだから」
　摩子はそう言って、星一郎の頬に当てていた両手を首に回し、身体を擦すり寄せるように抱きついてきた。
「姉、さん……？」
「会いたかった……会いたかったよ、星一郎……」
　摩子は抱きつく両手に力を込めた。豊かに膨らんだ乳房が星一郎の胸板に押おし付つけられて官能的に歪ゆがむ。
「……姉、さ、ん……？」
「ごめんね、星一郎。寂しい思いをさせたけど、もう何処にも行かない。ずっとーいつ緒しよだ」
　成熟した女の薫りが鼻をくすぐる。蕩とろけるような蜜の匂いに、星一郎はくらくらしながら思わす摩子を抱き返した。
「……うん……」
　摩子が体重を預けてきた。その軽くも逆らえぬ重みに押され、あっさりと星一郎はソファに押し倒された。
「星一郎……私が好きか？」
　頭を挟むように手を突いて見下ろしてくる摩子。右目を眼帯で覆っていても——否、それだからこそ余計に人目を惹ひきつける美貌が間近に迫せまっている。この一年ずっと焦がれて、もう取り戻せないと思っていた、姉の顔が。
　星一郎の返事は、たったひとつしかありえなかった。
「……うん……大好きだよ、姉さん……」
「なら、星一郎……もうけして離さないよう、強くわたしを抱いてくれ」
「……うん……」
　ぐっと引き寄せ、腕の中へ包つつみ込む。柔らかな感触が心地よく、星一郎はもっとその柔らかさと熱を確かめるべく、自分の身体を密着させていった。

「んっ……んぁ……星一郎……」
　腕の中で姉が身動ぐ。強すぎたのかと思って力を緩ゆるめると、彼女は熱く濡ぬれた瞳ひとみで星一郎を見つめてきた。
「星一郎……ひとつになろう？　もう二度と離はなれ離れにならないように」
　にじり寄って顔を近づけてきた姉が、柔らかそうな唇くちびるを自分のそれに重ねんとする。
　星一郎はびくりと身体を硬こう直ちよくさせた。
「……ねえ、さん……」
「……恐いか？　私も恐いよ……けど、星一郎だったら……」
「……う……ん……」
「大だい丈じよう夫ぶだよ、星一郎。お前は何にも恐がらくていい――お前は私が守るから」
　聞き慣れた言葉を紡つむぐ姉の顔に浮かぶのは、何も心配などないと確信させてくれる、優しげで慈しみに満ちた笑えみだった。
「……違う……っ」
　ギリッ、と奥歯を軋らせ、星一郎は言った。
「……違う……お前は……姉さんじゃ、ない……」
「何を言ってるんだ、星一郎？」
「姉さんは、そんな顔はしない……っ！」
　星一郎の知る摩子は、あんな風に笑ったりなどしなかった。
　たとえ顔は笑っていても、瞳の奥には厳しさと悲しみを宿していた。
　だからこそ星一郎は、いつか自分が守りたいと願ったのだ。
「姉さんはけっしてそんな顔で笑わない……彼女も、けしてそんな顔をしなかった……！」
「何を言っているんだ、星一郎……？」
「お前は……姉さんじゃ、ない！」
　目の前の女を突つき飛ばす。
　星一郎は聖楔の浮き上がった右手を握り込み、驚愕に目を見開く女

へ殴なぐりかかった。
「星一ろ――」
「姉さんを騙かたるな、尻軽女！」
――ギィィイイイイイイイインンッッ!!
異音が響いた。神性の輝きたる畏光が打つかり合う時に生じる、あの異音が。
金属が砕けるような音とともに、霧きりがかっていた意識がはっきりとした。
目の前に居たのは、姉ではなかった。まったく見覚えのない、黒いドレスに身を包んだ女だった。
女は驚おどろきに目を丸くして、よろよろと後ろに下がる。
「……まさか、こんな……九割近く掌握していたハズなのに……っ！」
女は右みぎ腕うでを押さえて呻うめいた。
女の右腕には金属製の精巧な蛇へびが巻き付いていた。それがただの装そう飾しよく品ひんでないのは、目を凝らさずとも判った。魔ま力りよくが引き寄せられて、命令を待つように従っている。何より、幽かに漏れる虹にじ色いろの光――畏光の輝き。
〈聖楔者〉だ。間ま違ちがいない。
近づこうと身構えたところで、首元でパキンッと何かに罅ひびが入る音がした。金属製の首輪みたいなものが嵌はまっているようだったが、指が触れた途と端たんに崩くずれて足元に落ちる。
落ちた蛇を模した首輪は、ぐずぐずに崩れて錆さびの塊かたまりとなった。
「……何者だ、お前は？」
「ふふ……怖い顔をしないで？　可愛かわいい顔が台無しよ？」
「生あい憎にくと淫魔みたいな真ま似ね事ごとをする女にかける愛あい嬌きようを、僕は持ちあわせちゃいない」
「……『淫魔』ね。随ずい分ぶんな言い草だけど、さすがに言い返せないわね……」

女は皮肉げに苦く笑しようした。

星一郎は頓着せずに殴りかかった。相手が〈聖楔者〉ならば手加減する理由はない。なにより姉の姿を借りて不ふ埒らちな真似をされた事に心底腸はらわたが煮えくり返っていた。

だが、星一郎の拳こぶしはあと一歩で届かなかった。

窓から突とつ如じよガラスを破って飛び込んできた黒い塊に弾はじき飛ばされ、ソファを巻き込みテレビ台に突っ込む。とっさに展開した畏光の加護で傷らしい傷はないが、身を起こした時にはすでに女はベランダに抜ぬけ出していた。

「残念だけどこれでお暇いとまするわ！」

女はそう言うと、蛇が巻き付いたのとは逆の腕うでを差し出した。星一郎を迎撃したと思おぼしき梟ふくろう——梟型の式神がその腕に止まる。すると、女の大きくはだけた胸むな元もとで『神デインギル』の刻印が輝き出し、活性化した夥おびただしい魔力が梟に吸い込まれてゆく。魔力を吸収した梟はその体積を増大させ、女を持ち上げて飛翔するほどの大きさとなる。

「さようなら、宿すく儺な星一郎！　縁えんがあったら『摩天の夜宴』でまた会いましょう！」

その言葉を残して女は去っていった。

拳を握り締めて夜空の向こうへ遠ざかる女を睨んでいた星一郎だったが、はっとして室内を振り返る。時計の針はすでに〇時を指している。

さっきの衝しよう撃げきでテレビの電源が繋つながって、ヒビ割れた画面にニュース映像が流れている。

その映像を目にした瞬しゆん間かん、星一郎は脇目もふらずに走り出していた。

『全世界の人類の皆みなさん、こんばんは。妾わらわはアスタ。カルディア委員会代表物ものの部べ昴こう造ぞうに代わって本日の司会を務めさせていただきますわ。

さて、各国の一部高官や魔導工学推進機関には周知の事実ですが、カルディア委員会は人類の悲願、安定した魔力供給の手段を発見いたしました。それは全人類史最古の聖遺物――《天命の書版》の復元です。

太古に砕くだかれ世界中に散さん逸いつし、各神話体系の〝原版〟となった《天命の書版》の欠片かけらたちを復元する。その為の手段として我々は書版の欠片たちに選ばれた神威の担にない手て――〈聖楔者〉たちによる神喰くらいの儀ぎ式しきたる『摩天の夜宴』を開催いたします。

カルディア委員会が監査する魔導工学実験都市新京都、その再現史跡で〈聖楔者〉たちは互いの《天命の書版》を賭け、最後の一人となるまで――すなわち《天命の第二書版》を生み出すまで戦うのです。

本日より、新京都は魔導工学実験都市としての真の姿を顕します。

さあ、皆さん――現代に蘇った英えい雄ゆうたち、神威の担い手として選ばれた超常者、〈聖楔者〉の戦いを見守って下さい。

我々カルディア委員会は、西せい暦れき二〇二五年八月一日午前〇時〇〇分を以もって、大儀式『摩天の夜宴』を開始することを宣言いたします！

そして今こ宵よい、『夜宴』の口火を切るのは――二条城再現史跡ですわ！」

2

新京都に存在するすべての再現史跡は、午後八時には全面立入禁止となる。実体ある現像を投影するＭＡＲデバイスのメンテナンスがその理由だが、今やそれが単なる下準備にすぎないのは誰の目にも明らかだった。

二に条じよう城じよう再現史跡。その二の丸庭園にて、今宵、二人の〈聖楔者〉が対たい峙じしていた。

一人は金髪碧眼の美少女、ディーナ・チャレンジャー。

　もう一人は大量のシルバーアクセを身に着けた青年、アルヴィン・ヴァイスであった。
「嬉うれしいぜェ、ディーナ・チャレンジャー。てっきり決闘の申し込みを拒否するもんだと思ってたがなァ！」
「拒む理由はない」
　ディーナは〈第二書版〉を取り出し、目の前の敵を睨み据える。
「お前には借りがある。それに、わたしは勝ち残らねばならない。ならば不意打ちで襲い掛かってくるような卑怯者をまず返り討ちにして、今後の弾みを付けさせてもらう」
「くかかっ！　言うねぇ、半端な〈聖楔者〉の分際でよォ」
　アルヴィンも〈第二書版〉を取り出し、ニタリと笑い返した。
「何なら、今からでも助すけっ人とを呼んだっていいんだぜ？　むしろ呼べよ。あのムカつくガキをよォ！」
　アルヴィンはいまだ癒えぬままの顔の火傷やけどを歪めてあざ笑う。
　ディーナはその言葉にぴくりと反応しかけたが、気を取り直すように首を振ってアルヴィンを睨み直した。
「……あの男は、わたしには関係ない。無駄口はもう十分だろう」
「ああ、始めようかァ！」
　二人の〈聖楔者〉はほとんど同時に〈第二書版〉を構えた。
　ディーナは先まず〈第二書版〉の頁ページを開き、随騎を召喚する。
「――〝我に付き随したがう機械仕じ掛かけの守護獣よ！　疾とく来たりて我わが足、我が鎧よろい、我が牙きばとなれ！〟」
　魔力光を発して舞まう頁が像を結び、真しん紅くの魔導機・ドライグが顕けん現げんする。
　随騎にまたがり、ディーナはさらに〈第二書版〉を天高く掲かかげる。眠り続ける兄の顔を脳のう裏りに浮うかべながら、〈第二書版〉を変形させる。
「〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵よ！　原型な

る神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　その力の一いつ端たんをいま此処に示せ！〟」

　ディーナの背に虹色の畏光が輝き、右手の甲こうに『神』の楔くさびが浮かび上がる。畏光に引き寄せられ活性化した大量の魔力が、楔の経路を通じて〈第二書版〉に注がれてゆく。彼女の手の中で、〈第二書版〉は形を変え、神々しく長大な神しん槍そう〈ブリューナク〉となった。

　赤い随騎に跨またがり神々しき大おお槍やりを構えるディーナは、アルヴィンがいまだ〈第二書版〉を構えたままなのを見て眉まゆを顰ひそめた。

「くかかっ。演出ってやつだよ、演出。この戦たたかいは多くの凡人どもに中継されてるんだ。半端な〈聖楔者〉に、オレの見せ場が邪じゃ魔まされるのはヤだからな」

　アルヴィンはニタニタと笑うと、改めて自らの〈第二書版〉を掲げた。

「これが神名を知り神格を引き出す、真の〈聖楔者〉の姿だ――〝神デインギルの威光よ！　神の門バベルの鍵よ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　死し霊りようと悪あく霊りようの王《風魔パズズ》よ！　アルヴィン・ヴァイスが汝なんじの正当なる末す裔え〈悪魔パズス〉の名を借りて訴え奉る！〟」

　アルヴィンの背後に畏光が浮かび上がり、胸元に八芒星の楔が輝く。周囲の魔力が引き寄せられ、膨ぼう大だいな魔力光が夜の闇やみを圧する。

　掲げられた〈第二書版〉が浮かび上がり、その装そう丁ていの表面に無数の分割線が走った。

「〝語り継がれしは災厄の担い手よ！　汝の風を以って尽ことごとくを病ませ、狂わせ、息絶えさせ給え！〟」

　浮かび上がった〈第二書版〉は、一いつ瞬しゅん、数倍の容積に膨れ上がり、そして爆ばく発はつするようにその形を弾けさせた。

　光り輝く頁の嵐あらしがアルヴィンを包み込み、彼かれを中心とし

て魔力の竜巻とでも言うべき光と颶ぐ風ふうの柱が立ち昇る。
　光と風が収まった時、其処に屹きつ立りつしていたのは人型から大きくかけ離れたシルエットの『化け物』だった。
　獅し子しを思わせる脚あしに、猛禽を思わせる爪つめを生やした両りよう腕うで。背後には大小のパイプが捻ねじ合わさり溶け合ったような歪いびつな翼つばさが生え、さらに長大な蠍さそりの尾が揺ゆれている。
　そして頭部は、獅子と猛禽の頭部を掛け合わせたような、禍まが々まがしくも威圧感をそなえた兜で覆われていた。
『これがオレの権能武装――〈悪風のイヴイルメイル・魔鎧オブ・シヤマール〉だ！』
　くぐもった、しかし拡大された声が、風の唸うなり声ごえのように周囲へ響き渡った。
『さぁ、いくぜェ！』
　権能武装〈悪風の魔鎧〉を纏まとったアルヴィンが吠ほえる。その背に生えた歪な翼が蛇の群れのように蠢うごめくと、無数のパイプの尖せん端たんから強きよう烈れつな風が吹ふき出だした。
　雅みやびな庭園の木々をざわめかせ、異形の甲かつ冑ちゆうが空に浮かび上がる。
『先ずは小手調べだ！』
　風を吹き出す翼の一部が蠢き、その口腔を眼下のディーナに向けた。
　ディーナはすぐさまドライグを発進させる。
　直後、それまで彼女がいた場所が大きく抉えぐれる。人工芝混じりの土塊が飛び、松の木が捻ひねくれて宙に舞った。
『ほらほら！　おかわりだ！』
　異形の甲冑はさらに翼を蠢かせ、無数の砲身を形作った。砲身内で極限まで加圧された空気砲ほう弾だんは、その圧力を砲撃後も維持したまま駆け抜け、着ちやく弾だんと同時に激げき烈れつな圧力を解放し、周囲を衝しよう撃げき波はで吹き飛ばしてゆく。

超圧縮風弾の空爆野中を高速で駆け抜けながら、ディーナは小さく呻き声を漏らした。

「《風魔パズズ》……！」

それは、古代バビロニアを発はつ祥しようとする化生クリーチヤーの中でも、ほとんど変わることなく現代まで伝えられた稀け有うな例のひとつだ。

風とは益と疫の両面があり、病魔をもたらす疫風の支配者とされたのが《パズズ》である。この疫風を司つかさどる魔神はさらに悪霊の首しゆ魁かいともされ、時代の変へん遷せんとともに〝悪魔〟の代表格のひとつになった。

つまり《風魔パズズ》の神格が司る権能は、風と病。

伝説に伝えられる《パズズ》の姿——有翼の混成獣キマイラを象かたどった〈悪風の魔鎧〉は、その権能をストレートに発揮し、間断ない風の爆撃を続ける。

「くぅ——〝雹ひようよ、貫き、勝利せよ！〟」

秘文字ルーンを浮かび上がらせた〈ブリューナク〉の穂先を空中のアルヴィンに向ける。星一郎の訓練時とは比べ物にならない数と速度の魔ま力りよく弾だんが空を駆ける。

『けっ』

だが、空中の異形甲冑は迎撃はおろか回かい避ひ行動すら見せなかった。黒光りする鎧の表面に着弾した瞬間、虹色の輝きが一瞬揺らめき、魔力弾の尽くが儚はかなく霧む散さんした。

『効くかよォ！　権能を織り込んでもいない、ただの魔力弾なんかがよォ！』

ぞわりと〈悪風の魔鎧〉の翼が蠢き、これまでに数倍する砲口が形成される。

『〈聖楔者〉の攻こう撃げきってのは、こういうのを言うんだよォ！』

轟ごう音おん。

一発一発が手しゆ榴りゆう弾だんじみた威力を持つ圧縮風弾が雨霰

と降り注ぐ。
　雅な日本庭園が無残に破は壊かいされてゆく。
　噴き上がった池の水が桶おけをひっくり返したように落ちてきて、ディーナはあっという間に濡ぬれ鼠ねずみとなる。横合いから吹き飛んできた土ど砂しやを被かぶって、綺き麗れいな金きん髪ぱつが土色に薄汚れる。
「くっ――ここまでの出力差が！」
　高速移動用の随騎のお陰かげで避よけられているが、攻撃の手段がない。魔力弾にはじまる攻性魔術はさっきの二の舞いだろう。敵の畏光の護まもりを突破するには、やはりこの〈ブリューナク〉を直接叩たたき込むしかない。
『くかかかァ！　直接攻撃できれば、なんて思ってんじゃねぇだろうなァ！』
　嘲りの言葉とともにアルヴィンが地上に降りてくる。砲口を蠢かせて翼を元の状態に戻すと、これみよがしに両手を広げた。
『やってみろよォ、半端な〈聖楔者〉がァ！』
「馬ば鹿かにし、てぇえええええっ！」
　ディーナはドライグを反転させた。〈ブリューナク〉を馬上槍のように脇に引き寄せ、随騎の速度と畏光の輝きを込めて突とつ撃げきする。
　文句の付けようのない、美しくすらある一本槍の突撃だった。
ディーナの〈ブリューナク〉がアルヴィンの〈悪風の魔鎧〉の胸のど真ん中に突き立てられる。
　――ギッィィィィイイイイイイイイイイイイイイイ
――――――ッッッ!!
　畏光と畏光が拮きつ抗こうする異音が劈つんざくように響き渡る。
　ディーナの一いち撃げきがそのままアルヴィンを押し込んでいく。深い轍わだちを刻みながら、魔導機は限界まで駆動する。
　アルヴィンの背中が二の丸御殿に激げき突とつした。実体ある幻げん像ぞうはより術的強度の高い〈聖楔者〉の鎧の衝突に耐たえられ

ず、当たる端から魔力に還かん元げんされて散ってゆく。
「――ッ！」
　大政奉還の場面で有名な二の丸黒書院を無残な虫むし喰くい状態にした所でドライグの車輪が空転した。アルヴィンが、ディーナの突撃に耐え切ったのだ。黒い鎧の表面には傷一つなく、その上を薄皮一枚で強固に覆う畏光の加護も健在だった。
『くかかっ！　分かったかァ？　力の差がよォ！』
　アルヴィンが槍の刀身を掴つかむ。
　後退する間もなく、ディーナは槍ごと振ふり回まわされてドライグから投げ出された。
　ディーナは二の丸大広間に背中から打ぶつかったものの、畏光の加護で実体幻像がクッション代わりとなってくれた。すぐさま起き上がると、向き直ったアルヴィンが背中の翼を構成するパイプのすべてをこっちに向けていた。無数の砲口から漏れ出した大量の高圧空気が、アルヴィンの両手によって更さらに圧縮されていく。渦うずを巻く空気稼働の凄すさまじさは、大型台風をそのまま圧縮したかのような圧迫感をディーナへもたらした。
『爆散しろやァァアアアアッ！』
　極限まで圧縮された颶風が解放される。実体幻像を盛大に光に還元しながら迫る特大の圧縮風弾。ディーナは奥おく歯ばを噛かみ締しめて防ぼう御ぎよの姿勢を取った。
「〝イチイよ――我を護れ！〟」
　畏光を最大限に輝かせ、防御のルーンを浮かび上がらせた〈ブリューナク〉を突き立てる。直後、アルヴィンの颶風が襲いかかった。
　――ギギギギギィィィィイイイイイイイイイイイイ――――――ッッ！
　凄まじい勢いでディーナの加護が削られてゆく。権能――神格の司る力が宿った魔風は桁外れの出力と強度で以って畏光の守護を圧あつ倒とうする。

――ギギ――――ィィィイイイインンンッッッ――――

魔風が過ぎ去った後、二の丸の実体幻像は北側をわずかに残して跡形もなく吹き散り、元の更さら地ちを晒さらしていた。

ディーナは何とか耐え切ったが、畏光の防御がすべて引き剥がされてしまっていた。

『くかかっ、まさか耐え抜くとは驚きだねェ？』

「くっ……」

槍を支えにするディーナだが、その瞳は戦意を欠片も失っていなかった。敵が大地にいる間がチャンスと、〈ブリューナク〉を構え直そうとし――

『だが、どっちにしろ同じだわなァ』

――ガクリと足から力が抜けた。

「な――」

もう足に来たのかと活を入れなおそうとしたディーナだったが、脱力はすぐに全身に伝でん播ぱした。槍を支えに縋すがり付き、膝ひざを折らないのが精一杯だ。

『くかかかかっ！　オレの《天命の書版》に宿った《風魔パズズ》の権能は『風』と『病』！　これまで放った風弾には瘴しよう気きも練り込んであったんだよォ！』

くぐもった嘲笑で震ふるえる兜かぶとの奥おくから、嬲なぶるような視線がディーナに向けられる。

『こないだの一件で「癒えない傷」を与あたえたから多少は用心してたろうが、直接攻撃以外にもやりようはある。まぁ、畏光の加護がある内は効き難いが――そいつが剥がれればこの通りだ』

「くっ、うぅ……」

『安心しろや。今は抵抗力が奪われて悪寒がするだろうが、畏光が戻れば回復するさ……畏光が戻もどるまで無事ならば、だがな』

がしゃりと異形の鎧を鳴らしてアルヴィンが歩み寄ってくる。

脱力感と悪寒に蝕むしばまれたディーナは、近付いてくる脅威を、無様にもただ見ていることしか出来ないでいた。

『……ちっ。マジでムカつくぜ』
　だがアルヴィンは、ディーナのそんな態度ですら気に入らないものであるらしい。
『弱っちぃ女の分際で、ムカつくんだよ。なんだァ、その眼めはァア？』
　ディーナの眼前に屹立して見下ろし、アルヴィンは不ふ機き嫌げんな声を兜から漏らした。
『弱ェなら弱ェヤツなりの眼ってのがあるだろうが？　選定した神格の名は判わからない。武装は借り物で権能は欠片も引き出せない。そんな不完全で中ちゆう途と半はん端ぱな〈聖楔者〉が、なんでそんな眼で俺おれを見れるんだァ？　もっと怯おびえろよ？　もっと震えろよ？　もっと惨めったらしい眼で、哀れっぽく命乞いをしてみろや？』
「……それで？」
「ァア？」
「命乞いをしてどうなる？　お前は命乞いをした相手を見逃すような男か？」
『……』
「そんなことはありえない。無む駄だな行こう為いだ。それに――わたしは何があろうと命乞いなどしない。仮令たとえお前が命乞いをしたら見逃してくれるとしても、だ」
『……』
「わたしは……戦う！　戦う為ために、勝ち抜く為に此処にいるのだ！　最後の瞬間まで、わたしは戦いを諦あきらめない！　戦いから、けして逃にげたりなどしない！」
『……そうかい』
　アルヴィンは吐はき捨てると、ディーナの足を蹴けり払った。彼女は今度こそ膝を折って地面に倒れ伏す。
「ぐっ……」
　更に蹴り転がされて仰あお向むけにされる。

アルヴィンは鋭するどい爪を備えた手甲をこれ見よがしに掲げてみせた。
『決めたぜェ。まずはそのムカつく目玉を抉り出す。その後は延々と我慢大会だ。どこまで悲鳴を我慢できるかねェ？』
嗜し虐ぎやく的てきな笑いが、黒光りする爪とともにディーナの顔へ降ふってくる。
女の肌はだなど簡単に引き裂く鉤かぎ爪づめを睨み、ディーナはふと星一郎の顔を思い浮かべた。
――なぜ、いま、あんな男を……
戦う理由がない、覚かく悟ごが欠けた男。あんな男を何な故ぜ、こんな窮きゆう地ちで思い出すのか。
――……けど、あの男は……一度も弱音を吐かなかった……
何度打ち据えられても立ち上がってきた。何度も何度も向かってきた。
――一度も……わたしを笑わなかった……
神格の名も知れぬ〈聖楔者〉。最強の権能を兄より借り受けただけの身の程知らず。誰だれもがディーナを『最強の力を持った最弱の〈聖楔者〉』と笑った。兄の名誉を取り戻す為、兄を目覚めさせる為に勝ち抜こうとする彼かの女じよを、誰もが嘲笑した。
けれどあの男だけは……星一郎だけは笑わなかった。それどころか自分の願いを理解してくれていたようにすら思える。
――……謝るべき、だったかな……
微かに未練を感じながら、ディーナは自分の右目を抉ろうと迫る鉤爪を見み詰つめた。
『くかかっ！　さぁ、イイ悲鳴を聞かせ――ェエエッ!?』
異形の甲冑が視界から消えた。横合いからの完全な奇襲に吹き飛んでゆく。
代わりにディーナの視界に現れたのは、たった今まで思い浮かべていた男の横顔だった。
「……良かった。間に合った」

戦場に飛び込んできたとは思えぬ笑え顔がおを向けられ、ディーナは呆ぼう然ぜんと星一郎を見返した。

3

全速力で駆け付けた星一郎は、ディーナが無事であることに心底ほっとした。弱ってはいるが、致命的な傷は受けていない。

星一郎は彼女を助け起こそうと手を差し出した。

「立てるかい？」

ディーナはしばし眼を丸くしていたが、やがて眼を据わらせて差し出された手を睨にらんだ。

「……いったい、何をしに来た……！」

彼女は助けなど要いらないと、槍を支えに身を起こした。膝立ちになり、荒あらい息を吐きながら星一郎を睨め上げる。

「……お前には、戦う理由がないのだろう……勝ち抜く覚悟がない奴やつが、戦場に立ち入るな！　さっさと立ち去れ！」

あまりにも予想通りの返答に、星一郎は思わず微笑ほほえんだ。その反応を見てますます表情を強こわばらせるディーナに、星一郎は告げる。

「――確かに、僕ぼくには戦う理由がない。戦う理由は、一年前に亡くしてしまった」

気高くも悲しみを秘めた表情を見るのが切なくて、強くなろうとしていた。守られるのではなく守るのだ、と。

けれど、守ろうとしていた姉は失われてしまった。

しかし、今目の前に、守ろうとしていた姉と瓜うり二ふたつの表情をした少女がいる。

大事な者を守り抜くと誓って戦う者が。

「――僕は、姉さんを蘇よみがえらそうだなんて思わない。失ったものを取り繕うような生き方は、姉さんの生き方を侮辱することだ。僕は――前に進む為の願いが欲しい」

　星一郎は膝を突いた。
　同じ視線の高さとなった星一郎を、ディーナは戸惑うように見つめ返した。
「僕はずっと、新しい理由を――新しい願いを探してた。いや――守りたいと思える誰かを探していた。そしていま、それを見つけた。見つけたと、思う」
　そう言って、星一郎はディーナへと頭を垂れた。
　まるで――そう、まるで、騎士が主に接するかのように。
「――ディーナ。君の戦いを、手伝わせて欲しい」
「……な、に……？」
「君を、守らせて欲しい。僕に、理由を与えて欲しい。僕を――」
　ちょっと気き障ざかな、と思いつつ、しかし紛まぎれも無い本音を、星一郎は口にした。
「――僕を、君の騎士にして欲しい」
　ディーナが息を呑のむ気配が伝わってきた。星一郎は顔を上げる。
　驚きの余りにか、ディーナは眼と口をぽかんとさせ茫ぼう然ぜん自じ失しつとなっていた。だが星一郎の視線が戻ってくると慌あわてて表情を引ひき締め、何かを言い返そうと口を開き直した。
「あっ……そっ……なっ……なんだ、それは……か、からかってるのかっ!?」
　彼女は眉を怒おこらせて星一郎に怒ど鳴なり返した。
「そんな、そんな理由で……そんな理由で戦おうというのか？　自分の為ではなく、他人ひとのために戦おうとっ!?」
「うん」
「そんなモノは異常だ！　死ぬ事もあり得る戦場にそんな願いで……それでは秤はかりが合わない！　お前の願いは、お前の生命にまるで見合っていない！」
「君だって、自分ではない誰かのために勝ち抜こうとしている」
「それは……兄様は家族だからだ！」
「だからだよ。それも僕が君を守りたいと思った理由のひとつだ。僕

は家族のために命懸けで戦っていた女性を知ってる。彼女の表情をよく知ってる」
「……本気、なのか……？」
「うん」
「っ……わ、わたしはお前が守るほどの人間なのかっ？　わたしは……わ、わたしは怒おこりっぽくて、そそっかしくて……」
「うん」
「く、口は悪いし、気の利いたことも言えない！　喋しやべり方かただってこんなだ……それに、わたしはお前に……」
「それだけ？　それで終わり？　寝起きが悪いとか意外にうっかりとか、他にもいろいろあると思うけど？」
「こ、ここでそんな事を言うな！」
　泣き言になりかけていた声に元気が戻る。叫んでしまったのに気付いてハッと口を塞ぐディーナは、目の前で微笑む星一郎の顔を見て、恨みがましい視線を向けた。
「……わたしは、お前が嫌きらいだ」
「うん」
「物腰は柔やわらかいが毅き然ぜんとしていないし、女性に優しいかと思えば体よくあしらうし、真面目そうな割にからかい癖があるし……男の癖に料理炊事洗濯が上う手まいのも腹が立つ」
「最後のは褒ほめられてるんだと思っておくよ」
「……きっとわたしはお前に文句ばかり言う。お前に払はらう対価も持ちあわせてはいない……それでもお前は、わたしを守るというのか……？」
「これは僕の願いなんだ。家族を守るために戦う君の表情を、苦しみや悲しみで歪めさせたくない。絶望や失望で、終わりにしたくない」
「……」
「君の表情は、僕がこの世の何よりも誇ほこり高たかいと信じる表情だ。けれど同時に憂いも秘めている。その表情はいつか、ハッピーエンドの笑顔にならなくちゃいけない」

「……」
「ディーナ・チャレンジャー。僕を君の騎士にして欲しい。僕の願いを叶かなえて欲しい。僕に、守り抜く戦いをさせて欲しい」
「……分かった」
　頷うなずき、ディーナは立ち上がった。削られた畏光の輝かがやきも戻り、その立ち姿にも力強さが戻る。膝を突いたままの星一郎を凛りんとした表情で眺ながめ、ディーナはすぅっと息を吸った。
「――宿儺星一郎！　わたしがお前の願いを叶える！　わたしがお前の理由になろう！　そして此こ処こに誓う！　お前の守護の意思が折れぬ限り、わたしの勝利の意思も決して折れぬ！　今この時よりわたしとお前は運命を共にする剣けんと盾！　いざ共に戦い、共に最後まで勝ち抜かん！」
「――御意」
　静かに頷き、星一郎は再度、深々と頭を垂れた。
　それを見守るディーナの顔は、怒りや緊きん張ちようではない感情で朱に染まっていたが――星一郎がそれを確かく認にんする前に、泥水となった庭園の池が盛大な音とともに空へ噴き上がる。
『くっ――――かかかっ！　来たなァ、クソガキがァァアアッ！　また会えて嬉しいぜェェエエッ!?』
「そう？」
　畏光の輝きを纏まとい、右手に『神』の刻印を浮かび上がらせて立ち上がった星一郎は、空中に浮かぶ異形の甲冑を冷ややかに見上げた。
「僕はまったく嬉しくないけどね、アルヴィン・ヴァイス」
『冷たいねェ。とはいえ声だけでちゃんとオレだって分かってくれたってのは正直嬉しいぜェエ？』
「それほどの事じゃない。そんな下品な喋り方をする人間は滅多にいないだろうからね」
『……へェエエ？　随分と言ってくれるじゃねェか……！』
　アルヴィンの内心を反映してか、〈悪風の魔鎧〉の翼がざわざわと蠢く。甲冑の各所からもギチリギチリと、歯軋りならぬ鎧軋りの音が

漏れ出していた。
　怒り狂うアルヴィンの様子に、ディーナが自分の〝騎士〟となった少年へ呆あきれ混まじりな視線を向ける。
「……わたしの騎士には、人を苛いら立だたせる才能があるみたいだ」
「主を傷付けられて怒らない騎士はいませんよ、僕の姫君マイ・プリンセス」
「ひ、姫はやめろ！　こそばゆい！」
「呼び方については追々に――来るよ！」
「くっ――ああ、分かった、星一郎！」
　彼女デイーナが名を呼ぶ。星一郎は薄うすく微笑み――その笑みをすぐに引き締めて地を蹴った。
　直後、星一郎を追うように無数の〝風弾〟が降り注ぐ。
『くかかっ！　相変わらず生身ですばしっこいなァ！　なら、これでどうよ！』
　宙に浮かぶアルヴィンの砲口が、照準を星一郎から変えた。いまだ瘴気の影えい響きようから脱し切れないディーナへと。
『そらァ！』
　動きのキレが戻らぬディーナが大槍を構えて防御の体勢を取る。彼女へ注ぐ無数の〝風弾〟を、急転進した星一郎の拳が迎撃した。
　単純な、しかし確たる〝守護〟意思の込められた魔ま力りよく塊かいをグローブのように纏った拳が、〝風弾〟のすべてを打ち落とす。
『やるねェ』
「大した事じゃない」
　砂すな煙けむりと魔力光の残ざん滓しを振り払い、星一郎はアルヴィンを睨み返す。
「威力はともかく、ディーナの〝魔ま弾だん〟に比べれば狙いも軌道も粗そ雑ざつにすぎる」
　言外に『ディーナより劣る』と言われ、またもやアルヴィンが鎧を軋らせる。

『くかか……言ってくれるが、足手まといの女を守ってちゃ、避けられるもんも避けられないだろォ？』
「……」
「悔しいが、アルヴィンの言うとおりだ、星一郎」
　ちらりと後ろを見やると、守られたディーナが複雑な面おも持もちを星一郎に向けていた。
「……お前の誓いは嬉しいが、わたしはただ守られるなど業ごう腹はらだ。足手まといになるくらいならむしろ、わたしを囮おとりにしろ。お前がわたしの意志を尊いと思ってくれるなら……勝利の為に動いてくれ」
「……」
「これは戦いだ。傷も痛みも、わたしは元から承知の上だ」
「……確かに、これは戦いだ。弱った敵から排除してゆくのは、それを餌にして仲間をおびき寄せるのは、とても正しい戦略だ」
　静かに頷くと、ディーナはぎくりと体を強張らせた。
　ゆっくりと、星一郎がアルヴィンに正面から向き直る。空から見下ろす異形の鎧ですらがたじろいだように身を震わせた。
　星一郎は今、吠ほえ猛たける寸前の獣の如ごとく歯を剥むき出だしにしていた。なまじ、普段が飄ひょう々ひょうと落ち着いた表情をしているだけに、一度感情が表出すると、野の獣を思わせる荒あら々あらしい怒りが見る者を竦すくませるほどであった。
「だから、これは、僕の勝手な怒りだ。僕は、僕の利己的な感情に従って、僕の大事なものを傷つけようとした――貴様を斃たおす、アルヴィン・ヴァイス」
『ッ！　……くかかかっ……やってみろよォォォオオオオオオオッ！』
　一瞬でも気を飲み込まれかけた自分が許せないのか、アルヴィンはありったけの怒声とともに翼を構築する砲筒を地上に向ける。
「きゃっ――せ、星一郎……っ？」
　無理やり引き寄せたディーナが戸と惑まどった声を出すが、星一郎

は返事をするよりも早くその場を飛とび退のいた。直後、〝風弾〟の雨によって地面が耕された。
「せっ、星一郎――――ッッ!?」
「舌を噛むよ」
　くるりと脇と膝を抱かかえこまれた――お姫ひめ様さま抱だっこされたディーナが声を裏返すが、星一郎は一言だけ返して全力疾走を開始した。女性とはいえ人一人を抱えながら軽快に走り出す星一郎の後を追い、〝風弾〟が地面を大きく掘り返してゆく。
『くかかっ！　どうしたよッ!?　書版すら見つけられない〈聖楔者〉がァ！』
　激烈な爆ばく音おんにもかかわらず、拡声されたアルヴィンの台詞せりふが二条城の敷しき地ち全体に響ひびき渡る。
『所しよ詮せん、己の権能に目覚めてない奴らが何人束になろうと、真の〈聖楔者〉の敵じゃあねぇんだよォォオ！』
「――そこまで言うなら降りてきたら？　いつまでも空に浮かんで、まるで怯えてるみたいだ」
　とくに怒鳴り返しているわけではないが、わざわざこちらの声も拾っているのか、アルヴィンは耳障りな笑い声でそれに応えた。
『くかかかかっ！　安い挑発だなァ！　業腹だが、〈聖楔者〉の畏光の加護を容易く打ち砕くテメェの拳こぶしは、〈悪風の魔鎧〉を纏ったオレでも十分な脅威だ……だからよォ！　こうして飽和爆撃を続けさせてもらうぜェ！』
「――粗野な言動とは裏腹に、意外と冷静だ」
「せっ、せっ、星一郎――ッ！」
　視線を戻すと、抱え上げられたディーナが顔を真っ赤にしていた。
　嫌いな男にお姫様抱っこされる彼女の心中を察し、星一郎は真しん摯しに謝あやまった。
「ごめん。けど我慢して」
「ごめんだと？　我慢だとっ!?」
　ますます顔を真っ赤にし、ディーナは追いかけてくる爆音に負けじ

と怒鳴り返した。
「我慢できるか！　わたしはお前の願いを聞き入れたが、ずっと守ってもらう為に聞きれたんじゃない！　わたしは共に戦う為にお前の願いを聞き入れたのだ！　こんな風にお姫ひめ様さま扱あつかいされる為じゃない！」
「……ふふ」
「何を笑っているっ!?」
　――やっぱり君を選んで正解だったからだよ、ディーナ。
　星一郎は胸の中でひっそりと呟つぶやいた。
　意地っ張りといえばそれまでだが、彼女の精神は気高いままだ。そうそう簡単に守らせてはくれないと言う彼女だからこそ、星一郎も守り甲が斐いがあるというものだった。
「邪魔になるならもう降ろせ！　すでに畏光も回復して瘴気も抜ぬけた。いまなら絶えるくらい――」

「そうはいかない」
「星一郎っ！」
「勝つためには君の力が必要だ」
　その言葉に、ディーナは口をつぐんだ。
「僕だけでも、君だけでも、ヤツを倒せない」
「……策があるのだな？」
　こくりと頷くと、ディーナは青い瞳ひとみに戦意の炎ほのおを灯ともらせて口元を引き締めた。
「……聞かせろ、星一郎。お前の策を――勝つための方法を」

『くかかかかかっ！　逃げろや逃げろォ！』
　地上への爆撃を続けながらアルヴィンは嗤わらった。
　その美しさで多くの者たちの心を安らげてきた二条城二の丸庭園は、すでに欠片かけらも面影を見み出いだせぬ戦場そのものとなっていた。その砂さ塵じん舞まう戦場をちょろちょろと這はい回まわる未覚醒〈聖楔者〉の二人組を追い回し、アルヴィンは権能武装〈悪風の魔鎧〉の中で嘲笑を響かせた。
　アルヴィンは弱い者が嫌いだ。弱いのに歯向かう者はなお嫌いだった。
　弱い者は弱い者らしく振る舞うべきなのだ。地面に額を擦すり付け、哀れな声で命乞いをすべきなのだ。それが弱者の正しい在り方だ。
　だからアルヴィンは、ディーナ・チャレンジャーに唾棄するほどの嫌悪を覚えていた。
『最強の力を持った最弱の〈聖楔者〉』。勘かん違ちがいした馬鹿な弱者に身の程を思い知らせようと思ったのに、あの女は一度目の襲撃でも、二度目のこの戦いでも、まったく恐おそれる素そ振ぶりを見せなかった。それどころか命を狩かられるその刹那まで、勝利への戦意をまったく衰おとろえさせない。
　弱っちい女のくせに、何故命乞いをしないのか。

だから、アルヴィンは殊更に嬲る。嬲って嬲って、命乞いをさせなければ、あの生意気な顔を絶望で歪ゆがめてやらねば気がすまなかった。

それを邪魔をする、あのガキも同様だ。

弱者は守られる権利などない。守られてはならない。

あの二人はアルヴィンの道理に合わない。だから、絶望的な力の差を実感させて、己の卑小さとひ弱さを思い知らせてやらねば、

『スッキリしねぇんだよォォォォオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

一ひと際きわ強力な〝風弾〟を打ち込む。

キノコ雲を思わせる爆煙が吹き上がり、戦場が土つち煙けむりで覆われた。

『チッ。風で吹き散らすか』

戦場の視界を元に戻そうとしたアルヴィンに、土煙を貫いて幾いくつもの魔力弾が打ち込まれた。迎撃するまでもなく、身に纏った畏光の加護が防御シヤツトダウンする。

『そこかァ！』

撃うち込むと、土煙が新たな爆風に吹き飛ばされた。

槍の穂先を向けたディーナが、いまも新たな〝魔弾〟を生み出し、アルヴィンへ撃ち出してくる。

『効くかよぉ！』

撃ち込まれる〝魔弾〟を無視して爆撃を再開すると、ディーナは一目散に逃げ出した。あの生意気な少年——宿儺星一郎が助けに現れる様子はない。

『あの女を囮にしたか？　隠れて何かするつもりか？』

アルヴィンは憐あわれな姿を晒す二条城二の丸を眺め回した。先ほど防諜用の結界を張ってひそひそ話をしていたのは分かっている。何か策を弄そうとしているのは明らかだ。

〈聖楔者〉に与えられた霊視力は、特級の異能である真の〝妖精の眼グラム・サイト〟に一歩及およばぬものの、ほとんどの隠形を看破す

る。いまだ未覚醒の〈聖楔者〉が扱あつかう隠形術ではアルヴィンの眼は欺けない筈はず――だが、戦場にディーナ以外の人ひと影かげを見出すことは出来なかった。
『物理的にどっかに潜んでる、ってか。上手く気配も畏光も抑えてやがるじゃねぇか。なにを企んでやがる……』
　地上を睨む間にもディーナの〝魔弾〟が断続的に撃ち込まれる。〈悪風の魔鎧〉にはなんの痛つう痒ようもない。ないが、それだけに羽虫にたかられるような不快感が募ってゆく。
『この……弱っちぃ女がァ！』
　砲筒の一部をディーナへ向け、それこそ蝿はえを追い散らすように大雑把な攻撃を放つ。
　間近に着弾した〝風弾〟の衝撃波に翻ほん弄ろうされるディーナだが、立ち上がった彼女はすぐにまた槍やりを向けて〝魔弾〟を放ってきた。
　アルヴィンは苛立ちながらも、ディーナへ攻撃を集中することは避けた。
　現状、彼が一番に警けい戒かいすべきは宿儺星一郎だ。あの少年の拳は〈聖楔者〉の畏光の護りを容易たやすく打ち破る力がある。畏光の護りが破られぬ限り、権能に目覚めていない未覚醒の〈聖楔者〉の魔ま術じゆつは恐るるに足らない。そう考えれば、あの女が効かぬと分かっている攻撃を繰り返す理由も想像が付く。
　大方、こうやってこっちを苛立たせて地上に近づいたところへ奇襲するつもりだろう。
　だが、その手には乗らない。あのガキは権能武装を顕けん現げんすることはおろか、随騎を喚び出すことも出来ない。地上へ近づかない限り、有効な攻撃手段はないのだ。
『どこだ？　どこに隠かくれた、クソガキィ……ああっ、ウゼェ！』
　繰くり返かえされる〝魔弾〟を放つディーナを追い散らそうと視線を向けたその時、何かがアルヴィンの足に絡み付いた。
『おっ？』

ワイヤーだ。しかも術的強化を施して強化してある。それが思い切り、アルヴィンの身体からだを地上に引き下ろそうと張り詰めている。

『ぐ、おっ……どこ、から……』

ワイヤーの出で処どころは、かろうじて残った二の丸の影からだった。

『そこかァ！』

アルヴィンは背中の翼つばさをワイヤーの先に向けた。極限まで高圧圧縮した特大の〝風弾〟を練り込む。

『爆散しろやァ!!』

発射。

残っていた二の丸の建物が一いつ瞬しゆんで魔ま力りよく光こうに変へん換かんされて巻き上がり、続く爆煙がその燐光を残さず飲み込んだ。後には巨きよ大だいなクレーターが築かれる。

『くかかっ！　生きてるかァ？　隠れてたせいで狙いが大雑把になっちまったからな。もし直撃してたらこの後のお楽しみが――』

爆煙が薄まって出来上がった特大クレーターが露あらわとなり、アルヴィンの台詞が途と切ぎれた。

其そ処こに埋うもれているのはボロボロになった宿儺星一郎だと思っていたのに、それらしき人影はない。土砂に半ば埋まっているのは、真しん紅くの装甲の随騎だけだった。

『さっきのワイヤーはあの魔ま導どう機きの……っ！　ヤツは何ど処こだ!?』

すぐに見つかった。

ディーナの前に立ち、こちらを見ている。

『な――』

何を、と言う前に向こうが動く。

星一郎の後ろに立つディーナは、星一郎の背へと大槍の穂先を向けている。

「やってくれ、ディーナ！」

「ああ！　行くぞ、星一郎！」
　溜めに溜めた魔ま力りよく弾だんが連続で炸さく裂れつし、星一郎の背を押おしやった。容よう赦しやの無い爆圧が、彼かれを一気に空へ運ぶ。
『クッ――』
　狂ってるクレイジー！
　だが背中の砲口を一方へ向けてしまった後なので迎撃が間に合わない。瞬く間に魔力塊を帯びた拳を振り上げる星一郎が、アルヴィンの眼前へと迫せまった。
「う――おおおおおおおおおおおっ！」
『ぐッ――』
　間一髪、浮遊状態から一瞬身体を落としたアルヴィンの頭上で、星一郎の拳が空振る。
　――驚おどろかせやがって！
　アルヴィンはその無防備な腹に砲口を向け直そうとするが――
『バ――』
　星一郎を追うように走ってきたさらなる魔力弾が、星一郎の軌道を強ごう引いんに変える。横合いからディーナの魔力弾を受けた彼の身体がアルヴィンへと降ってくる。
『――力な――ッ！』
　――ギギギギギギギィィィィイイイイイイイイイイイイイイッッッッ！
　濃のう密みつな魔力塊を纏まとった左拳がアルヴィンの胸板に叩たたきつけられる。畏光と畏光、聖人の資格を持つ者が帯びる不ふ可か侵しんの加護が、その支配圏を巡めぐって鬩せめぎ合あい、そして――
　――ィィィィイイイインンッ！
　出力が勝っている筈のアルヴィンの畏光の護りが砕くだけ散る。だが、星一郎の攻こう撃げきはまだ終わっていない。彼はさらに、右拳を振り上げ、

「おおおおおおおっ！」
　畏光の護りに開いた穴、黒い胸甲に、生身の拳を叩きつけてきた。
『ごっ――おぁぁあああああああっ！』
　魔力により実体を得るＭＡＲ技術によって編まれたアルヴィンの〈悪風の魔鎧〉。その強度は魔ま術じゆつ的てきに限らず、物理的にも強固な剛性を誇る。その堅けん牢ろうさを示すように、星一郎の拳は皮が破れ肉が裂さけて血を迸ほとばしらせている。しかし、魔鎧の骨格を成す術式情報が、強きよう烈れつな〝攻撃〟の意志の侵しん食しよくを受けて綻びを見せ始める。戦車砲の直撃にも耐えると太鼓判を押された黒い甲冑が、魔力光に還元されてゆく。
『この、特性……キサマ！『神殺し』に連なる神格の――』
　目の前の少年を一刻も早く引き剥がさんと〝風弾〟を撃ち放つ。空中で何が出来るでもなく、星一郎は間近からの攻撃によって虹にじ色いろに輝く畏光を減げん衰すいさせながら吹ふっ飛とんだ。
　アルヴィンは慌てて自らの胸甲に触ふれた。構成が解け、生身が一部露ろ出しゆつしていた。間一髪だ。もう少しでダメージを負っていただろう。
『このっ……クソがァアアッ!!』
　アルヴィンは止めを刺さんと、きりもみ状態で落ちてゆく星一郎に向き直ろうとして、
『ぐがっ!?』
　綻びた胸甲に受けた衝しよう撃げきに身体を震わせた。
　反射的に地上を見た途と端たん、アルヴィンの思考は真っ白になった。
　数えるのもバカバカしい数の魔力弾が、アルヴィンへと向かって迫ってきていた。技術的には巧妙でも、〈聖楔者〉としては無害に等しい魔術。だが、魔力に対する不ふ可か侵しん防ぼう御ぎよ圏けんたる畏光の加護は――そして権能を顕現するための魔ま鎧よろいは――
『ディィィイイイイイナ・チャレンジャァァアアアアアアアアアアアア――――ッ！』

直後、すべての〝魔弾〟が過たず、アルヴィンの鎧の綻びへと着ちやく弾だんした。

畏光の加護も魔鎧の装甲も綻びた生身に魔力弾を喰くらい、吹き飛ばされたアルヴィンは大きく放物線を描いて二条城の本丸付近へと落下していった。完全に気を失っているようで、異形の甲冑はディーナの視界から消えるまで身動ぎひとつしなかった。

「……勝った、のか……？」

ディーナはほとんど無意識に呟いていた。

戦いに臨のぞむ以上は勝つ事を己に課している。死力を尽つくして勝とうと決意していた。

だが、こうして敵を撃退した時、ディーナの胸中に湧わき上あがったのは『信じられない』という気持ちだった。

（……わたしは、心の何処かで負けることを『しょうがない』と思っていた、のか？）

強気を装う心の片隅では、実は敗北を受け入れていたのか。

いまさらながら自分の惰弱さに自じ嘲ちようを禁じ得なかったが、幸か不幸か、彼女が嘲笑を浮うかべることはなかった。

「……勝った、のかな？」

振ふり向むくと、ほとんどぼろ雑ぞう巾きんと化した衣服を引きずるようにして星一郎が近付いてくるところだった。とはいえ、疲ひ労ろうしきった様子ではあるが目立った負傷は見受けられない。

この一週間で散々に傷めつけて鍛きたえたディーナにしても、呆れるほどの頑がん丈じようさだ。

だから、ディーナは心底呆れたような表情を星一郎に向けた。

「……呆れるほどに頑丈だな。これなら威力を手加減することはなかったな」

「……あれって、手加減してたの？」

背中をさすりながら星一郎がこぼした。

「手加減してたような気配は、微み塵じんも感じられなかったけ

ど？　むしろ恨みが籠もってたような……」
「そう思うのは、やましい気持ちがあるからだろう」
　ディーナは強気に言い返すと、くるりと身を翻ひるがえした。
「行くぞ。斃した〈聖楔者〉の神格と神性を回収するまで、戦いは終わらないのだからな」
「……人遣いが荒いなぁ……」
　やれやれと言いたげに溜ため息いきを漏らしつつも付き添って歩く星一郎を横目に見て、ディーナは声にも顔にも出ださず、胸の中で苦く笑しようした。
（……負けられない理由が、もうひとつ出来た）
　自分を守ると彼は言った。
　自分は彼の理由になると明言した。
　なら、自分はこの少年の――宿儺星一郎の理由に見合うだけの価値を示さねばならない。
　だから、もう『しょうがない』などと、敗北を受け入れるような気持ちをほんの一欠片でも抱くわけにはいかない。
　ディーナは改めて『勝利』を心に誓うのだった。

4

　更さら地ちになった二の丸を後にした二人は、すでに戦いの余波で綻びはじめた二条城本丸へと足を踏ふみ入いれた。
　アルヴィンが落ちた場所はすぐに分かった。本丸御殿の中央付近で、実体幻げん像ぞうが還かん元げんされた魔力光の残滓が漂ただよっている。
　庭園を回りこむようにして近づくと、案の定本丸は大きく幻像を欠損していた。黒光りする異形の鎧が、その中央で仰向けに倒たおれていた。
　その傍らに見慣れぬ女の姿があった。白々しい月光に映える、黒いドレスを纏った女だ。

星一郎は足を止める。ディーナも警戒して足を止めた。
星一郎はアルヴィンの横に立つ女へ、敵意を隠さぬ視線を向けた。
視線に気付いたが、女が星一郎へと顔を向けて艶然と微笑んだ。
「早い再会になったわね、宿儺星一郎？」
「……顔見知りか？」
槍を構え直して問とい掛かけるディーナに、星一郎は苦々しさを堪こらえて頷いた。
「うん……さっき、夜よ這ばいされたよ」
「なっ――よ、夜這いっ？」
ぎょっと驚かれるのは予想通りだったが、彼女の視線がそろりそろりと下って行くのに星一郎は首を傾かしげた。
「……まさか、お前……もしかしてもう……？」
「僕はまだ清いままだよ!?」
ディーナの懸念を察し、星一郎は慌てて首を振った。
二人のやりとりを見て、女はけらけらと笑い出した。
「あはははっ！　ええ、彼の名めい誉よの為ために言っておくと、彼はまだ一滴も漏らしちゃいないわ。もう少し、だったけどね」
女の台詞で視線が厳しくなるディーナだったが、星一郎の顔が明らかな怒りで強張るのを見て眉まゆを顰めた。
「星一郎？」
「……あいつは、姉さんの姿をして僕を誘惑した……よりによって、姉さんの姿で！」
星一郎の絞り出すような声に、ディーナもまた不快げに女を睨んだ。
「それがお前の権能か……そうやってそこの男アルヴインも傀かい儡らいにしていたのだな？」
ディーナの言葉に、星一郎は内心で頷いた。
アルヴィンは、自分が書版を発見出来ていないことも、名乗っていないはずの名前も知っていた。となれば、それを教えた人物がいる。自分とディーナを監かん視ししていた人物が。

女は、ゆっくりと顔に笑えみを浮かべた。ただし、それはけして相手を安心させる為の表情ではない。どろりと粘着質な、黒い悪意が滴るような笑みだった。
「ええ、そうよ」
「淫らな夢で男を誑たぶらかし操あやつる……『夢魔』の神格だな、この阿あ婆ば擦ずれめ……！」
「ご挨拶ね。けど男を誑かしたのはあなたも同じみたいだけど？」
女はそう言って星一郎を見た。顔こそ笑っているが、その瞳にはどこか苛立つような色があった。
「けっこう、傷付いたのよ。このわたくし――レイラ・ヴィッカーズの誘惑を振りきって選んだのが、そんなつまらない女だなんてね」
「……そうかな？」
姉を侮辱され、そして今またディーナを侮辱する女へ、星一郎は皮肉な笑みを返した。
「僕ぼくには君こそつまらない女に見えるけど？　他の女の姿を借りて誘惑するなんて卑ひ怯きょうでこすっからい君よりは、素す直なおじゃないけど真まっ直すぐなディーナの方が、万倍もいい女だ」
「っ……素直じゃないのは余計だ！」
顔を赤らめたディーナに頭を叩かれる。
その様子を見ていたレイラは、今度こそその顔を不ふ愉ゆ快かいに歪ゆがめた。
「……もういいわ。多少はあなたに興味があったけど……ここで消えなさい」
レイラが右みぎ腕うでを持ち上げた。精せい巧こうな金属製の蛇へびが巻き付いた右腕を。
それに釣られるように、倒れ伏していたアルヴィンがむくりと起き上がった。
『お……ぉぉおお……』
罅ひびの入った鎧の隙すき間まから、虚うつろな声が漏れ出す。その声だけで、アルヴィンが操られているのは誰だれもが納なつ得とく

するだろう。
「何な故ぜわたくしが、アルヴィンごとき詰まらない男を真っ先に操り人形にしたと思う？　それは《風魔パズズ》の神格が、わたくしと実に都合が良いからよ」
　レイラの腕うでに巻きついた蛇がしゃらりと音を立てる。
　アルヴィンの身体がビクリと痙けい攣れんした。
「ふふふ……《風魔パズズ》は命を奪うばう悪あく霊りようの王。そしてわたくしに宿る神格もまた同様――生命の誕生を調節する役目を負い人間の命を奪う『地母神の眷けん属ぞく』。そしてその『地母神の眷属』たる神格を共鳴させてやれば――こういうことが出来るのですよ」
『お――おおおおおおおぉぅぅぅうう……』
　隙間風のような叫び声が空気を震ふるわす。粘着質とはいえあれほど発散されていたアルヴィンの悪意は、いまや欠片もなかった。
「さぁ、わたくしの操り人形よ！　存分に力を発揮なさいな！」
　レイラから畏光の輝きが発せられる。
　共鳴するように畏光の輝きを発したアルヴィンは、虚ろな咆ほう哮こうを上げながら上空へ飛び上がった。
『――お……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおぁぁぁぁぁぁぁおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおぁぁぁおおおおおおおおおおおおおおおおおぅぅぅぅぅぅうううううううううううぅぅぅぅぅ――――っっ!!』
　目も眩くらむ虹色の輝きが迸った直後、アルヴィンの身体から発せられたのは黒々と不吉な色を滲にじませた強風だった。止めどなく、休みなく、アルヴィンの翼のみならず、その甲冑の罅からももうもうと溢れ出す。
「これは……瘴しよう気きっ!?」
　強風に目を細めるディーナが漏らした。
　本丸庭園の木々が急速に枯れてゆく。芝生も枯れ草となり、地肌が剥き出しとなる。ばかりか、土すらが病み始めた。水分を失いかさか

さとなった土が黒い風に巻き上げられる。枯れ木も次々と根まで腐り果て、風圧に耐たえ切れず次々と倒れだした。
「いかがかしら？　『病』の権能を最大限に発揮した《風魔パズズ》の瘴気は？」
　レイラの声が黒い風に乗って届く。だが本人の姿は、吹きすさぶ瘴気の向こうに隠れて判然としない。
「まぁ、本来想定されていない出力の瘴気だから人形の負担も大きいけれど……所詮は人形だしね」
　腐り落ちてゆく景色の中、粘りつくような笑い声が木こ霊だまする。
「それでは、ね。わたくしは失礼するわ。せいぜい苦しみなさいな……」
　笑い声が徐じよ々じよに遠のく。
「待て！　この卑怯者め！」
　追おうとするディーナだが、その足が唐突に縺もつれた。
「ディーナ！」
　とっさに支えようとするが、星一郎の足からもまた力が抜け始めた。
　二人は縺れるようにして倒れてしまう。
「ぐっ……こ、れ、は……」
　二人を守る畏光の輝きが急速に弱っていた。まるで加護の光まで病み始めたかのように、虹色の薄膜が次々と輝きを失って虫むし喰くい穴状態となっていく。
「瘴気が強すぎる……これでは……ごほっ」
　ディーナは吐はき捨てようとしたが、その口から出てきたのは粘つく咳せきだった。咳をすればするほどに身体が屈かがみ、やがて自らの咳に耐えかねたように横倒しとなる。
「ディーナ……ごほっ……」
　星一郎は自分の咳せき込こみながらディーナに近寄る。倒れた彼かの女じよの顔はすでに真っ青だった。がたがたと身体が震え、まさし

く病人そのものの状態だった。
　それは、星一郎も同じだった。
　激しい悪寒に、ぶるぶると星一郎の身体が震えだす。
「ぐっ……ごほっ、ごふっ……ディーナ……」
　せめて〝疫風〟の風かぜ除よけになるように彼女に被かぶさる。だが、こんなものは焼け石に水だ。
　分かってはいても、星一郎にはどうしようもなかった。すでに、立ち上がるだけの抵抗力すらも冒されている。
『ぉ……おぉぉぉぉおおお

〝ここはお前の『精神の深しん淵えん』だ〟

振り向くと、黒い水面に突つき出た小さな岩場に、見知らぬ男が座すわり込んでいた。

見知らぬ、といってもはっきり姿形は見て取れない。男はボロボロのローブを頭から被って顔も見えない。男というのも、その声から判断しただけの事だった。

「精神の、深淵……いわゆる集合無意識、というやつですか？」

〝深淵は深淵だ。得体の知れないものが潜む、得体の知れない領域さ〟

男はそう言って肩かたをすくめた。

〝とかく近ちか頃ごろの人間は何かあるとやれ『集合無意識』だのやれ『阿あ頼ら耶や識しき』だなんて言うが、俺おれに言わせれば呼こ称しように拘こだわって想像を狭めるのは人間の悪癖だな。……ま、それは少なからず俺たちの所しよ為いでもあるんだが〟

「……それで、あなたは何者――いえ、何モノですか？」

段々明めい瞭りようになってきた星一郎は、目の前の男の正体に当たりを付け始めていた。

「あなたが……僕を選んだ《天命の書版》に宿った神格、ですか？」

〝そいつは二重の意味で不正解だ〟

男の声に笑いが混じる。だが不思議と馬ば鹿かにしているようには聞こえない。男の笑い声に妙な愛あい嬌きようと、深い知性が匂ってくるからだろうか。

〝まず、俺はお前に宿った神格じゃあない。それはこっちだ〟

男はそう言って、自分が座る岩場を指し示した。

〝次に、お前は選ばれたんじゃない。お前が選んだんだ〟

「僕が……？」

〝人間には運命を選び取る力がある。お前はかつて、それを俺に見せてくれた。そして今また、お前は運命を選び取った〟

そう言って、男は立ち上がった。

〝といっても俺はお前に打ち込まれた力と意志の残のこり粕かすみた

いなものだがね。本来の役目も《こいつ》を沈めとく重石なんだが……お前は自分の意志で《こいつ》を引き上げた。そして願いと覚かく悟ごを見せてくれた。だから、もう邪じゃ魔まはすまい。存分に振るうと良い。俺の最高傑作にして最後の息子である《こいつ》の権能ちからを〟

　男の足元の岩場――否、黒い水面に沈しずんでいた石版の表面に、無数の楔くさび形がた文字が浮かび上がった。浮かび上がった文字は凄すさまじい虹色の光を放ち、暗かった空間を、底の視みえぬ水面を極彩色に染め上げてゆく。

〝それと行き掛けの駄賃だ。お前が守ると誓った女に宿る神格の名を教えてやる。覚め醒ざめてもこれだけは覚えとけよ？　いいか、彼女に宿ったくそったれは《――――――》〟

※　※　※

「……う……」

　悪寒による震えが収まり、ディーナはうっすらと目を開けた。

　見上げた視界に、たくましい背中が映った。ディーナを守って立つその背中に、彼女は頼れる兄の姿を思い出した。

「……兄、様……？」

「――気付いたんだね、ディーナ」

　彼女を守る男がこちらへ顔を向けた。その顔が星一郎だと認にん識しきした瞬しゅん間かん、ディーナは慌あわてて身を起こして首を振った。

　――よりによってクリス兄様と間違えるだなんて！

　一生の不覚をごまかそうと星一郎を睨もうとしたが、

「せ、星一郎……その身体は……」

　ディーナの身代わりとなって瘴気を受けたからか、星一郎の上半身

を覆おおう衣服はぐずぐずになっていた。ほとんどボロ布となったその隙間から、目の覚めるような光が漏れ出している。胸に穿うがたれた古傷を中心として、次々と文字が――光り輝かがやく楔形文字が浮かび上がっているのだ。

〈聖楔者〉に刻まれる楔は、八はち芒ぼう星せいの『神デインギル』ひとつきり。だが星一郎の肌に浮かび上がる文字は『王エン』、『大地キ』、『深淵アプス』――その他にも様々な文字が次々と浮かび上がっている。

　それはまるで、彼自身が――

「まさか……見つからなかったんじゃない……初めから在った……その身の内に在ったというのか……？」

　ディーナは恐おそれ慄おののくように星一郎を凝視した。

「書版と……人が融ゆう合ごうしているというのか!?　そんな事が……」

「細かい解明は後回しにしよう。ますは、目の前の敵だ」

　星一郎の視線を追う。

　空中に浮かんで黒い風を吐き出すアルヴィンの輪りん郭かくは、すでにまったく様変わりしていた。自身が生成する瘴気に耐えかねたように、黒い鎧が風船のごとく膨らみきっていた。鎧の罅も刻一刻と大きくなり、その〝爆ばく発はつ〟が差し迫っていると分かる。

　ディーナはぎりぎりと奥おく歯ばを噛かみ締しめた。今は星一郎が放つ大出力の畏光に守られているが、その守りから出た瞬間にまた瘴気に侵されるだろう。

　悔しさに歯ぎしりし、ディーナは自らが掴つかむ権能武装を見み詰つめた。

「……情けない！　兄様ならば、こんな危機など物の数ではないのに……！」

「なら、お兄さんの力を貸してもらおう」

　そう言って、星一郎はディーナの背後に回った。身を寄せ、抱だき上げるようにしてディーナを立たせる。

ぴったりと背中に張り付く男の身体に、ディーナは状じよう況きようを忘れて赤面した。
「せ、星一郎！　一体何を――」
「――僕は、僕に宿った神名を識った」
自分を抱き上げる星一郎が耳元に顔を寄せて囁ささやく。吐と息いきが耳を擽くすぐり、ディーナは「んっ」と呻うめきかけた。
「不思議な気分なんだ……いろいろな知識が次々と浮かび上がってくる」
「ん、ぅ……せ、星一郎……」
「思い出した……うん、思い出したという感じだ。記き憶おく喪そう失しつの人が記き憶おくを取り戻した瞬間って、こんな感じなのかな？」
「ぁあっ……星一郎ぅ……んんっ……」
「その記憶の中に――ディーナ、君を選んだ神格の名もある」
「だっ、からぁ……っ！　星一郎!?　いま、なんと言った!?」
「君に宿った神格の名前だ。良いかい、ディーナ？　君に宿った神格は《――》」
その名を聞いた瞬間、ディーナは自分の心臓が大きく鼓こ動どうを打つ音を聞いた。まったく新しい鼓動が全身を駆け巡り、まったく新しい感覚が身体の隅々に染み渡っていく。
上じよう昇しようした体温の助けもあり、ディーナは生まれてからまったく経験のない、強く心地よい熱に心を震わせた。
「……分かる……解わかる……判わかるぞ、星一郎！　わたしは！　これがっ！」
「さぁ、ディーナ！　いまこそお兄さんの権能を――君の権能を！」
「ああ！　〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　主神の武具《雷らい霆ていの神しん槍そうマルン》よ！　ディーナ・チャレンジャーが其の遠き末裔すえたる〈神槍ブリューナク〉の名を借りて訴え奉る〟！」

　これまで借り物として、その名を唱えても応えることのなかった神槍の神格。だが、いま、彼女の呼び声に応え、権能武装が武者震いするように振動した。
「〝語り継がれしは武ぶ威いなる光！　天を灼やく火よ！　地を震わす轟とどろきよ！　今こそ〟――」
　ディーナは手にした大槍の穂先を天に向けた。
「――〝今こそ顕あらわれ出でて神威を示せ！〟」
　柄えを握にぎるディーナの右手の甲で『神』の刻印がこれまでで一番の輝きを放つ。
　魔力光を受けた〈ブリューナク〉の、その幅広の刀身が音を立てて展開した。三つの穂先を持つ槍――三叉戟トライデントへと形態カタチを移行した権能武装は、その刃はの間に小さな静電気を生じさせ、その電気エネルギーはあっという間に膨大な量へと増ぞう幅ふくされてゆく。
「貫け、〈輝ける神槍ブリューナク〉ッ！」
　放たれるは古今東西における神々の力の象しよう徴ちよう――雷。
　自然の脅威と比して何ら変わらぬ威力を秘めた光条が、地から天へと逆昇る。
　激げき烈れつで凄烈で攻こう撃げき的てきな白光が、黒い風を焼き払って突き進む。
　渦巻く黒い風を引き裂いて、光り輝く雷撃が天空に座すアルヴィンへと突き刺さった。
『おおおおおおおおおおぉぉぉぅうううううう……』
　奇しくも、自爆同然で発する濃密な瘴気が辛かろうじて威力を減じたものの、それでも畏光の輝きを焼く雷撃にアルヴィンが悲鳴を上げる。
　歪いびつな兜かぶとの奥おくの虚ろな瞳ひとみが、電光の残ざん滓しを纏う大槍とその主たる少女、彼女に寄り添う少年へ向けられる。
「アルヴィン・ヴァイス！」
　ディーナが〈輝ける神槍〉の三叉の矛先を向けて叫ぶ。

「操られていたとはいえ容赦はしない！　貴様はここで――討つ！」
『ぉ……おお……』
　膨れ上がった鎧をまとったアルヴィンの虚ろな呻きが、激しく震えはじめる。
『ぉ……おおおお

人間。それこそがディーナ・チャレンジャーを選定した神格の名。
〈聖楔者〉の原型とも云える聖王が選定者に与あたえるのは『他の神格の力を借り受ける権能』。兄の《ブリューナク》の神格を使えたのはその権能があったからだったのだ。
「〝遍あまねく神々よ！　深淵なる慈悲を以って、聖王の代行たる我に力を貸し与え給え！〟」
　だが、あくまでそれは借り受ける能力。借り受けた権能を真に引き出すには足りない。
　……もしもそれが、彼女一人だったならば。
「――星一郎！」
　呼びかけに応えて寄り添うように背後に立った星一郎が、自分の右手をディーナの右手へと伸ばして来る。
「〝神デインギルの威光よ！　神の門バベルの鍵よ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！〟」
　星一郎もまた、己おのれを選定した――いや、己の中に宿る神格へと呼び掛ける。
　彼を選んだその神格を、ディーナはすでに識っていた。その神格は、彼女を選定した《ギルガメッシュ》と縁深いものなのだから。
「〝英雄の天敵《全き人間エンキドゥ》よ！　宿儺星一郎が汝の意志を代行する！〟」
《全き人間エンキドゥ》。
　半神半人の王に優まさるとも劣おとらぬ存在として造られしもの。聖王の友となりて、ともに神話と化した神造人間。
　それこそが星一郎に宿った神格の名――
「〝英雄の天敵にして並び立つ友！　我もまた、友を助け導みちびく力とならん！〟」
　星一郎の八芒星が刻まれた右の掌てのひらが、ディーナの右手の甲の刻印に重ねられた。経路に新たな力が合流し、怒ど涛とうのごとくディーナの中へ流れ込んでくる。
「あっ……ああっ！」

星一郎の――《エンキドゥ》の権能が流れ込んでくる。それは、無償の親愛と限りない肯こう定ていの意思だ。まだ行ける、君の力はこんなものじゃない――言葉にすればそれだけの、しかし言葉に込められない万感の意思が、ディーナの細胞の一片一片に染み渡り、賦活し、勇気を与えてくれる。

「あっ……ああっ――ッッ！」

熱い――熱い！

身体が、心が、燃えるように熱い。

いつしか、ディーナは涙なみだを流していた。

なんでも出来る。この男が、この相棒がいれば、自分はなんだって出来る！

心の深淵から沸き上がる強い想おもいが、ディーナに眠っていた知識を引き出してゆく。

「――〝来い、我わが随騎ドライグ！　我が足、我が鎧、我が牙きばとなれ！〟」

呼び声に従い、ディーナの随騎が瘴気を蹴散らして到来した。

ディーナは星一郎とともにドライグに跨またがると、随騎に備わった機能を解放させる。

「〝我が随騎よ、爪つめを立て、顎あごを開け！〟」

機械仕じ掛かけの使し役えき獣じゆうは、その躯く体たいに隠かくされたワイヤーをアンカーとして地面に深く打ち付けてその身を固定する。さらに正面の上部から伸びた副腕サブアームが〈輝ける神槍〉を掴む。

高速移動の為の魔導機は、いま、強力な砲撃の為の『砲台』と化したのだ。

「星一郎！」

「僕も支える！　全力でぶっ放せ！」

優しく重ねられた右腕と、しっかり力強く自分を抱きとめる左腕と、背中越しに熱い鼓動を伝えてくる胸板。身近に感じる頼もしき存在感に背中を押され、ディーナは〈輝ける神槍〉を上空の瘴気の中心へと構える。

三さん叉さ戟げきとなっていた神槍が、さらなる変形を開始する。刃が展開し、その穂先を五叉へと変えた。

神槍の尖せん端たんに電気エネルギーが収束してゆく。新たに展開された二本の矛先がそのエネルギーを増幅する。果たしてそのエネルギー量は先さき程ほどの倍か、乗か、それとも――

星一郎に宿りし《全き人間エンキドゥ》の『他の〈聖楔者〉の権能を高める権能』によって顕けん現げんした、権能武装〈輝ける神槍〉の最大出力形態。

五叉戟に集つどう雷らい光こうが余波で黒い瘴気を灼き、鮮あざやかな火花を周囲に閃ひらめかせる。

「撃て、ディーナ！」
「穿ち貫け、〈輝ける神槍〉！」
　視界が白に染まり、聴覚が意味をなくす。
　古の巨きよ塔とうの如ごとく。
　猛たける昇龍の如く。
　大地から天空へ迸る極大の稲いな妻ずまは、まさしく神の力の強大なることを世界へと知らしめんと夜空を白く染め上げる。
『ぉぉぉおおおぉぉぉぉぉぉ
――――――――――――――』
　黒き瘴気はそよ風すら残さず、白く灼かれて消えていった。

5

「う……ん……」
　星一郎は眼めを開けようとしたが、まだ視界は白くチラついていた。
　視界が白く染まり、その刹那に襲いかかった衝撃に翻ほん弄ろうされて地面に投げ出されたまでは覚えているが、数秒ほど意識が途と切ぎれていたようで、うまく今の状態を把は握あくできない。自分の鼻と口、顔半分を覆うこの柔やわらかな感触は一体何なのだろうか？
　瞬まばたきを繰り返すと、徐々に視覚が戻ってくる。視覚が戻ってくると同時に、嫌いやな予感が湧き上がる。
「ふぐっ!?　ふぬっ……！」
　目の前にいつの間にか、肌色の谷間が迫せまっていた。思わず喋ろうと顎を動かすと、その肌色の谷間がなんとも柔らかげに歪ゆがむ。戻ったはずの視界まで歪みそうだった。
「う……ん……」
　すぐ上から声がしたので視線を向ければ、当然ながら自分の呼吸器をふさぐ圧あつ倒とう的てきボリュームの胸の持ち主である、金きん

髪ぱつの美少女の顔が間近にあった。
　瞼まぶたが震え、ゆっくりと開かれる。
　彼女もまた視界が白く染まっていたのか、何度か瞬きを繰り返す。そして、自分の置かれた状況――自分の胸が思いっ切り男の顔に被さっているのを把握し、顔色が一気に朱に染まる。
「こっ、ここ――この破廉恥漢が！」
「頭突きっ!?」
　怒いかり心頭に発したディーナが、その頭を反射的に振るってきたヘッドバッドは、互いの額の一番痛いところをぶつけ合う結果になった。
　星一郎とディーナは痛みに頭を押おさえ、互たがいに反対方向へと転げ回った。
「ぐっ、ぐぐ……何が『僕も支える』だ!?　まったく支えられていないではないかっ！」
　ディーナが涙目で睨にらんでくる。
「それともワザとか!?　狙ったのか貴様はっ!?」
「……その対価がこれじゃ、割に合わないよ」
　赤く腫れたたんこぶを指す星一郎の言に、同じように額を腫らしたディーナが「ほほぅ？」と剣けん呑のんに笑った。
「それは、まだ痛みが足らないという意味か？」
「それより、アルヴィンは？」
　放っておくといつまでも続きそうなやりとりを中断させると、ディーナは不満げに眉まゆ根ねを寄せながら傍らに落ちていた〈輝ける神槍〉を拾い上げた。
　二条城本丸は黒い焼け野原となっていた。歩く度に灰が舞まう。
　余波だけでこの有り様。神々の武威の象徴たる『神槍』の権能に相応しい威力であった。
　それだけの権能を発揮した反動か、ディーナの随騎もまた焼き焦げてその輪郭を大きく歪めていた。もともとアルヴィンとの戦せん闘とうで傷付いていたため、〈輝ける神槍〉の砲台としての役割を十全に

発揮できなかったようである。
「おまけに、畏光がなかなか戻らない……最大出力は、最後の手段だな……」
　傷付いた随騎を神槍へと回収し、ディーナは自戒するように呟つぶやいた。
　そして、星一郎とディーナは焼け野原の片隅に投げ出された人ひと影かげを発見した。
《風魔パズズ》の〈聖楔者〉、アルヴィン・ヴァイスは、かろうじて生きていた。ひゅーひゅーと苦しそうな呼吸を繰くり返かえしている。
　二人は次に、アルヴィンのすぐ横に転がった黒い塊かたまりに目を向けた。
　焼き焦げて煤すすだらけとなった、アルヴィンの〈第二書版〉であった。権能武装が砕くだかれ、本来の姿へと回帰したのだ。
　焼き焦げた〈第二書版〉に槍の穂先を向け、ディーナが改めて星一郎に顔を向けた。
「……良いのだな？」
「僕の戦たたかいは、守ることだ」
　星一郎はディーナをまっすぐ見返して頷うなずきかけた。
「君の戦いは、勝つことだ。だからこれは、君のすべきことだ」
　ディーナは頷き、〈輝ける神槍〉の切っ先を、〈第二書版〉へと突き立てた。
　びしり、と〈第二書版〉にヒビが入ると、焼き焦げた金属の装そう丁ていも、魔導晶体の頁ページも盛大に飛び散った。飛び散った欠片かけらは虹にじ色いろの光の粒となり、さらに無数の文字となる。
　アルファベット、ギリシャ字体、ラテン字体――様々に混在した輝く文字の群れは、やがて原初の文字、神話の原版トウプシマテイに記されし楔形文字へと還かえってゆく。
　ディーナは権能武装たる〈輝ける神槍〉を〈第二書版〉へと戻し、その頁を開いた。

宙に乱らん舞ぶする《風魔パズズ》の神格と神性を記述する楔形文字の群れは、ディーナの〈第二書版〉へと吸い込まれてゆく。文字が吸い込まれる毎に〈第二書版〉の頁がバラバラと捲めくれ、そこに文字が刻まれていった。

最後の文字が吸い込まれると同時に、〈第二書版〉がパタンと閉じられた。

「……ようやく、ひとつ……！」

神格を回収した〈第二書版〉をぎゅっと胸むな元もとで握りしめ、ディーナは瞼を閉じて睫まつ毛げを震わした。

まだひとつ。

だが、確かなひとつ。

願いに近づく、確かな一歩。

それを成し遂げ感慨に震えていたディーナは、眼を開けると星一郎に向き直った。

「……あ――」

口を開きかけた彼女に、星一郎は手の平を向けた。

「その言葉は、まだ早い。まだ早いよ、ディーナ」

「……そうだな。ああ、その通りだ」

そう言ってディーナは笑った。ずっと厳しく張り詰め、ちょっと怒ったような顔ばかりを向けてきた彼女が、はじめて星一郎に見せる笑え顔がおだった。

もしかしたらその笑みですらも早いのかも知れないが、星一郎は黙だまって彼女の笑みを見詰めた。その笑顔こそが、星一郎の選択が間ま違ちがいではなかった、何よりの証あかしだったから。

「……そうだな。これからも頼たのむぞ、星一郎」

「了りよう解かいです、我が姫君マイ・プリンセス」

星一郎が恭しく頭を下げると、ディーナはなぜかむっと唇くちびるを尖とがらせた。

一体どうしたのかと首を傾げていると、

「……姫はやめろ。わたしはそんな柄じゃないし……お前がかしこま

ると、馬鹿にされている気分になる」
　そう言って、ぷいっと顔を背けた。
　恥ずかしがっている様子が妙みように可愛らしくて、星一郎は思わず「ぷっ」と吹ふき出だした。
「な、何が可お笑かしいのだ！　おい、星一郎！　笑ってないで説明しろ、星一郎！」
　ますます大きくなる笑い声と怒った声は、いつまでも二条城跡で響ひびき続けるのだった。

終章

1

「……まさか、こんな事になるとは……」
　魔ま力りよく災害の後に再建された新京都タワーの展望台の天てん井じように立つレイラが、震える声を漏らした。
　アルヴィンを暴走させた後、まさに高みの見物を決め込もうと選んだ観客席であった。離はなれていても、それが真夜中であっても、彼女には問題とならない。彼女を選定したのは『夜の魔女』とも呼ばれる神格であるのだから。
「《至高の聖王ギルガメッシュ》……『最強の力を持つ最弱の〈聖楔者ヒエロス〉』も今となってはとんだ皮肉だわ。あれがあの女の最弱の状態だなんて……」
　回収した神格の権能を借り受ける『英雄』の権能。それはつまり『摩天の夜宴バビロン・ナイト』を勝ち進む毎に強くなっていくということだ。
　神々の武威の象徴たる『神しん槍そう』の神格を持つクリストファ・チャレンジャーも『摩天の夜宴』の優勝候補とされていたが、今やディーナ・チャレンジャーはそんな兄に優るとも劣らない最大級の脅威だ。
「そして……宿すく儺な星せいーいち郎ろう……」
《全き人間エンキドゥ》の〈聖楔者〉。しかも、《天命の書版》そのものをその身に宿すなどという規格外。〈聖楔者〉としても異常な身体能力や畏光を打ち砕く拳こぶしは、そんな規格外が生み出した能力であろうか。
『英雄』と『英雄の友』。あの二人の組み合わせは悪夢のようだ。
様々な権能を、たった二人で自在に引き出せる。
「まずは前菜代わりと考えていたらとんだ事だわ……」

頭の痛い存在の出現に爪を噛もうとしたレイラだったが、ハッと気付いて右腕を振ふり上げた。腕に絡からみつく蛇が鞭むちのように飛び出し、襲いかかった『何か』をすんでで弾はじいた。

弾かれ、足元に突き刺さったのは矢だった。魔力で形成されたものだろう。すぐに光に還かん元げんして吹き消えていった。

「ありゃりゃ。防がれちゃった」

脳天気な声が降ふってきた。レイラが顔を上げれば、展望台の更さらに上に延びるアンテナの先せん端たんに、いつの間にか人影が立っていた。

「まっ、様子見の一いち撃げきじゃこんなもんか」

声の主はひょいと飛び降りると、羽のような軽やかさで展望台の天井に降り立った。

東洋系の少女だった。脳天気な声とは裏腹に、その立ち振舞には隙すきというものがまったく見られない。

「……一応確かく認にんしますが、〈聖楔者〉ですわね？」

「うん。そうだけど？」

「再現史し跡せき以外での戦闘は、七聖条約に反しますわよ？」

「……ぷっ。くくっ……あはははは！　それをアンタが言うんだ？」

少女はケラケラと笑い転げた。憎らしいことに、そうやって笑っていても隙がない。

「あはははっ！　あー、面白かった。面白かったから、今夜は見逃してあげるよ」

「……随ずい分ぶんな物言いですね。わたくしが見逃すとは一言も言ってませんが？」

「なら戦やる？　たぶんアンタの権能じゃ、あたしには敵かなわないと思うけど？」

「……」

「ま、あたしもあんまりノリ気じゃなかったからさ。ほんじゃ、バハハーイ」

やはり脳天気に手を振って、少女はひょい、とタワーから飛び降りた。

レイラは慌てて下を覗のぞき込こむ。

少女の姿は、すでに影かげも形もなかった。

「……忘れてましたわ……」

笑えみを浮うかべようとして失敗した歪な表情で、レイラは呟いた。

「相手は〈聖楔者〉……神の力を振るう者たち……誰だれも彼かれもが化け物だらけだと……」

2

二に条じよう城じようの戦いの次の日。

魔ま術じゆつ儀ぎ式しき『摩天の夜宴』と、超常の存在たる〈聖楔者〉の存在が明かされても、新京都の住人たちはいつもと変わらぬ日常を過ごしていた。カルディア委員会から提供された戦闘映像に関する話題はそこかしこでなされていたが、それも話題の映画を語るような雰ふん囲い気きだ。

この街では、魔ま導どうの理はすでに生活の一部だ。あるいはこうした土壌を造るため、カルディア委員会は魔導工学先進都市構想を進めたのかもしれない。

昼食の買い物に出かけた星一郎は、新京都の光景を眺ながめながらそんな事を思った。

カルディア委員会がネット上に流した『二条城の戦い』には星一郎の顔も映っていたが、通りすぎてゆく人々が彼に注意を向けることはない。委員会が映像に施した認にん識しき阻そ害がいは正常に作動しているようだ。

「……っと」

周囲を見回していたせいで注意が疎おろそかになっていたか、誰かと打ぶつかってしまった。

視線を正面に戻すと、星一郎より二回りほど幼い少女が尻餅を付いていた。燃えるような赤毛の、可愛かわいらしい少女だ。
「Sorry. Are you all right？」
「あ、はい……大だい丈じよう夫ぶ、です」
少女は大きな瞳をびっくりしたようにぱちくりさせたが、しっかりした日本語で答えた。
手を差し出すと、少女は迷うように見つめたが、やがておずおずと握り返した。彼女を立たせると、星一郎はしゃがんで視線を合わせる。
「ごめんね。余よ所そ見みをしてた」
「あ、いいえ……わたしも、急いで走ってた、から……」
少女はちらちらと視線を逸そらしながらもじもじと答えた。人見知りする性格らしいので、星一郎は立ち上がって視線の距きよ離りをあける。案の定、少女はちょっとほっとしたように息を吐ついた。
「なら、気をつけてね」
「は、はい……あ、あの！　お兄さん！」
「なに？」
「あ、あの……ち、地下鉄の駅はどう行けばいいのでしょうか……？」
ぎゅっとスカートを握り、勇気を出して問とい掛かけた少女に、星一郎は軽く微笑ほほえんで「こっちだよ」と先導した。
たいした距離でもないのですぐに辿たどり着つく。赤毛の少女はホッと胸を撫なで下おろすと、星一郎に向かって深々と頭を下げた。
「あ、ありがとうございます！」
「どういたしまして。気を付けてね」
かるく手を振って別れると、少女はしばらくぶんぶんと一生懸命に手を振っていた。彼かの女じよは最後にもう一度ぺこりとお辞じ儀ぎをして、駅の階段を足早に下っていった。
温かな気分で家に戻ると、買い物袋をキッチンに置き、疲つかれてまだ眠っているであろうディーナの部屋へ向かった。昨晩の戦いの

後、疲れきった二人は家に辿り着いた直後に倒たおれるようにして眠ってしまったのだ。

この場合、星一郎を褒ほめるよりはディーナの方が正常であると見るべきだろう。あれほどの激戦で昼前に起きだす星一郎の回復力の方が異常なのである。

ディーナが眠る客間のドアを叩たたくが、中から返事はない。再度ノックしてもやはり反応はない。星一郎は諦あきらめて、手洗いうがいのために洗面所へ向かった。

「――あ」

「あ――」

洗面所のドアを開けた星一郎と、洗面所で服を脱いでいたディーナが、間の抜ぬけた声を唱和させた。

これは言い訳は聞かないなと、星一郎はごくりと息を飲んだ。

「……何ど処こに行っていたんだ、星一郎？」

下着姿、それも下半身のショーツだけで、上半身はタオルを首に引っ掛けてかろうじて胸の先端が隠れているだけのディーナが、表面上は冷静に問とい質ただした。

ここで目を逸らしたら、殺やられる。

猛獣と睨み合う心境で、星一郎は重力に負けず張り出したディーナの連峰と対峙した。

「……食材の買い足しに。戦いの後だし、力の付くものを、と思って」

「……そうか」

「うん……」

「……」

「……」

無言での睨み合いが続く。

やがてその静せい寂じやくを、ディーナがこほんと咳払いをして吹き払った。

「星一郎。わたしが昨晩勝てたのはお前のおかげだ。感謝している」

「いや……それほどでも……」
「そこで、だ。わたしは騎士として戦ったお前に、何か報いらねばならないと思う」
「それは……余計な気き遣づかいだよ。僕ぼくは僕のために戦ったんだから」
「それでは、わたしの気が済まない。だが、わたしがお前に与えられるものは少ない。金銭で報いるのは、お前の願いを汚すだろう。だからといって料理で感謝の印としようにも、残念ながらわたしの腕うではお前に及ぶべくもない」
「はあ……」
「そこで、だ！」
　ディーナは胸を張り、胸に手を当てて言い放った。
「お……お前に！　わたしの肌はだを清める栄誉を与える！」
「は、はい！　……はい？」
「聞こえなかったのか!?　わたしの沐もく浴よくに付き従っても良いと言っているのだ！　う、生まれたままの肌を晒すのは、これ以上にない信頼の証だからな！」
「……それは、ちょっと……」
「お、お前は！　わたしの信頼と感謝の証をいらないというのか!?」
「そうじゃないけど……」
「なら問題ない！　わたしは先に入っている！　用意ができたら入って来い！」
　そう言って、ディーナは風呂場に入って行った。入った後、手だけをドアから出して、脱ぬぎ忘れたショーツを洗濯カゴに放ほうり、バタンと閉じる。少しして、ノブを捻ひねる音と、シャワーの流れ出す音が響いてきた。
「……どうしよう……どうすれば……」
　磨りガラスの向こうから漏れるシャワーの音に包まれ、星一郎は頭を抱かかえる。
「……そうだ。小さい頃ころ、姉さんや刀と羽う華かといっしょにお

風呂に入ったじゃないか。そう、なんてことない。なんてことは、ない……大だい丈じよう夫ぶ、大丈夫だ……」

　十年以上前の経験を心の拠より所どころに、星一郎は覚かく悟ごを決めて風呂場のドアに手を掛けた。

※　※　※

　星一郎が風呂場のドアに手を掛けたまま固まっている頃。その、はるか上空。
「ふふっ……ようやく来たわ、新京都……！」
　雲と同じかそれよりも上の高みに、木の葉状の物体が浮かんでいた。サーフボードに見えなくもないが、空を軽やかに舞うボードなどあるはずがない。
　既知の法則から逸脱した、魔ま術じゆつ的てきな存在である。
　その空飛ぶボードの上で、一人の少女が黒くろ髪かみをなびかせていた。日本的、と言うのだろうか。すっきりとした柔和な面おも立だちの美少女であった。
　黒髪の美少女は、四角く区切られた新京都の町並みを見下ろして嬉しげな声を漏らす。
「まさか、あなたも〈聖楔者〉になっていただなんて……これはもう運命だわ！」
　少女は夢見るように胸の前で両手を握り締めると、幸せそうに表情を緩ませた。
「待ってて、星くん！　忌いみ寸き刀と羽う華か、いま会いに行きます！」

THE GILGAMESH KNIGHT：1st Chapter〈Awake〉closed.

独白烏のモノローグ

　――西暦二〇一三年の肌寒くなってきたある日のこと。
担当「ちょっと企画出してくれない？」
翅田「いいですよ。どんなのです？」
担当「でっかい武器とかっこいい乗り物が出てくるヤツ」
翅田「了解～」
　――およそ一ヶ月後、二〇一三年の暮れ。
担当「おめでとう。君の企画がＨＪの四十五周年企画に選ばれたから」
翅田「ファッ!?」
担当「あ、ちなみにキャラデザとメカデザはそれぞれ――」
　――この時の僕の顔を鏡で見ておきたかった。おそらく『鳩が豆鉄砲を食らった顔』の好例がそこにはあったことでしょう……

　はじめまして。またはお久しぶりです。
　翅はね田た大だい介すけでございます。
　月刊ホビージャパン創刊四十五周年記念企画第一弾、『神話大戦ギルガメッシュナイト』、満を持してお送りいたします！
　責任重大な役目に身が引き締まる思いです。いや、締まってるのは胃なのですが（笑）
　この企画は当初、古今東西の神々の代行者が現代の主神の座をかけて争い合う、異能バトルロイヤルでした。しかし、ある程度神話を限定しておいた方が締まりが良いということになったのですが、当初のごった煮感も捨てがたい。そこで、昨今ようやく日の目を見始めている『バビロニア神話』をモチーフとすることにしました。
　ちょっとでも神話を齧かじった設定マニアな方々ならご存知かと思うのですが、古代オリエンタルのシュメールから芽吹いたバビロニア神話には、ヨーロッパ圏やアジア圏の神話へ多大な影響を与えた『汎

バビロニア主義』という考え方があります。日本でも「皇すめら」の語源は「シュメール」だなんて説が出るくらいです。

そういったワケで、バビロニア神話群でももっとも有名な『ギルガメッシュ叙じよ事じ詩し』よりタイトルの一部として名前を拝借し、様々に翻訳された神話をオリジナルへと回帰させる神話再編バトルファンタジー『神話大戦ギルガメッシュナイト』へと至りました。

本作のキャラクターデザインは『すーぱーそに子』でお馴染みの津つ路じ参さん汰たさん。可愛い顔と裏腹なワガママボディなヒロインたちが立体化されると考えるだけで、よだれが出てきますね……ぐふふ。

メカニックデザインは石いし渡わたマコトさんに担当していただきました。チェインバーやヴァルヴレイヴのデザインも記憶に新しく、最近ではとうとうガンダムのデザインも！　設定魔のメカオタクとしては感かん無む量りようです！

挿さし絵えを担当してくれたＲｙｕｋｉさんは、挿絵のお仕事は初めてということですが、イラストはどれも色っぽい！　とくに圭けい子こ叔お母ばさんとか、実にけしからん。

今後、本作のキャラクターはフィギュアもメカもお任せなアルターさんと、ＨＪ自社ブランドのＡＭＡＫＵＮＩから立体化されるとのことです。

とまぁ、そんな鉄壁の布陣に囲まれて、ストーリーが一番のペーペーというのが実にプレッシャーですが、微力ながら粉ふん骨こつ砕さい身しんで臨ませていただきます！

まだ始まったばかりのこの作品、皆様の温かい声援と厳しい批評とをお待ちしております。出来ますならば、末永くお付き合い下さいませ。

二〇一五年睦月　　翅田大介